わくらばにの歌　たま〳〵行き逢つて賴もしく思つたものの、對面も出來ず何の甲斐もありませんでしたね。

年頃のとだえも　あまり長く無沙汰してゐて手紙をあげるのもきまりがわるくなりましたが、私といふ人は、心中には始終思ひ續けて居つて、遠い昔の事も只今の事のやうに思はれる癖です。

すき〴〵しう　好色めかしくて一層憎まれるでせう。河内本惡し。

昔にはすこし　源氏は昔よりはすこしは私を疎んじて居られようかと心配してゐましたが、相變らずの心懷しい御心であられるのが一入ありがたい事です。

珍らしきにや　源氏の手紙が珍らしく思はれて返事せずには居られなかつたのか。

逢坂の歌　君と私との對面はどうした對面なので、かう繁き歎の中を往來しなければならないでせう。

あはれもつらさも　空蟬は、その可憐な所も冷淡な所も共に忘れ得ぬ種として君に思ひ込まれて居つた女故。

しを、さはおぼし知りけむや。

わくらばにゆきあふみちを賴みしも猶かひなしや潮ならぬ海

關守の、さも羨しく、めざましかりしかな」とあり。「年頃のとだえもうひ〳〵しくなりにけれど、心にはいつとなく只今の心地するならひになむ。すき〴〵しう・いとど憎まれむや」とて賜へれば、忝くてもていきて、「なほ聞え給へ。・・・・・・・・昔にはすこしおぼしのく事・・あらむと思ひ給ふるに、同じやうなる御心・のなつかしさなむいとどありがたき。すさびごとぞようなき・事と思へど、えこそすくよかに聞えかへさね。女にては負け聞え給へらむに、罪許されぬべし」などいふ。今はましていと恥かしう、よろづの事うひ〳〵しき心地すれど、珍らしきにや、え忍ばれざりけむ。

「逢坂の關やいかなる關なれば繁きなげきの中を分くらむ

夢のやうになむ」と聞えたり。あはれもつらさも、忘・れぬふ

常陸の守　常陸は親王が大守として任ぜられる國故、正しくは介といふべきであるが、俗には斯くいふ。

子ども　紀伊守や、右近將監など。

命の限りあるものなれば　以下常陸介の心中。

この人　空蟬の爲にわが魂を死後に殘しておきたいものだ。

心にえとどめぬものにて　命といふものは思ふやうに止められぬもので。

暫しこそ　當座の間こそ子供達も、父上があんなに仰しやつたものをなどと情ありがほするけれども。

しとおぼしおかれたる人なれば、折々はなほ宣ひ動かしけり。

かかる程に、この常陸の守、老のつもりにや、惱ましうのみして物心細かりければ、子どもに、只この君の御事をのみいひおきて、「よろづの事、只この御心にのみまかせて、わがありつる世に變らで仕うまつれ」とのみ明けくれいひけり。女君、心憂き宿世ありて、この人にさへおくれて、いかなるさまにはふれ惑ふべきにかあらむ、と思ひ歎き給ふを見るに、命の限りあるものなれば、惜しみとどむべきかたなし、いかでかこの人の・・御ために殘しおく魂もがな、わが子どもの心も知らぬを、と、うしろめたう悲しき事にいひ思へど、心にえとどめぬものにて・・亡せぬ。暫しこそ、「さ宣ひしものを」などなさけづくれど、うはべこそあれ、・・・つらき事多かり。とあるもかかるも世のことわりなれば、身一つの憂き事にて歎きあかし暮す。・・・只この河内の守のみ・昔よりすき心ありて、すこしなさけがり

いとあさましき心　繼母に戀する如き大それた料簡。
憂き宿世ある身にて　自分は不遇な身の上で。
ある人々　附添ふ女房達。
あいなの　つまらぬ賢女ぶりをしたものだなどと世間で評判してゐるやうだ。

数ならずとも、お・(も)ぼし疎まける。河内「あはれに宣ひおきしを、で・・(何事をも)・宣はせよ」など、つゐそうし寄りて、いとあさましき心・・(ほこ)の見えければ、憂き宿世ある身にて、かく生きとまりて、はて／＼は珍らしき事どもを聞き添ふるかな、と人知れず思ひ知(沈み)りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。ある人々・(も)、いふかひなしと思ひ歎く。守もいとつらう、河内「おのれを厭ひ給ふ程に、残りの御よはひは多く物し給ふらむ、いかでか過ぐし給ふべき」などぞ。あいなのさかしらや・など・ぞ侍るめる。

前齋宮 六條御息所の女で秋好（あきこのむ）と申す。御年二十二。
中宮 藤壺は賢木巻に入道して薄雲女院と申したが、今も昔の儘に中宮と申すのである。中宮がこの入内に同意の事は澪標巻の末にあつた。
大殿 源氏。
院 朱雀院の御耳にはひるのを源氏が憚つて。朱雀院が秋好に御心のあつた事も澪標の末にあつた。
親めき聞え給ふ 親代りになつてお世話申される。
御せうそこなど 以前から齋宮へ御消息なども絶えて居つたのだが。
うちみだりの箱 巾箱の事。もと、櫛笥に添へた手拭入であつたが、後には化粧道具や雜物を入れるやうになつた。
くぬえかう 薫衣香。
百歩のほかを 遠くまで匂ふ意。名香に百歩香（ハクブカウ）があるからそれをきかしてある。一歩は六尺ともいふ。
わざとがまし 特にありあはせでなく、特に調製されたやうに見える。
殿も その贈物が届いた時は丁度源氏も來合はせて居られた時で。
女別當 齋宮の女官。
差櫛 髮に飾る櫛で、髮梳用のものではない。
心葉 飾花。

前齋宮の御參りのこと、中宮の・御心に入れて催し聞え給ふ。こまかなる御とぶらひまで、取り立てたる御後見もなしとおぼしやれ(り)ど、大(臣)・殿は、院にも・聞召さむ事を憚り給ひて、二條の院に渡し奉らむことをも・、このたびはおぼしとまりて、只知らずがほにもてなし給へれど、大方の事どもは、取りもちて親めき聞え給ふ。院はいと口惜しく思召・せど、人わろければ、御せうそこ(く)など(も)・絶えにたるを、その日になりて、えならぬ御よそひども、御櫛の箱、うちみだりの・箱・、香壺・・・(などやう)の箱ども世の常ならず。くさぐさの御・たきものども、くぬ(ん)えかうまたなきさまに、百歩のほかを多く過ぎ匂ふまで、心殊にととのへさせたまへり。おとど見給ひもせむにと、かねてよりやおぼし設けけむ。いとわざとがましかめり。殿も渡り給へるほどにて、かくなむと女別當御覽ぜさす。只御櫛の箱の片つ方を見給ふに、盡きせずこまかになまめきて、珍らしきさまなり。差櫛の箱の心

別路にの御歌　伊勢下向の折に再び京に歸り給ふなといつて別の御櫛をさしてあげた言葉を口實にして神があなたと私との仲を止めだてなさるのか。

わが御心ならひの　無理な戀に熱中する自分の生憎な癖を考へて見て。

かのくだり給ひし　賢木卷三九七頁參照。

かう年經て　かく數年後に齋宮が歸京して、朱雀院の戀も遂げられる時になつて、かうした齟齬のある事を院が何と思召すだらう。

我になりて　我身になつて考へて見ても心の動搖しさうな事だと、源氏はそれからそれへと考へて見るとお氣の毒で。

つらしとも　源氏が朱雀院に對して。

この御返りは　源氏が女別當を以て齋宮に申す詞。この御返歌はどんな風になさるお積りでせう。この御歌以外に院からお手紙はなかつたか。

葉(は)に、

(朱雀院)別路に添へし小櫛をかごとにて遙けきなかと神やいさめし

おとどこれを御覧じつけて、おぼしめぐらすに、(院に對して)いと忝くいとほしくて、わが御心ならひのあやにくなる身をつみて、(齋宮下向の折)かのくだり給ひしほど、(院の)御心におもほしけむ事、か(く)う年經て歸り給ひてその(御)志をもとげ給ふべき程に、かかるたがひ目のあるを、(院の御心に)いかに思すらむ、(帝位を退き閑散な御身分故)御位を去り物しづかにて、世を恨めしとやおぼすらむ(など)、我になりて心動くべきふしかな、とお(も)ぼしつづけ給ふに、いとほしく、何に斯く(冷泉院に入内の事)あながちなる事を思ひはじめて、(朱雀院を)心苦しく(う)おぼし惱ますらむ、つらしとも思ひ聞えしかど、又なつかしく(う)あはれなる(院の)御心ばへを、など思ひ亂れ給ひて、(暫く)と(物思に沈んで居られた)ばかりうちながめ給へり。(源)「この御返りは、いかやうにか聞えさせ給ふらむ。又御せうそこもい(く)かが」など聞え給へど、(女別當心)いと(院からの御文はえう取出さない)傍痛ければ、御文はえ引き出でず。(齋宮)宮はなやましげにおぼして、

いとあるまじき　御返事なさらぬは宜しからぬ事です。

古へ　伊勢下向の當時。

故御息所　御母六條御息所。

わかるとての歌　お別の際に、再び歸京するなと仰せられた御詞も、その折は祝の言葉とばかりきいてゐましたが、京にかへつた今になつてしみ／＼悲しさを味はつてゐます。（賢木卷三九七頁參照）

御返りをいと　この御返歌を見たくお思ひになるけれども、さうとはえ仰しやらない。

この御けはひも　朱雀院三十四齋宮二十二。

かく引きたがへ　かういふやうに捻ぢまげて似合はぬ緣組をさせる事を、齋宮が內心不快に思ひはせぬかなど、氣をまはさぬでもいゝ事までも源氏は氣をまはして、心配なさるが。

御返り(事)いと物うくし給へど、「(御返事せぬのも)聞え給はざらむも(は)いとなさけなく忝かるべし」と、(女房達)人々そそのかし煩ひ聞ゆるけはひを(源氏が)聞き給ひて、(源)「いとあるまじき御事なり。(形式だけ)しるしばかり聞えさせ給へ」と聞え給ふも、いと(ど)(齋宮の心に)恥かしけれど、古へ(を)おぼし出づるに、(院の御さま)いとなまめき淸らにて、いみじう泣き給ひし御さまを、そこは(どことなく)かとなくあはれと見奉り給ひし(齋宮の)御をさな心(地)も、只今の事とおぼゆるに、故御息所の御事なども、かきつらねあはれにおぼされて、ただ斯く、

(齋宮)わかるとて遙にいひしひとこともかへりて物は今ぞ悲しき

とばかりやありけむ。(御)御使の祿しなじなに賜はす。(源氏)おとどは(かへり)御返をいとゆかしう(と)お(も)ぼせど、え聞え(き)給はず。(朱雀院)院の御有樣は、(女であって院を見奉ったならどんなに美しく見えるだらうの義)女にて見奉らまほしきを、(齋宮も不釣合ではない)この御けはひも似げなからず、(朱雀と齋宮と)いとよき御あはひなめるを、(冷泉院)うちはまだいと(十三歳)いはけなくおはしますめるに、かく引きたがへ聞ゆるを、人知れず物しとやおぼすら

今日になりて　いざ入内といふ時になつて中止すべき事でもないから。

くはしう仕うまつるべく　入内に關する事を委細に取りまかなふべく命じおいて。

御とぶらひばかりと　只御機嫌伺だけに參內するもののやうに見せかけた。

あはれ　御息所が御在世であつたら、どんなに御世話甲斐のある事に思はれるだらう。

大方の世につけては　自分に無關係の女として見れば。

なほすぐれて　「なほすぐれて」とありたい所である。

中宮　藤壺。

むなど、惜きことをさへおぼしやりて、胸つぶれ給へど、今日になりてお・（も）ぼしとどむべき事にしあらねば、事ども（入内の準備を然るべく指圖して）あるべきさまに宣ひおきて、睦まじう（く）おぼす修理（すり）の宰相を、くはしう（く）仕うまつるべく宣う（の給）て、うちに（源氏參內）參り給ひぬ。うけばりたる親ざま（源氏は自分が入内の事一切を引受けた親と）には（いふ格であるとは見られたくないと朱雀院を憚つて）聞召されじと、院をつつみ聞え給ひて、御とぶらひばかりと見せ給へり。（に）よき女房（に齋宮の御所のさま）などはもとより多かる宮なれば、里が（實家に歸つてばかり居た女房も集つて來て）ちなりしも參りつどひて、いと二なく（邸内の樣子）けはひあらまほしく、あ（源氏の心）はれ、おはせましかば、いかにかひありて思しいたづかまし、と、昔の（御息所の御氣立を）御心ざまおぼしいづるに、大方の世につけては、惜し（・・）うあたらしかりし（をかし）人の御ありさまぞや、さこそ（人はそんなに十分ではあり得ないものだ）えあらぬものなりければ、よし（風情のある點では）ありしかたはなほすぐれて、物の折ごとに思ひ（御息所を）いで聞え給ふ。中宮も（は）（禁中）うちにぞおはしましける。うへ（冷泉院）は、珍らしき人（齋宮の事）參り給ふと聞召しけ（た）れば、いとうつくしう（お可愛らしくも氣を張つて）御心づかひしておはします。

程よりは　お年に比しては大層氣轉がきいて大人らしくいらせられた。

恥かしき人　氣のおける方。齋宮が年長であるからいふ。

いとをかしと　大變興味をおひきになつた。

弘徽殿　權中納言（昔の頭中將）と四君との間の姫君。一九七頁系圖參照。

御覽じつけたれば　主上は弘徽殿とは既にお馴染になつていらせられるので。

權中納言　弘徽殿の御父。昔の頭中將。

院には　朱雀院は齋宮からの「別るとて云々」の返歌を御覽になつたにつけても齋宮を諦めておしまひになる事は困難であつた。

程よりはいみじうされおとなび給へり。宮（中宮藤壺）も、「かく恥かしき人（齋宮）參り（の事）給ふを、御心づかひして（氣をおつけになつておあひなさいまし）見え奉らせ給へ」と聞え（冷泉院に）給ひけり。人知れず（冷泉御心）、大人は恥かしう（氣づまりなものだらう）やあらむ、とおぼしけるを、いたく夜（よ）ふけてまうのぼり（齋宮が）給へり。いとつつましげに（齋宮のさま）おほどかにて、ささやかに（小柄で華奢な樣子）あえかなるけはひのし給へれば、いとをかし（冷泉御心）とおぼしけり。弘徽殿には御覽じつけ（き）たれば、むつまじう（く）あはれに心やすくおもほし、これは（齋宮）人ざまもいたうしめり（落着いて氣のおける上に）恥かしげに、おとど（源氏）の御もてなしも（の御取扱振も手厚く重々しいので）、やんごとなくよそほしければ、あなづり（冷泉御心）にくく（油斷が出來ないやうに）おぼされて、御宿直などは、ひとしく（弘徽殿と齋宮と）し給へど、うちとけたる御わらはは遊びに、晝など渡らせ給ふことはあなたがち（弘徽殿女御の御方がち）におはします。權中納言は、思ふ心ありて（後には后にもと心ざして入内させたのに）聞え給ひけるに、かく參り（齋宮が入内して）給ひて、御むすめ（弘徽殿）にきしろふさまにてさぶらひ給ふを、か（何か）た〲（につけて不快に）に安からずおぼすべし。院には、かの櫛の箱の御返り（を）御覽ぜしにつけても、・・・（いとど）御心

さき〴〵も 賢木卷にもある。それは前々にも話された事なので、又語り出されて。

斯かる御氣色 源氏も、院に左樣な御考のあつた事を聞き知つて居るやうな素振はあらはさないで、只院が今どう思つて居らるゝか知りたさに、何かと齋宮の御事を話されになる。所が心から愛して居られるのであるおはれゝので、院は御樣子がお氣の毒になる。

二所 弘徽殿と齋宮と。

兵部卿の宮 藤壺の兄で紫上の父。宮、姬君を入内させようと「澪標卷の終に「兵部卿宮、騒ぎ給ふめるを」とあつた。一四四頁。

すが〳〵とも 姬君を入内させる事をすら〳〵とも思ひ立たれない。

さりとも いくら何でもわが姬君をうちやつてしまはれる事はあるまいと時機の來るのを待つて居られる。

離れがたかりけり。その頃おとど(源氏が朱雀院に)の參り給へるに、御物語こまやかなり。事のついでに、(かの)齋宮のくだり給ひし事、さきざきも宣ひ出づれば、聞え出で給ひて、さ思ふ心なむありし、な(併し懸想の心を持つて居つたなどとはえう打明けな)ど(さらない)はえあらはし給はず。おとど(源氏)も、斯かる御氣色聞きがほにはあらで、只いかに(が)おぼしたるとゆかしさに(き)、とかう(く)かの御事(を)・宣ひいづるに、あはれなる御氣色の淺はかならず見ゆれば、いといとほしくお(も)・ぼす。めでたしとおもほししみにける御かた(院が美しいと思つて戀された齋宮の御容姿はどんな美しさかと源氏は見たくお思ひ)ち(になるが)、いかやうなるをかしさにか、とゆかしう思ひ聞え給へど(齋宮の御容姿を)、更にえ見奉り給はぬを、ねたう(くもと)・・おもほす。いとおもりかに(齋宮の人柄)て、夢にもいはけたる(幼稚な)御振舞(などの)・・・あらばこそおのづからほの見え給ふついでもあらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、見奉り給ふ(源氏が物越に齋宮を)ままに、いとあらまほしと思ひ聞え給へり(源氏の心)。かくすきまなくて二所さぶらひ給へば、兵部卿の宮、すがすがともえおもほし立たず。御門(冷泉院)おとなび給ひなば、さりともえおもほし

立てて 好きといふ事を標榜して。

二なく 二人となく上手に。

添ひ臥して 前屈の姿勢で。

とかく筆うちやすらひ 繪の趣向を考案してゐるさま。

ありしよりけに 今迄より一段御愛情が深まつた由を權中納言が聞かれて。

飽くまでかど〳〵しく 飽くまで主角があつて負けぎらひで新らしがりの御性質故。

いみじう戒めて 人にけどられないやうに嚴誡を加へて。

物語繪 物語中の人物事件等を繪にかいたもの。

捨てじ、とぞ待ち過(こ)ぐし給ふ。二所の御覺えども、とりどりにいどみ給へり。うへ(冷泉院)は、よろづの事にすぐれて繪を興あるもの(こと)にお(も)・ぼしたり。立てて好ませ給へばにや、二なく書かせ給ふ。齋宮(秋好)の女御、いとをかしう書かせ給ひければ、これに御心うつりて(冷泉院の愛情が齋宮に)、渡らせ給(齋宮の御殿に)ひつつ書きかよはせ給ふ。殿上の若き人々も、この事まねぶ(繪を畫く事)を、ば御心(主上の)とどめてをかしきものにおもほしたれば、ましてをかし(い)(美しい齋宮が)げなる人の、心ばへあるさまに(趣あるさまに書き流し)まほならず書きすさ(み)び、なまめかしう添ひ・・・臥して、とかく筆うちやすらひ給へる・さ(御)ま・ら(の)うたげさに御心(に)・しみて、いと繁う(く)渡らせ給ひて(齋宮の御方に)、ありしよりけに御思ひ(主上の)まされるを、權中納言(昔の頭中將)聞き給ひて、飽くまでかどかど(權中納言の性格)しく(う)今めき給へ(た)・る御心にて、われ人に劣りなむや、と思し勵み(負けぬ氣を出して)て、すぐれたる上手どもを召し取りて、いみじう(く)戒めて(つ)・、又なきさまなる繪どもを、二なき(二つとない)紙どもに書き集めさせ給ふ。權中「物

月次の繪 年中毎月の行事を主題とした繪。

心やすくも 權中納言は容易には取出して主上にお目にはかけず、秘密にして、主上が齋宮の御方に持參なさらうとするのを惜しんで獨占して居られるので。

古代の 古風な御繪が手許にございますからこれを差上げませう。

殿 二條院。

女君 紫上。

長恨歌 長恨歌や王昭君などを主題とした繪は。王昭君の事は四四頁參照。

事のいみあるは 緣起のわるい事を書いた繪は今回は奉るまい。

かの旅の御日記の 謫居中に書いた繪日記の箱をも取出して。

語繪こそ心ばへ見えて見どころあるものなれ」とて、面白く心ばへある限りをえりつつ書かせ給ふ。例の月次の繪も、見馴れぬさまに言の葉を書きつづけて御覽ぜさせ給ふ。わざとをかしうしたれば、又こなたにてもこれを御覽ずるに、心やすくも取り出で給はず、いといたく秘めて、この御方にもて渡らせ給ふを惜しみらうじ給へば、おとど聞き給ひて、「なほ權中納言の御心の若々しさこそ改まりがたかンめれ」など笑ひ給ふ。「あながちに隱して、心やすくも御覽ぜさせず惱まし聞ゆる、いとめざましや。古代の御繪どもの侍る、參らせむ・・・・・・・・・・・・・・・・」と奏し給ひて、殿に舊き新しき繪ども入りたる御厨子ども開かせ給ひて、女君と諸共に、今めかしきはそれ〳〵とえり整へさせ給ふ。「長恨歌、王昭君などやうの繪は、面白くあはれなれど、事のいみあるは、こたみは奉らじ」とえりとどめ給ふ。かの旅の御日記の箱をも取り

知らで今見む人だに 事情を知らずに今初めて見る人でも。

獨居ての歌 一人京に居殘つて物思に沈んで居つたが、それよりは、須磨に下つて蜑生活の繪でも書いて心を慰めて居る方が宜しうございました。「かた」は形に潟をきかしてある。

うきめ見しの歌 此の繪を見ると、今日は又過去に立返つて、つらい目を見た當時よりも多く涙が流れます。「かた」は方に潟がひゞかしてある。また涙に波をひゞかしてある。「かへる」の緣語としたものである。「うきめ」に海布がきかしてある。

さすがに 戀生活の露骨にあはれてないのではあるが、さすがに明石の家などの含まれた景色の圖をといふ意。

いでさせ給ひて、このついでにぞ女君にも見せ奉り給ひける。・・・知らで今見む人だに、すこし物思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。まいて忘れがたくその世の夢をおぼしさます折なき御心どもには、取りかへし悲しうおぼしいでらる。今まで見せ給はざりける恨みをぞ聞え給ひける。

「獨居てながめしよりは蜑の住むかたをかきてぞ見るべかりけるおぼつかなさは慰みなましものを」と宣ふ。いとあはれとおぼして、

うきめ見し其折よりも今日は又過ぎにしかたにかへる涙か

中宮ばかりには見せ奉るべきものなり。かたはなるまじき一帖づつ、さすがに浦々の有樣さやかに見えたるをえり給ふついでにも、かの明石の家居ぞまづいかにとおぼしやらぬ時の間もなき。

かう繪ども集めらると聞き給ひて、權中納言いとど心をつくし

軸　繪巻物の心木。
表紙　巻物の。
節會どものひまなれば　正月の節會は過ぎ、四月の祭までは少暇がある。
此方彼方　弘徽殿方と齋宮方と。
さまざま　繪が種々あつたといふ意味ではない。兩家それぞれにの意。
梅壺の御方　齋宮女御の事。梅壺は凝花舍ともいひ、宮中五舍の一。
よしあるかぎり　趣味を解した者ばかりが集まつて。
捨てがたく　お好きでいらせられる道の事とて、世を捨てても、こればかりは捨てかねて、御勤行も懈怠しいしい御覧になる。

て、軸、表紙、紐(巻物の紐)の飾り、いよいよ整へ給ふ。三月(やよひ)の十日のほどなれば、空もうららかにて、人の心ものび、物面白き折なるに、うちわたり(禁中邊)もさるべき節會どものひまなれば、只かやうの(繪を弄んで)事どもにて御かたがた暮し給ふを、同じくは(源氏の心)、御覧じどころもまさりぬべくて奉らむ(主上に)の御心つきて、いとわざと集め參らせ給へり。此方彼方・(い)とさまざま・(に)多かり。物語繪は、こまやかに(上品で)なつかしさまさるめるを、梅壺の御方は、いにしへの物語・(の)、名高く故ある(風雅なもののはかり)かぎり、弘徽殿は、その頃世に珍らしくをかしき限りをえりてかかせ給へれば、うち見る目の今めかしき花やか(一寸見の當世風な花やかさの點は弘徽殿の方がまさつて居る)さは、いとこよなくまされり。うへの女房(主上附の女房)なども、よしあるかぎり、「これはかれは」など定めあへる(繪の巧拙を)を、此頃の事にすめり。中宮もまゐらせ(禁中に)給へる頃にて、かたがた(繪を)御覧じて・(つこ)、捨てがたく・(う)おもほす事なれば、御行ひも怠りつつ・(て)御覧ず。この人々(女房達)・(の)とりどりに論ずるを聞召して、ひだり右と(左方右方と)方わかたせ給ふ。梅壺(齋宮)

平内侍のすけ　以下六人は皆主上附の女房。
有職　物識り。
竹取の翁に　竹取物語の翁の繪と宇津保物語の俊蔭の繪とを番はせて優劣を爭ふ。
なよ竹の　竹取物語はふる物語で、誰も見ふるしてゐるから、興あるふしもないが。
遙に思ひのぼれる　志操を高く持して遠く月界を目ざした宿縁は高遠で、神代の昔話故、今の世の淺墓な女には目も及ばぬ事でせう。
一つ家の　成程我家一軒の内だけはあかるくした事でせうが。
百敷の　主上の事を御光といひそれに並ばずとは后妃とはならなかつた事。
あへなし　竹取物語に「安倍なし」を含めて「あへなし」とある。それを此處に用ひたのである。
誠の蓬萊の　誠の蓬萊山中に深く分け入れとは姫に深い心あつての難題とは知りながら、

の御方(左方)には平内侍(へいないし)のすけ、侍從の内侍、少將の命婦、右(弘徽殿方)には大貳の(江)内侍のすけ、中將の命婦、兵衞の命婦を、只今は心・(の)にくき有職(いうそく)どもにて、心々に爭ふ口つきども・(を)をかしと聞召して(中宮が)、まづ物語のいできはじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて爭ふ。左(梅壺方の自讃の詞)「なよ竹の世々にふりにけること(もイ)、をかしきふし(竹の縁語)もなけれど、かぐや姫の、この世(現世)の濁りにもけがれず遙に思ひのぼれる契り高く、神・(の)世のことなめれば、あさはかなる女・目・(の)及ばぬならむかし」といふ。右(弘徽殿方)は、「かぐや姫ののぼりけむ雲居は、げに及ばぬ事なれば誰も(私共ばかりではなく)知りがたし。この世の契り(現世の契なは竹の中に結んで生れ出た人故)は竹のなかに結びければ、くだれる(種姓卑しい人と思はれる)人の事とこそ・(は)見ゆめれ。一つ家の内・(を)は照しけめど・(も)、百敷のかしこき御光(入内して后妃とならずに終つてしまひました)には並ばずなりにけり。安倍のおほしが、千々のこがね(千金を投じて火鼠の裘を買つた切なる思ひ)を捨てて、火鼠の思ひ、片時に消えたる(思ひの火も裘と共に片時に)もいとあへなし(あつけない)。車持(くらもち)の皇子(みこ)の誠の蓬萊の深き心も知りながら、僞りて、玉の枝(えだ)に瑕(きず)をつけたるをあやまちと

繪は巨勢の相覽 竹取物語の。
巨勢の相覽 金岡の子。讃岐少目從八位下。
綺 かむはた。錦に似て薄いもの。
唐土 實は波斯國であるけれども、それを唐土の名で代用したのである。波斯國は今のスマトラだらうといふ。
常則 須磨巻三七頁參照。
道風 醍醐朱雀村上の三朝に歴任し、書道の名手で、佐理行成と共に三蹟と稱せらる。
左には 三梅壺方にはこの反駁が出なくて負けになつた。
正三位 今傳らない。今ある正三位は岩清水物語と同じ。
伊勢の海の歌 伊勢物語の奥儀も詮議もせずに、舊い小說だとけなし去るべきものでせうか。「心」には水底の意があつて、海の緣語。

なす。繪は巨勢の相覽、手は紀の貫之書けり。かんや紙（紙屋紙）に唐の綺をばいして（裏打して）、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常のよそひ（表裝）なり、

俊蔭は、烈しき波風におぼほれ知らぬ國（波斯國）に放たれしかど、なほさして行きける方の志もかなひて、遂に人（異朝）のみかどにもわが國にも、ありがたきざえの程を廣め、名を殘しける古き心をいふに、繪のさまも、唐土と日本とを取り並べて、面白き事ども・なほ並びなし」といふ。白き色紙（料紙は）、青き表紙、黄なる玉の軸なり。

繪は常則、手は道風（小野氏）なれば、今めかしうをかしげに目も輝くまで見ゆ。・（又）左にはそのことわりなし。

次に伊勢物語に正（上）三位をあはせて、又・（え）定めやらず。これも右は面白く賑はしく、うちわたり（禁中）より・（うち）はじめ、近き世の有樣を書きたるは、をかしう見どころまさる・・・・・。平内（左方）侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだごと 世間並の色事を繕ひ飾つたつまらぬ物語に壓倒されて。
雲のうへにの歌 兵衞の大君が正三位の懸を退けて雲の上を目ざした高い理想心から見ると、伊勢物語にも深意はありませうが、それも遙か低く見下される。雲上と伊勢海とを對比させてあやなした歌。
兵衞の大君 正三位物語中の人物。
みるめこその歌 伊勢物語は一見すぼらしくもあらうが、古來の名聲をけなし去る事は出來ませぬ。見るめに海松布が、うらぶれに浦がかしてあり、沈めむは海の緣語。伊勢をの「を」は接尾辭で意味はない。
一巻に 一卷の勝負に言葉の限りを盡してそれでも決しかねてゐる。
死にかへり 死に入る程堪へられない事。
うへのも宮のも 主上附の女房も中宮附の女房も。
御前 冷泉院の御前。
なかにも殊なるは 中にも傑作と思ふものは、この繪合には選り殘して置かれたのだが。

世の常のあだごとの（を）引きつくろひ飾れるにおされて、業平が名をやくたすべき」と、爭ひかねたり。右のすけ（大貳の内侍のすけ）、

雲のうへに思ひのぼれる心には千尋の底もはるかにぞ見る

（藤壺）「兵衞の大君の心高さは、げに捨てがたけれど、在五中將の名をば・（猶）えくたさじ」と宣はせて、宮（中宮）、

みるめこそうらぶれ（り）ぬらめ年經にし伊勢をの蜑の名をや沈めむ

かやうの女ごと（女どうしのいひあひで）にて亂りがはしく爭ふに、一巻に言の・葉をつくして、・えもいひやらず。只あさはかなる若人どもは、死にかへりゆかしがれど、うへのも宮のも片端をだに・（も）え見ず、いといたう秘めさせたまふ。

おとど（源氏）參り給ひて、かくとりどりに爭ひさわぐ心ばへども、をかしくおぼして（う）、「同じくは御前にてこの勝負定めむ」と宣ひなりぬ。かかる事もやとかねておぼしければ、なかにも殊なるはえりとどめ給へるに、かの須磨、明石の二巻は、おぼす所あ

りて取りまぜさせ給へりけり。中納言も、その御心劣らず。此頃の世には、只かく面白き紙繪を・・・整ふる事を天の下いとなみ・・たり。源「今あらため書かむことは本意なきことなり。只ありけむ限りをこそ」と宣へど、中納言は人にも見せで、わりなき窓をあけてかかせ給ふめるを、院にもかかる事聞かせ給ひて、梅壺に・御繪ども奉らせ給へり。年の内の節會どもの面白く興あるを、昔の上手どものとり〴〵に書けるに、延喜の御手づから事の心かかせ給へるに、又わが御世の事・もかかせ給へる卷に、かの齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式、御心にしみておぼし・・ければ、かくべきやう委しく仰せられて公茂が仕うまつれるがいといみじきを、奉らせ給へり。艶に透きたる沈の箱に、同じき心葉のさまなど、いと今めかし。御消息は只言葉にて、院の殿上にもさぶらふ左近の中將を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所のかう〴〵しきに、

紙繪　絹繪に對す。

今あらため書かむ　今更改めて書くのはつまらない。只持ち合せのものだけを。

又わが御世の　朱雀院がわが御治世中の出來事をかき加へさせ給うた卷の中に。

大極殿の儀式　齋宮下向の折は大極殿に於て主上御みづから別の櫛を齋宮の額に加へ給うて、再び京に歸り給ふなと仰せられる。賢木卷三九七頁にあつた。

公茂　金岡の孫、公忠の子。

院の殿上にも　禁中と院の殿上とに兼任して奉仕してゐる。

身こそかくしめの外なれそのかみの心の内を忘れしもせず

とのみあり。聞え給はざらむもいと忝ければ、苦しくお・・ぼしながら、昔の御かんざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬ心地して神代のことも今ぞ戀しき

とて、縹の唐の紙に包みて參らせ給ふ。御使の祿などいとなまめかし。院の御門御覽ずるに、限りなくあはれとお・ぼすにぞ、ありし世を取返さまほしくお・ぼしける。おとどをもつらしと思ひ聞えさせ給ひけむかし。過ぎにし方の御報いにやありけむ。・院の御繪は、きさいの宮より傳はりて、あの女御の御方にも多く參るべし。内侍のかんの君も、かやうの御好ましさは人に・・・・・・すぐれて、をかしきさまに取りなしつつ集め・・給ふ。その日と定めて、俄なるやうなれど、をかしきさまにはかなうしなして、ひだり右の御繪ども・・まゐらせ給ふ。女房のさ・ぶ・らひ・

身こそかく　身こそ仙洞に居りますが、下向の折の大極殿に於ける心の中は今も忘れませぬ。注連がきかしてある。「しめ」は領有の意。

しめのうちは　禁中の有樣は朱雀院御在位當時と變つたやうな氣がして、昔の事が戀しく思はれます。

きさいの宮より　朱雀院の御繪は母后弘徽殿大后から妹の四の君を經て弘徽殿女御に傳はつてゐる。

桐壺院＝弘徽殿大后 ── 朱雀院
朧月夜尚侍 ── 冷泉院
四の君＝權中納言 ── 弘徽殿女御（＝冷泉院）

女房のさぶらひに　女房の詰所なる臺盤所に主上の玉座を設けさせて。

左は紫檀の箱に　一番下に紫地の唐の錦の敷物を敷き、その上に蘇芳木の花足を据ゑ、それを蒲萄染の唐の綺の打敷で覆ひ、その上に繪卷の入つた紫檀の箱を載せたのである。
けそく　脚を花形に彫刻した卓。
櫻襲　表は白、裏は赤又は蒲萄染。蒲萄染は薄紫。
汗衫　童の上衣の上に着る服。
藤襲　表は薄紫、裏は萌黃。
足結の組　打敷が取れぬやうに打敷の四方にうはざしをし、その餘りを四方に垂れて四足に結びつけた組紐。
柳　表白、裏青、夏は卯の花といふ。
山吹襲　表薄朽葉、裏黃なるを花山吹、表黃に裏紅なるを裏山吹といふ。
前後と　前後二列に並び、裝束の色合で左方右方を分けてある。
帥の宮　螢兵部卿宮。
判　繪合の判者の役。
四季の繪　四季の行事を主題とした繪で、前に月次の繪とあつた。これは朱雀院が梅壺に「年の內の節會どもの面白く興ある」繪を贈られたそれであらう。

におましよそはせて、北南かた〴〵に分れてさぶらふ。殿上人は後涼殿の簀子に、おの〳〵心寄せつつさぶらふ。左は紫檀の箱に蘇芳のけそく、敷物には紫地の唐の錦、打敷は蒲萄染の唐の綺なり。童六人、赤色に櫻襲の汗衫、衵は紅に藤襲の織物なり。姿用意などなべてならず見ゆ。右は沈の箱に淺香の下机、打敷は青地の高麗の錦、足結の組、花足の心ばへなどいと今めかし。わらは、青色に柳の汗衫、山吹襲の衵著たり。皆お前にかき立つ。うへの女房、前後とさうぞきわけたり。召しありて内のおとど權中納言參り給ふ。その日帥の宮も參り給へり。いとよしありておはするなかに、繪をなむ立てて好み給へば、おとどのしたに勸め給へるやうやあらむ、こと〴〵しき召しにはあらで、殿上にさぶらひ給ふを、仰せごとありてお前に參り給ふ。この判仕うまつり給ふ。いみじうげに書きつくしたる繪どもあり。更にえ定めやり給はず。例の四季の繪も、いにし

紙繪は限りありて　紙繪といふものは、ある程度以上には巧にかき得ぬもので。
あな面白と　嗚呼面白と感ぜられる點は却つて古畫よりまさつてゐるから。
朝餉　清涼殿の朝餉の間。
時々さしいらへ　源氏が時々詞を添へられるところは理想的である。
左なほ數一つ　もう一番で勝負がすむといふ最後の時に、左方の須磨の繪卷が出て來たので。

への上手どもの、面白き事どもを選びつつ、筆滯らず書き流したるさま、譬へむ方なしと見るに、紙繪は限りありて、山水のゆたかなる心ばへをえ見せ盡さぬものなれば、ただ筆の飾り人の心に作り立てられて、今のあさはかなるも、昔の跡に恥ぢなく賑はしく、あな面白と見ゆる筋はまさりて、多くの爭ひども、今日はかた〴〵に興ある事どもおほかり。朝餉の御障子をあけて中宮もおはします。深く知ろしめしたらむと思ふに、おとどもいと優におぼえ給ひて、所々の判ども、心もとなき折折に、時々さしいらへ給ひけるほど、あらまほし。定めかねて夜に入りぬ。左なほ數一つあるはてに、須磨の巻出で來たるに、中納言の御心さわぎにけり。あなたにも心して、はての巻は心殊にすぐれたるをえりおき給へるに、かかるいみじき物の上手の、心の限り思ひすまして靜かに書き給へるは、譬ふべきかたなし。みこよりはじめ奉りて、涙とどめ給はず。その

心苦し悲しと　京に居る人々が氣の毒だ悲しい事だと同情したよりも、この繪を見ると侘住居の有樣や御感想などが、今現に目前に見て居るやうに感ぜられる。

草の手に　その繪卷の詞書は、草假名を平假名の所々にまぜて書いたもの。

御かはらけなど　源氏が盃を傾けられる序に。

此の道　學問の道。

世(時)に心苦し悲しとおぼしし程よりも、おはしけむ有樣、御心にお(も)・ぼしけむ事ども、只今のやうに見ゆ。(え)所のさま(その地の風景)、おぼつかなき浦々、磯の隱れなく書きあらはし給へり。草(さう)の手にかんなの所々に書きまぜて、まほのくはしき日記(正式の漢文で書いた委しい日記ではない)にはあらず。あはれなる歌などもまじれるたぐひゆかしう、誰も(く)・・異事おぼさず。さま〴〵の御繪の興、これに皆移り果てて(須磨の繪日記に)、あはれに面白し。よろづ皆おしゆづりて、左(梅壺方)勝つになりぬ。

夜(よ)明けがた近くなる程に、物(源氏は)いとあはれにおぼされて、御かは(御盃)らけな(ん)・ど參るついでに、昔の御物語ども出で來て、(源)「いはけ(私は幼少時代)なき(から)程より、學問に心を入れて侍りしに、すこしもざえ(才)など附きぬべくや御覽(故院が)じけむ、院(桐壺院)の宣はせしやう、『才學(さいがく)といふもの(は)・、世にいと(世間で重んずる爲か)おもくするものなればにやあらむ、いたう(く)進みぬる人の、命(壽命と幸運と兼備の人)、幸と並びぬるはいと難きものになむ。品高くうまれ(高貴の身分に生れ)、さらでも人に劣るまじき程(それ程でなくとも人に劣らぬ身分では)にて、あながちに此の道な(箇)深く(う)習ひ

本才　政治上の學問。

怪しく　「思ふ折々」にかゝる。

いかにしてかは　どうしたら滿足の行く程に畫けようかと思ふ折々がありましたが。

四方の海の　あらゆる海の深遠な趣を實際に見ましたので、畫道については氣附かぬ所なく精通しましたが。

心よりは　この繪日記も、私の豫期より實際の出來がまづいやうに思ひましたが、機會もないのにお目にかけるべきではありませんので。この次に今まで發表しなかつたといふ意味の文が省かれてゐる。

心より放ちて　精神（後に「魂のほど見ゆる」とあるその「魂」とこゝの「心」と同義）を捨てておいて手先きだけの稽古といふ事はないけれども。

おのづから寫さむに　學ばうとすれば自然學んだだけの結果はありませう。

さるべきにて　その道の天分があつて。

なほ人に拔けぬる人の　やはり才能拔群の人があつて、さういふ人こそ何れの藝道をも好みかつ會得したやうに私には考へられます。

そ』と諫めさせ給ひて、本才(ほんざい)のかた〴〵のもの敎へさせ給ひしに、拙き(私は)事もなく、又取り立てて(これといつて了得したものも)此の事と心得る事も侍らざりき。繪かく事のみなむ、怪しく(妙に)、はかなきもの(つまらぬ藝道ではあるが)から、いかにしてかは心ゆくばかり書きて見るべきと思ふ折々侍りしを、おぼえぬ山がつ(須磨謫居の事)になりて、四方の海の深き心を見しに、更に思ひ寄らぬ隈なくいたられにしかど、筆の行く限り(筆の運びには限があつて)ありて、心よりは事ゆ(あ)かずなむ思う給へられしを、ついでなくて(は)・御覽ぜさすべきならねば。かうすき〴〵しきやうなるのちの聞えやあらむ(この繪合の折に取出した事について物ずきと評判されては困りますが)」とみこ(帥宮)に申し給へば、(帥)「何のざえも、心より放ち(れ)て習ふべきわざならねど、道々に物の師あり(諸道に師匠があり學びばえのあるやうなのは)、まねびどころあらむは、事の深さ淺さ(藝道を會得する事の深淺は別として)は知らねど、おのづから寫さむに跡ありぬべし。筆執る道と碁打つことと(こ)・ぞ怪しう(く)魂(天分)のほど見ゆるを。深き勞なく(深い修業もなさそうな鈍物も)見ゆるおれものも、さるべきにて書きうつ(す)・たぐひも出でく(め)・れど、家の子(上流の子弟)のなかには、なほ人に拔けぬる人の、何事をも好

さま〴〵に。 親王達と内親王とそれ〴〵に。
そのなかにも 大勢の中で故院が特別の御注意を以て源氏に御傳授になり源氏はそれを御習得なさいました甲斐があつて。
文才をば 以下故院の御言葉。源氏は文學上の藝能は勿論のこと。
一のざえ 第一の技倆で。
まさなき おとなげない。素人がこんなにまで畫くのはおとなげないの意。この語の次にお畫きになるといふ意味の語が省かれてある。
古への 昔の墨繪書きの名匠達も逃げ出してしまひさうな優れた技倆を持つて居られるのは。
こなたはまだ 清涼殿の西廂であるから月影はまださし込まぬのである。
御こと 御彈物。
書司 後宮十二司の一で、後宮の書籍文房具樂器等を掌る。
和琴 六絃で、大和琴ともあづまごとともいふ。

み得けるとぞ見えたる。院のお前にて、親王達内親王、いづれかはさま〴〵とり〴〵のざえ習はせ給はざりけむ。そのなかにも、取り立てたる御心に入れて傳へうけとらせ給へるかひありて、『文才をばさるものにていはず、さらぬ事のなかには、琴彈かせ給ふ事なむ一のざえにて、次には横笛、琵琶、箏のことをなむ次々に習ひ給へる』とうへもおぼし宣はせき。世の人もしか思ひ聞えさせたるを、繪はなほ筆のついでにすさびさせ給ふあだごととこそ思ひ給へしか。いとかうまさなきまで。古への墨書の上手ども跡をくらうなしつべかめるは、却りてけしからぬわざなり」と、うち亂れて聞え給ひて、醉泣にや、院の御事聞えいでて、皆うちしほたれ給ひぬ。廿餘日の月さしいでて、こなたはまださやかならねど、大方の空をかしき程なるに、書司の御こと召出でて、權中納言和琴賜はり給ふ。さはいへど人にはまさりてかき立て給へり。

上人 殿上人。
拍子賜はす 拍子とる笏を下される。
かさねて賜はり給ふ 繪合の判者を勤めた上に箏を彈じたから。
浦々の巻 須磨の繪日記。
かうもてなし聞え 源氏が梅壺に贔屓されるので。
なほ覺え壓さるべきにやと わが姫君(弘徽殿)の御寵愛が奪はれるのではなからうかと不快にお思ひになる。
さるべき節會どもにも 源氏は然るべき節會の折にも、冷泉院の御代に創始されたものであると後人の言ひ傳ふべき新例を作り加へようとお思ひになり。

みこ箏の御こと、おとど琴、琵琶は少將の命婦仕うまつる。上人のなかにすぐれたるを召して拍子賜はす。いみじう面白し。明け果つるままに、花の色も人の御かたちどももほのかに見えて、鳥の囀る程、心地ゆきめでたき朝ぼらけなり。祿どもは中宮の御方より賜はす。みこは御ぞ又かさねて賜はり給ふ。その頃の事には、この繪の定めをし給ふ。「かの浦々の巻は中宮にさぶらはせ給へ」と聞えさせ給ひければ、これが初め、また殘りの巻々ゆかしがらせ給へど、「今次々に」と聞えさせ給ふ。うへにも御心ゆかせ給ひて思召したるを、嬉しく見奉り給ふ。はかなき事につけても、かうもてなし聞え給へば、權中納言は、なほ覺え壓さるべきにやと、心やましうおぼさるべかめり。うへの御志は、もとよりおぼししみにければ、なほこまやかにおぼしたるさまを、人知れず見奉り給ひてぞ、頼もしくさりともとおぼされける。さるべき節會どもにも、この

おとどぞ 源氏は人生は無常だと感じて。

世を背きなむと 出家してしまはうと。

この御世には 今の世に於て、寵遇が身の程に過ぎてゐる。

御堂 嵯峨野の御堂の事は松風巻に見える。二〇九頁。**佛經の** 佛像や經卷の準備をも同時になさるやうだが。

御時よりと末の人のいひ傳ふべき例を添へむとおぼし、私ざまの斯かるはかなき御遊びも、珍らしきすぢにせさせ給ひて、いみじきさかりの御世なり。おとどぞなほ常なきものに世をおぼして、今すこしおとなびおはしますと見奉りて、なほ世を背きなむと深くおもほすべかめる。昔のためしを見聞くにも、齢足らで官位高くのぼり世に抜けぬる人の、長くはえ保たぬわざなりけり、この御世には、身の程覺え過ぎにけり、中頃なきになりて沈みたりし憂へにかはりて、今までもながらふるなり、今よりのちの榮えは、なほ命うしろめたし、靜かに籠り居て後の世の事を勤め、かつは齢をも延べむ、とおぼして、山里ののどかなるを占めて、御堂造らせ給ふ。佛經のいとなみ添へてせさせ給ふめるに、末の君だち、思ふさまにかしづき出だして見むと思召すにぞ、疾く捨て給はむ事は難げなる。いかにおぼしおきつるにかといと知りがたし。

松風

ひんがしの院 蓬生卷の末に「二條院いと近き所を造らせ給ふ」とあつた。

政所 知行所や家政等を司どる事務所。

家司 政所にあつて事務を取る人。

明石の御方と 明石上が出京後の居所と豫定しおかれた。

隔て〳〵 内部を幾つにも仕切つて構へて置かれたのが、却つて懷かしい感じがし、見ばえもしてゆきとゞいてゐる。

時々わたり給ふ 源氏が東院においでになつた時の休息所にして。

こよなく 自分とは段違ひの尊い身分の愛人達でさへ、明石に對する態度のやうに愛するでもなく、遠のきもなさらぬ源氏のつれない態度を見て居つては、却つて餘計に物思をしさうだと噂に聞いて居るのだもの。

この若君の 京に出たならば姫君のつらよごしに卑しい身分が露顯するだらう。

ひんがし(二條院の東院)の院造りたてて、花散里と聞えし、うつろはし(東院に)給ふ。西の對渡殿などかけて(はててイ)、政所(まどころ)家司(けいし)など、あるべきさまにしおかせ給ふ。東(ひんがし)の對は明石の御方とおぼしおきてたり。北の對は殊に廣く造らせ給ひて、假(かり)にてもあはれと思して行末かけて契り頼め給ひし人々(空蟬や末摘など)つどひ住むべきさまに、隔て〳〵しつらはせ給へるしも、なつかしう見どころありてこま(や)かなり。寢殿はふ(誰)たげ給はず(も住まずに殘してある)、時々わたり給ふ御すみどころにして、さる方なる(休息所としての設備を)御しつらひ(しておかれた)どもしおかせ給へり。

明石には(源氏から)御消息絶えず。今はなほのぼり給ひぬべき事をば宣へど、女(明石上)はなほわが身の程を思ひ知るに、こよなくやんごとなき際の人々だに、なか〳〵さてかけ離れぬ御有樣のつれなきを見つつ、物思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりの覺えなり(まして自分などが何程の寵愛を受けて居ると己惚れてか)とてかさし出でまじらはむ、この若君の御面伏(おんおもてぶせ)に、數ならぬ身の程こそあらはれめ、たまさかに這ひわたり給ふ(稀に源氏が姫君を見に來られる序をまつて逢ふといふ事で)ついでを待つ

人笑へにはしたなき事　嘲笑の的となつてきまりのわるい事はどんなものだらうと。

かかる所にて　姫君がこんな田舍に生長して。

ひたすらにも　源氏のお勸めを一途に恨み退ける事も出來ない。

なか〳〵　上洛はうれしいが、その心配で却つて。

中務の宮　中務卿親王。

明石入道（六十三）＝明石上（二十二）、源氏（三十一）＝姫君（三）

中務宮―父―尼君

末の世に　晩年になつて思ひも寄らぬ事が起つて。

俄にまばゆき　急に晴れがましい人中に出るのはきまりがわるく。

舊き處尋ねてと　先祖傳來の土地を探して其處に住まうと思ひついた。

さるべきものは　造作に要する費用はこちらから送らう。

預かり　留守番。

らうずる人　持主。

事にて、人笑へ（はれ）にはしたなき事、いかにあらむと思ひ亂れても、又さりとて、かかる所にておひ出で、かずまへ（人から顧みられないのも）られ給はざらむもいとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たち（入道夫妻）も、げにことわりと思ひ歎くに、なか〳〵心も盡き果てぬ。昔母君（明石上の母君）の御おほぢ（祖父）中務の宮と聞えけるがらうじ（領）給ひける所、大井川のわたりにありけるを、その御のち（中務宮の子孫）はか〴〵しう相繼ぐ人もなくて年頃荒れまどふを思ひ出でて（明石入道夫妻が）、かの時（中務宮の時から）より傳はりて、宿（やど）守（もり）のやうにてある人を呼び取りて（入道が）語らふ。入道「世の中を今はと思ひ果てて斯かるすまひ（明石の田舍住居）に沈みそめしかども、末の世に思ひかけ（明石上の腹に源氏の姫君が生れた事）ぬ事出で來てなむ更に都のすみか求むるを、俄にまばゆき人中（に）・いとはしたなく、田舍びにける（田舍じみた氣持も落着くまいから）心地も靜かなるまじきを、舊き處（大井の邸宅の事）尋ねてとなむ思ひ寄る。さるべきものはあげ渡さむ（京に送らう）。修理（すり）などして、かたのごと人住みぬべくは繕（つくろ）ひなされなむや」といふ。預かり、「この年頃らうずる（領）人も物し給はず、あやしき藪（草薮）に

靜かなる　閑靜な場所に住みたいとの御希望ならば、其處は御希望に反しませう。

何か　いやなあに。實はかの大臣の御庇護を受けたいと思ふ下心もあつて。この次に「却て望ましく思ふ」といふやうな意味の語が省略されてある。こゝは河内本によらなければならぬ。

かごかなる習ひにて　閑靜なのが常ですから。

さるべき物など　相當の代償を差上げて自分の所有として耕作して居ます。

つなしにくき顏　つめたい憎たらしい顏付。

はちぶきいへば　ふくれ面してぶう〳〵いふから。

ここに知るまじ　當方では何も問題にしようと思はぬ。

券　土地所有の證券。

なりて侍れば、下屋（私は）にぞ繕ひて宿り侍るを、この春の頃より、内（源氏）のおほ殿（大との）の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむいと人げさわがしうなりにて侍る。いかめしき御堂ども建てて、多くの人なむ造り營み侍るめる。靜かなる御本意ならば、それやたがひ侍らむ」。入道「何か。それもかの殿（源氏）の御蔭に片掛けてと思ふと（事）ありて。おのづから追々に内の事（内部のこま〴〵した手入）どもはしてむ。まづ急ぎて大方の事（大體の事を取計らつて下さい）どもを物せよ」といふ。預かり「みづからららうずる（領）所に侍らねど、又知り傳へ給ふ人（外に管理する人もないから）もなければ、かごかなる習ひにて、年頃隱ろへ侍りつるなり。御庄（みさう）の田畑（はたけ）などいふ事の（いたづらに）・・・・荒（徒に荒れイ）れ侍りしかば、故民部（みんぶ）の大輔の君に申し賜はりて（お讓りを願つて）、さるべき物など奉りてなむ、らうじ（領）作り侍るを」なんど、そのあたりの貯（その附近の蓄藏物を取上げられ）へ（はせぬかと心配して）の事どもを危げに思ひて、鬚がちにつなしにくき顏を、鼻などうち赤めつつはちぶきいへば、入道「更にその田などやうのことは、ここに知るまじ。ただ（今迄通りと思つてゐてくれ）年頃のやうに思ひて物せよ。券（けん）など

大殿のけはひを　入道が源氏のことを匂はせるやうな口のきゝ方をするので。
かやうに思ひ寄るらむとも　入道が上洛の計畫をして居るとも源氏は御存じなく。
若君のさて　姫君がそんな風に田舍で淋しく暮して居る事を、後に人々が姫君の噂する場合に、もう一段（謹愼中に子を生ませたといふ事の上に）世間體がわるからうかと心配して居られる所へ。
造り果ててぞ　大井の舊邸の修理が出來たあとで。
人にまじらはむ　明石上が人中に出る事をいやがつて居るのはこんな計畫があつたからだと源氏は合點した。
例の忍ぶる道は　源氏の忍びありきにはいつも世話を燒く人だから。「例の」は本の儘。
あたりをかしうて　大井の邸は周圍の景色が宜しくて。
さやうのすまひに　さうした住居にうつらないではなからう。

はここになむあれど、すべて世の中を捨てたる身にて、年頃ともかくも（どうなつてゐるやら打捨ててある）尋ね知らぬを、その事も今くはしくしたためむ（整理しよう）」などいふにも、大殿（おほいどの）のけはひをかくれば、煩はしくて（預かりの心に）、そののち、物など多く受取りて（入道から修繕料を受取って）なむ急ぎ造りける。かやうに思ひ寄るらむとも（源氏は）知り給はで、（京に）のぼらむ事を（明石上が）物憂がるも（源氏の心に）心得ずおぼし、（明石姫君）若君のさてつく〴〵と物し給ふを、のちの世に人のいひ傳へむ、今一際（ひときは）人わろき（きず）にやと（源氏が）おぼすに、造り果て（い）てぞ、「しか〳〵の所をなむ思ひ出でたる」と（入道から源氏に）聞えさせける。人にまじらはむ事を苦しげにのみ物するは斯く思ふなりけり、と（源氏が）心得給ふ。口惜しからぬ心の用意の程かな、と（源氏の心に）思しなりぬ。惟光の朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば、（大井に）遣はして、さるべきさまに此處彼處の用意などせさせ給ひけり。（惟）「あたりをかしうて、海づらに通ひたる所のさまになむ侍りける（明石の海岸に似て居る所です）」と聞ゆれば、さやうのすまひに、（明石は似合はし）よしなからずはありぬべし、と（源）お

瀧殿　瀧に臨んだ建物。
これは川づらに　明石上の邸は。大井の河岸に。
内のしつらひ　室内の設備。
くだし遣はす　明石上を迎への爲に。
のがれがたくて　是非もなくて今はいよ〳〵上洛と思ふと。
など斯く　どうしてこんなに物思をする身に生れついた事かと。かういふ身の上でない人が却つて羨しく思はれる。
露の　「かゝらぬ」の枕詞。惠の露のかゝる意味がひゞかしてある。
あひ見で　明石上と顔を合せずに月日を送るつらさがたまらなく悲しいので。

（氏の心に）ぼす。造らせ給ふ御堂は、大覺寺の南にあたりて、瀧殿の心ばへなど、（大覺寺に劣らず）劣らず面白き寺なり。これは川づらに、えもいはぬ松かげ（ぜ）に、（無造作に建てた）何のいたはりもなく建てたる寢殿の事そぎたるさまも、おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで（源）お（氏が）ぼし寄る。親しき人々、いみじう忍びて（明石に）くだし遣はす。（明石上は）のがれがたくて、今はと思ふに（も）、年經つる浦を離れなむことあはれに、入道の心細くて一人とまらむ事を思ひ亂れて、よろづに悲し。すべて、などかく心づくしになり始めけむ身にかと、露のかからぬたぐひ羨しくおぼゆ。親たち（入道と尼君）も、かかる御むかひ（へ）にてのぼる幸は、年頃寢てもさめても願ひわたりし志のかなふと、いと嬉しけれど、あひ見で過ぐさむいぶせさの、堪へがたう悲しければ、夜晝おもひほれて（氣がほけて）、おなじ事をのみ、「さらば（明石姫君）若君をば見奉らでは侍るべきか」といふよりほかの事なく（し）、母君も、いみじうあは

年頃だに 今迄さへ夫の入道とは別居して居つたのだから、娘が上洛しては、まして誰を頼りに此の浦に居殘らうぞ。

みなれそなれて 古歌「みなれ木のみなれそなれて別れなば戀しからむや戀しからじや」

もてひがめたる 自分からすねてゐる。

あり果てぬ命を 古今雜下「あり果てぬ命待つまの程ばかり憂き事繁く思はずもがな」

若き人々の 京から來た若い女房達で、此の田舍住居を辛氣に思ひ嘆いて居つた人達は。

寄する波に 渚に寄せ返る波のさまを見るにつけても。

例の後夜より いつもの後夜の勤行の時刻よりも早く起きて。後夜は二一三頁頭註參照。

言忌すれど めでたい門出の折故不吉の言葉は漏らすまいとしてゐるけれども。

れなり。年頃だに同じ庵（いほり）にもすまずかけ離れつれば（入道は濱邊の館に母君は岡邊の家に）、まして誰によりてかはかけとどまらむ。ただあだに（假初に逢ふ男女の淺い睦みでさへ）打見る人のあさはかなる語らひにだに、みなれそなれて別るる程は、ただならざめ（平氣では居れないのに）るを、ましてもてひがめたる（出家姿のこと）頭つき心おきてこそ頼もしげなけれど、又さるかたに、これこそは世を限るべきすみかなゝめれ（この「こそは生涯の住處であらうと）と、あり果てぬ命を限りに思ひて（やがては盡きる壽命の最後迄もと思つて）、契りすぐし來つるを、にはかに行き離れなむも心細し。若き人々のいぶせう思ひ沈みつるは、嬉しき（京へ歸り上るのは）ものから、見捨てがたき濱のさまを、又はえしも歸（又來て眺める事は出來まい）ら（と）じかしと、寄する波に添へて、袖濡れがちなり（る）。秋の頃ほひなれば、物のあはれ取りかさねたる（一緒に集まつたやうな氣がして）心地して、その日とある曉（出發當日の朝方）（に）、秋風涼しくて、蟲のねも取りあへぬに、海のかた（明石上のさま）を見いだして居たるに、入道例の後夜（ごや）より深う（夜深く）起きて、鼻すすり（泣くさま）うちして、行ひいましたり。いみじう言忌（こといみ）すれど、誰も誰もいと忍びがたし。若君はいともいとも美しげに、夜（よる）光りけむ玉の（入道の心に）心地して、

見馴れて 入道に馴染んで側に引付けておく姫君の心根などを入道自身は、おそろしい程人と違つた我身を厭はしく思ひながらも、一寸の間も見ずには居られないと。「心ざまなど」は下の「片時見奉らでは」に續く。

行く先をの歌 今別れて京に上り行く姫君の將來の幸福を祈るお目出度い時におさへきれないものは老の涙であつた。

もろともにの歌 都を出る時はあなたと一緒でしたが、今度は一人で出る旅だから、野路にまごつく事でせう。

かう浮きたる事を こんな不確な事を當にして一度捨てた都に歸つて行くのも。

いきて又の歌 今別れて行つては、無常な浮世に生きて又いつ二度逢へる事を期待しませう。

送りにだに せめて私達を見送つて、京まで一緒においで下さい。

袖（姫君を）よりほかに放ち聞えざりつるを、見馴れて（姫君が入道を）まつはし給へる心（姫君の）ざまなど、ゆゆしきまでかく人にたがへる身をいまいましく思ひながら、片時見奉らではいかでか過ぐさむとすらむと、つつ（涙を）みあへず。

（入道）「行く先をはるかに祈る別れ路に堪へぬは老の涙なりけり

いともゆゆしや（不吉な涙だ）」とて、おしのごひ隱す。尼君、

もろともに都は出できこのたび（度に旅をきかせてある）や獨り野中の道にまどはむ

とて泣き給ふさま、いとことわりなり。ここら（尼君の心）契りかはして積（長い年月）りぬる年月のほどを思へば、かう浮きたる（源氏の御志を危むのである）事を頼みて、捨てし世にかへるも、思へばはかなしや。御かた（明石上）、

「いきて（生に行きがきかせてある）又あひ見む事をいつとてか限も知らぬ世をば頼まむ

送りにだに」とせちに宣へど、かたがた（入道は）につけて、えさるまじき由をいひつつ、さすがに道の程も、いとうしろめた（な）き氣色なり。（入道）「世の中を捨て始めしに、かかる人の國（知らぬ田舎に）に思ひくだり侍

ただ君の御ためと　これは全く御身の爲に思ふ存分養育も出來ようかと決心してわざ〱此處へやつて來たのですが。「君の御爲と」の「と」、「心にかなふやうもやと」の「と」は共に「思ひ給へ立ちしかど」につゞく。

ふるずらうの　國司の古手の零落れた仲間として、家の貧しさは昔ながらに變らないもの。金も出來ず、そんなら何か他に得るものがあつたかといふに、惡評を贏ち得たばかりの意。

やがて世を捨てつる　田舍に下つたが即ち浮世を捨てる門出であつたのだと人にも知られて居つたので。

その方につけては　さういふ處置を取つた事につけては、自分ながらよく思ひ切つたものだと思つて居るのだが。

などかう　なぜかうつまらぬ田舍に美しい娘を埋木にしておく事かと、親心の闇も晴間なく歎き續けて居つた。

さりとも　これ程神佛に祈願したのだから。

なか〱　その爲却つて身の卑しさを悲しく歎いて居ましたが。

り事(と)・も、ただ君(明石上)の御ためと思ふやうにあけくれの御かしづきも心にかなふやうもやと思ひ給・へ立ち・しかど、身のつたなか(我身の不遇が思ひ知られる)りけるきは(事實がいくらもあつたので)の思ひ知らるる事多かりしかば、更に都に歸りて、ふるず・らう(りや)の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎(よもぎむぐら)、もとの有様あらたむる事もなきものから、おほやけ私に(公私につけて馬鹿者といふ評判を立てられて)をこがましき名を廣めて、親の御亡き影を(なき親の名譽を傷つけるのがあまりにも殘念で)恥かしめむことのいみじさになむ、やがて世を捨てつる門出なりけりと人にも知られにしを、その方につけては、よう思ひ放ちてけりと思ひ侍るに、君(明石上)のやうやうおとなび給ひ、物お・もほし知るべきに添へて・(は)、などかう口惜しき世界にて錦を隠し聞ゆらむと、心の闇晴間(はれま)なく歎きわたり侍りしままに、佛神を頼み聞えて、さりとも、かう拙き身に(不遇な私に引きずられて一)引かれて、山がつのいほりにはまじり給はじと(生山賤の伏屋に暮す事はあるまいと)、思ふ心一つを頼み侍りしに、思ひ寄りがたくて(思ひも寄らぬ事から)、嬉しき事ども(源氏との契りの事)を見奉りそめても、なか〱身の程をとざまかうざま(とやかくと)に悲しう歎き侍りつれ

契りことに覺え給へば　姫君は格別の因緣ある方とおもはれるから。

見奉らざらむ心惑…心侍りき　「君だちは云々」を修飾する挿入句。

世を照し給ふべき光しるければ　前の「契りことに覺え給へば」と同義同格の語であつて、共に「今日長く別れ奉りぬ」にかゝる。

暫し斯かる山賤の…ありけめ　「ありけめど」の意味で「天に生るる云々」にかゝる修飾的挿入句。

君だちは　姫君は將來立派な方になられる事は明かだから。

天に生るる人の　正法念經に「天上欲レ退時、心生二大苦惱一、地獄諸苦毒十六不レ及レ一」といひ、又「果報若盡、還隨二三途一」とあるのによつた語で、天上界に生れる人が、果報盡きて地獄餓鬼畜生の三惡道に歸る一時になぞらへて。

さらぬ別れ　死別。伊勢物語古今集雜上「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため」

六時の勤め　晨朝、日中、日沒、初夜、中夜、後夜の勤行。

御車は　上洛の用意である。

昔の人もあはれといひける　古今羇旅「ほの〲と明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」傳人麿の歌。

ど、若君(姫君の生れた宿縁の頼もしさに)のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに(入道の瑞夢どほり故頼もしいといつたのである)、かか(姫君が)る渚(なぎさ)に月日を過ぐし給はむもいと忝う、契りことに覺え給へば、見奉ら(姫君を)ざらむ心惑ひはしづめがたけれど、この身(私は)は長く世を捨てし心はンべりき(侍・・・)。君だちは、世を照し給ふべき光しるければ、暫し(一時卑しい私を悲しませるだけの宿縁があつて明石でお生れになつたでせう)斯かる山賤の心を亂り給ふばかりの御契りこそはありけめ。天(てん)に生るる人の、あやしき三つの道に歸るらむ一時(ひとゝき)に思ひなずらへて、今日長く別れ奉りぬ。命盡きぬと聞召すとも(私が死んだと聞いても)、のちの(死後の供養)事おぼしいとなむな。さらぬ別れに御心動かし給ふな」などい・ひ放つものから、(入道)「けぶりとも(臨終の際まで)ならむゆふべまでは、若君の御事をなむ、六時(ろくじ)の勤めにもなほ心ぎたなくうちまぜ侍りぬべき」とて、これにぞうちひそみぬる(泣面をした)。御車は數多續(き)・けむも所せく、かたへ(一部分づつ)づつ分けむも煩はしとて、御供の人々も、あながちに隠・ろへ忍ぶれば、舟にて忍びやかにと定めたり。辰の時(午前八時)に舟出(ふなで)・し給ふ。昔の人(人麿)もあはれといひける浦の朝霧隔たりゆくままに、

心澄みはつまじく　聖心がつゞかぬといふ意に、住みとほせ（明石に）ないといふ意がきかしてある。

こゝら年を經て　多年此處に住み馴れて。

かの岸に　淨土の彼岸を希求して尼になつた私が、背き捨てた都に又歸つて行く事であるよ。

幾返り　私は幾年との浦に住み馴れて今はかない浮木（舟）に乘つて都に歸り行く事でせう。「浮木」にあてにもならぬ不確實の意がきかしてある。

まだこまやかなるには　まだ巨細にわたつて十分設備は出來て居らないが。

住みつかば　住み馴れたら相當に住まれさうである。

親しき家司に　源氏は親しく召使ふ家令に命じて安着の祝宴を催させた。

いと物がなしくて、入道は、心澄み果つまじく（隱遁生活がしとほせまいと思はれる程に夢中になつて）あくがれてながめ居たり。こゝら年を經て（尼君の心）今更に歸るも、なほ思ひ盡きせず尼君は泣き給ふ。

御かた（明石上）、

かの岸に心寄りにしあま（響に尼をきかしてある）舟のそむきしかたに漕ぎ返るかな（尼君）

幾返りゆきかふ秋を過ぐしつゝ浮木に乘りてわれ歸るらむ

思ふかたの風にて（順風が吹いたので豫定の日を違へず入洛した）、限りける日たがへず入り給ひぬ。人に見咎められじの心もあれば、道の程（道中の行裝も手輕にした）もかろらかにしなしたり。家の（大井の）さま（家のさま）も面白うて、年頃經つる海づらに覺えたれば（明石浦に似て居るから場所の變つた氣もしない）、所かへたる心地もせず。昔の事（尼君の心に）思ひいでられて、あはれなる事おほかり。造り添へたる（大井の邸のさま）廊など故あるさまに、水の流れもをかしうなしたり。まだこまやかなるにはあらねど・（も）、住みつかばさてもありぬべし。親しき家司（けいし）に仰せ給ひて、御まうけの事せさせ給ひけり。渡り給はむ事は（源氏自身來訪の事は）、とかうおぼしたばかる程に（とやかく工面して居る間に）日頃經ぬ。

なか〳〵　折角上洛したのに源氏が來てくれないから却つて。

かの御形見の琴　源氏が明石から歸洛の折に「琴は又掻きあはす迄の形見に」といつて殘しておいた事が明石巻にある。

はしたなく　人里は離れてをし、聞く者もなからうと油斷してゐたところが、松風がきいてゐて調子を合はせて吹くのできまりわるく思ふといふ意。

身をかへての歌　出家して生れ變つたやうな氣で而も夫に別れて一人歸つて來たこの山里に、明石で聞き馴れたやうな松風が吹いてくる。

ふる里に　明石で親しくした人達の戀ひしさにたまらないで、明石の蜑の子がおしやべりするお話を―調子外れの彈物を―誰が聞きわけてくれるでせうか。

かくなむと　紫上には、明石上の上洛の事をまだはつきりとは知らせておかなかつたから、他から聞き込まれてはわるいと思つて、お知らせなさつた。

なか〳〵（明石上の心）物思ひつゞけられて、捨てし家居（明石の住居）も戀しうつれ〳〵・なれば、かの御形見の琴（きん）をかき鳴らす。折の（場合が）いみじう忍びがたければ、人ばなれたるかた（人里はなれてゐるといふ點でくつろいで）に打解けてすこし彈くに、松風はしたなく響きあひたり。尼君物がなしげにて寄り臥し給へる・（に）、起きあがりて、

身（尼君）をかへて一人歸れる山里に聞きしに似たる松かぜぞ吹く

御かた（明石上）、

ふる里に見し世の友を戀ひわびて囀ることを誰か分くらむ（言葉に彈物の意をきかしてある）

かやうに物はかなくて（明石上母子が）明し暮すに、おとゞ（源氏）なか〳〵しづ心なくおぼさるれば、人目をもえ憚りあへ給はで渡り給ふ（大井の邸に）を、女君（紫上）には、かくなむとたしかに知らせ奉り給はざりけるを、例の聞きもやあはせ給ふとて、せうそこ聞え給ふ（く）。源「桂に見るべき事侍（用事があるのに）・（こ）るを、いさや、心にもあらで程經にけり。とぶらはむといひし人（明石上の事）さへかのわたり近く來居て待つなれば、心苦しくてなむ（う）。

桂の院 紫上は桂の院と大井の邸とを同處と誤り考へて居るのである。

斧の柄さへ 二三日の滯在といふのが、斧の柄をすげかへるまでになりはすまいか、待遠い事で。述異記「信安郡石室中、晋時樵者王質、逢二童子棊一、與二質一物一、如二棗核一、食レ之不レ飢、置二斧于坐一而觀、童子曰、汝斧柯爛矣、質歸二鄕閭一、無二復時人一」

狩の御ぞに 明石で狩衣のやつれ姿でおいでなさつた時でさへまだ見たこともない美しさと明石上は思つたのに。

今まで隔てける 今まで明石上に逢はずに居つた年月さへ。

大殿腹の君 左大臣の女葵上の腹に生れた夕霧。

嵯峨野の御堂にも、飾りなき佛の御とぶらひすべければ、二三日は侍りなむ」と聞え給ふ。桂の院といふ所俄に造らせ給ふと聞くは、そこにするゑ給へるにや、と思すに、心づきなければ、「斧の柄さへあらため給はむほどや待ちどほに」と、心ゆかぬ御氣色なり。「例のくらべぐるしき御心かな。『いにしへの有樣名殘なし』と世の人もいふなるものを」と、何やかやと御心取り給ふ程に、日たけぬ。忍びやかに、御前うときはまぜで、御心づかひして渡り給ひぬ。たそがれ時におはしつきたり。狩の御ぞにやつれ給へりしだに、世に知らぬ心地せしを、ましてさる御心して引きつくろひ給へる御直衣姿、世になくなまめかしうまばゆき心地すれば、思ひむせびつる心の闇も晴るるやうなり。珍らしうあはれにて、若君を見給ふも、いかが淺くはおぼされむ。今まで隔てける年月だに、あさましくくやしきまでおぼす。大殿腹の君を、美し

なほ時世によれば 畢竟人の心は權勢に附くのが常だから、さう思ふだけなのだ。

かくこそは 將來美人となる人の生立は今から一目で分るのだと。「かくこそは」は「しるかりけれ」につゞく。かういふやうにはつきりわかつてゐる。六帖一「秋霧の立ちまふ嶺の山口はかねてぞしるきうつろはむとて」

ここにも 「渡らむこと」にかゝる。

かの本意ある所 二條院の東院。

うひ〳〵しき程 上洛したばかりで所馴れず萬事につつましい當座。

つくろふべき所 大井邸の修理すべき箇處を、その管理人や今度新に加へた家令等に命ずる。

前栽どもの 大井邸の。

げなりと世人もて騒ぐは、なほ時世によれば、人の見なすなりけり、かくこそはすぐれたる人の山口はしるかりけれ、と、うちゑみたる顏の何心なきが、愛敬づき匂ひたるを、いみじうらうたしとおぼす。乳母の、くだりし程は衰へたりしかたち、ねびまさりて、月頃の御物語など馴れて聞ゆるを、あはれにさる鹽屋のかたはらに過ぐしつらむことを思し宣ふ。「ここにも、いと里ばなれて、渡らむことも難きを、なほかの本意ある所に移ろひ給へ」と宣へど、「いとうひ〳〵しき程過ぐして」と聞ゆるも、ことわりなり。夜一夜、よろづに契り語らひあかし給ふ。つくろふべき所、所のあづかり、今加へたる家司などに仰せらる。桂の院に渡り給ふべしとありければ、近き御庄の人々、參り集まりたりけるも、皆たづねまゐりたり。前栽どもの折れ伏したるなど、つくろはせ給ふ。「ここかしこの立石どもも、皆まろび失せたるを、なさけありてしなさば、をかしかりぬべ

かかる所を　こんな一時の假住居を念入に手入するのも詰らぬ事だ。

さても過ぐし果てねば　手入した處で此儘いつまでも住むのではないから。この後に「つまらない」といふ意の語が省かれてある。

立つ時物憂なく　出立の時つらくて、心殘りするのが、明石から歸洛した時にもつらかつた。「苦しかりき」と過去にいつてある點に注意しなければならぬ。

閼伽の具　佛に奉る水を入れる道具。

いとしどけなき姿　源氏が直衣をぬいで袿姿で居る不作法を謝するのである。

き所かな。かかる所をわざとつくろふも、あいなきわざなり。さても過ぐし果てねば。立つ時物憂く心とまる、苦しかりき」など、（明石にての事）きし方の事ども・宣ひいでて、泣きみ笑ひみ打解け給へ（宣）る、いとめでたし。尼君、のぞきて見奉るに、老も忘れ物思ひも晴るる心地して、うちゑみぬ。東の渡殿のしたより出づる（遣水）水の心ばへ、つくろはせ給ふとて、（源氏のさま）いとなまめかしき袿姿、うちとけ給へるを、（尼君の心）いとめでたう嬉しと見奉るに、閼伽の具などのあるを（源氏が）見給ふに、おぼし出でて、源「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、（禮儀深いさま）御直衣召しいでて奉る。（尼君の傍へ源氏が）几帳のもとに寄り給ひて、源「罪かろく（姫君を立派に養育した事）おほし立て給へる人の故は、御行ひの程あはれにこそ思ひなし聞ゆれ。いといたく思ひすまし給へりし（明石の）御すみかを捨てて、憂き世に歸り給へる（上洛した心の程がありがたい）志あさからず。又（入道の事）かしこには、いかにとまりて思ひおこせ給ふらむと、（こちらの事を）さま〲になむ」と、いとなつかしう宣ふ。尼「捨て侍りし世を、今更に

今は頼もしき　今では將來屹度幸福になられるものと頼もしくお祝ひ申して居るのですが、何分種姓が卑しいので、どうなる事やらと、あれこれと氣が揉めてなりませぬ。

昔物語に　尼君の祖父中務宮が此處に住んで居られた折の有樣などを、昔物語として、尼君に語らせてお聞きになるに。

住み馴れしの歌　昔住み馴れた自分こそ却つて昔の事を忘れてたど〱しうございますけれども、遣水の方が宿の主人顏をして昔の事を物語つてゐます。

いひけつさま　自分は王孫などいふ尊い身分でないといふことを忘れた體にごまかしてしまつたのを、正面から否定しないで我が者の種姓をくさすとほめたのである。

小井の歌　源氏の歌。遣水は昔の事を忘れる事もあるまいが、もとの主人のあなたが昔にかはつて（明石時代の馴染を忘れて）種姓を打明けても下さらないのだらうか。昔は飲用水は流れてゐても井といつてゐた。走り井といふのがそれである。

月ごとの　毎月十四日に行はれる普賢講、十五日の阿彌陀講、晦日の釋迦講の念佛の三昧は勿論の事。

立ちかへり思ひ（給へ）・・亂るるを、（御推察下さいましたので）推し量らせ給ひければ、命長さのしるしも思ひ給へ知られぬる」と、うち泣きて、尼「荒磯蔭に心苦しう思ひ聞えさせ侍りし（姫君の事）二葉の松も、今は頼もしき御生先と祝ひ聞えさするを、淺き根ざしゆゑやいかがと、かた〲・心つくされ侍る」など、聞ゆるけはひ（尼君の樣子が風情なくはないから）よしなからねば、昔物語に・（中務卿親王）みこの住み給ひける有樣など語らせ給ふに、（手入された遣水の音が）つくろはれたる水の音なひ、（こんなに昔の姿の變つたのも源氏の爲だといつてをるやうに）かごとがましう聞ゆ。

尼君「住み馴れし人は却りてたどれども清水ぞ宿の主人がほなる

わざとはなくていひけつさま、みやびかによしと（源氏が）聞き給ふ。

「小井は早くの事も忘れじをもとのあるじや面變りせる

あはれ」と打眺めて立ち給ふ姿匂ひ（を）・、世に知らずとのみ（尼君の）思ひ（心に）きこゆ。

（嵯峨野の御堂）御寺にわたり給ひて、月ごとの十四五日つごもりに（の日）・行はるべき普賢講、阿彌陀、釋迦の念佛の三昧をばさるものにて、また

めぐらし仰せらる 人々に觸れまはしてお命じになる。
歸り給ふ 御堂から大井邸に。
ありし夜の事 明石の岡邊の宿の一夜の事を君が思ひ出される機會を逸せず。
まだ調べも變らず まだ調子もあの時の儘であるので。
契りしに 昔の約束通りこの琴の調子が變つて居ない事によつて、私の變らぬ心の程が分りましたか。「絶えぬ」は糸の縁語。
變らじとの歌 變らぬとお誓ひなされた一言を頼りにして、私は松風に泣く音を添へて參りました。君待ちわびて泣く音を。
隱ろへたる 此姫君が日蔭者で育つのが氣の毒で殘念だから。
二條の院に渡して 紫上の養子にしての意。
のちの覺えも 後に入内などする折にも卑しい腹の子を差上げるといふ咎めを免れる事だらうと源氏は思ふが。

また加へ行はせ給ふべき事定めおかせ給ふ。堂の飾り、佛の御(みん)具(ぐ)など、めぐらし仰せらる・(給うて)。月のあかき・(程)に・(又)歸り給ふ。(源氏の心に)ありし夜の事おぼしいでらるる折過ぐさず、かの琴(きん)の御こと(明石上が源氏に)さし出でたり。(源氏の心)そこはかとなく物あはれなるに、え忍び給はで掻き鳴らし給ふ。まだ調べも變らず、(昔に立返って)引きかへしその折今の心地し給ふ。

(源氏)契りしに變らぬことのしらべにて絶えぬ心の程を(は)知りきや

(明石)女、

變らじと契りしことを(言に琴をきかしてある)頼みにて松(松に待の心を)の響きに音を添へしかな

と聞えかはしたるも、(源氏に不釣合でないのは)似げなからぬこそは身にあまりたる有様なめれ。(源氏心)こよなう(明石上のさま)ねびまさりにけるかたちけはひ、えおもほし捨つまじう、(姫君)若君はた盡きもせず(見まもる)まもられ給ふ。(源氏心)いかにせまし、隱ろへたるさまにて生ひ出でむが心苦しう口惜しきを、(紫上の手許に)二條の院に(つれていって)渡して、心のゆく限りもてなさば(世話したならば)、のちの覺えも罪まぬか

又思はむ事 明石上が何と思ふかとそれが氣の毒で。
又の日は 翌日は京へお歸りになる豫定だから。
やがてこれより 大井から眞直に歸る積りであつたが。
見では 此の子を見ずには苦痛でありさうだとは現金な心だ。
いと里遠しや 元眞集「里遠みいかにせよとか斯くのみは暫しも見ねば戀しかるらむ」
遙に思ひ給へたりつる 遠い明石浦で思ひ歎いて居りました今迄よりも、これからの御世話に手がぬけるやうでは氣の揉める事でござります。河内本「思ひ給へたへつる」は本の儘。

れなむかし、とお・(も)ぼせど、又思はむ事いとほしくて、(源氏は言ひ出)えうち出で(しかねて)給はで、涙ぐみて見給ふ。(姫君は)をさなき心地に、すこし恥ぢらひたりしが、(源氏に)やう〳〵打解けて、物いひ笑ひなどしてむつれ給ふを見るままに、匂ひまさりてうつくし。(源氏が姫君を)抱きておはするさま、見るかひありて、(姫君の幸福は此上もない)宿世こよなしと見えたり。

又の日は京へ歸らせ給ふべければ、すこし大殿籠り過ご(ぐ)して、やがてこれより出で給ふべきを、(源氏がゐられるかと思つて)桂の院に人々多く參り・つど・ひて、(大井)ここにも殿上人あまた參りたり。(源氏は)御裝束などし給ひて、(源)「いと(きまりのわるい事だ)はしたなきわざかな。(誰にも見つけられない隱家だと思つて居ったに)かく見あらはさるべき隈にもあらぬを」とて、さわがしきに引かれて出で給ふ。(明石上に氣の毒故)心苦しければ、さりげなく紛らはして、立ちとまり給へる戸口に、乳母、若君いだきてさし出でたり。(源氏のさま)あはれなる御氣色に(姫君を)かき撫で給ひ(たま)て、(源)「見ではいと苦しかりぬべきこそいとうちつけなれ。いかがすべき。いと里遠しや」と宣へば、(乳母)「遙に思ひ給へたりつる(こ)年頃よりも、

いづら　さあ。促がす言葉。
さらばこそ　さうして貰へば一人前の氣持もしように。
なか／＼　逢つて見ると却つて。
あまり上衆めかしと　あまり上﨟らしい態度だと源氏はお思ひになつた。
帷子引きやりて　源氏は几帳の垂布を引きのけてこま／＼と話して歸りかけて。
さこそしづめつれ　明石上は先刻まであれ程落着いて動かなかつたのだが。

今からの御もてなしの覺束なう侍らむは心づくしに」など聞ゆ。
若君手をさしいでて、（源氏の）立ち給へるを慕ひ給へば、（源氏は）ついゐ給ひて、
（源）「怪しう物思ひ絶えぬ身にこそありけれ。しばしにても苦しや。
いづら。（なぜ姫君と一緒に見送つて別れを惜んでは下さらぬ）などもろともに出でては惜しみ給はぬ。さらばこそ人
心地もせめ」と宣へば、（乳母が）うち笑ひて、（明石上に）女君に斯くなむと聞ゆ。
（明石上のさま）なか／＼物思ひ亂れて臥したれば、とみにしも動かれず。あま
り上衆（じやうず）めかしとおぼしたり。（女房達も源氏の手前をわるがるから）人々も傍痛がれば、（明石上は）しぶ／＼にゐ
ざり出でて、几帳にはたかくれたるかたはらめ、いみじうなま
めいて、よしありをやぎたるけはひ、（内親王達といつてもよい位である）みこたちといはむにも
足りぬべし。帷子（かたびら）引きやり（あゆ）て、こまやかに語らひ出・で・給ふとて、
とばかり（明石上を）かへり見給へるに、さこそしづめつれ、見送り聞ゆ。
（源氏のさま）いはむ方なき盛りの御かたちなり。（背がすらりとしてゐられたが）いたうそびやぎ給へりしが、
（縱横が釣合ふ程に）すこしなりあふ程になり給ひにけり（る）。御姿など、かくてこそ物
しかりけれと、御指貫の裾まで、なまめかしう愛敬のこぼれ

あながちなる　强ひて見る慾目であらう。
靫負の尉にて　衞門尉を兼任して今年從五位下に叙せられた。
御佩刀　源氏の御佩刀を。
人影を見つけて　明石で見知つて居つた女房を見つけて。
浦風覺え侍る　明石の浦風に似てゐるやうな大井の曉の寢覺の折にも、御消息申上げるつてさへなくて。
氣色ばむを　意味ありげにいふのを聞いて。
島隱れ　古今集の例の「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞおもふ」の歌。
松も昔の　古今雜上「誰をかも知る人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」
こよなしや　これは飛んでもない事をいふ。靫負尉は嘗て明石上を戀した事があるからその意味でいつたのに、女房はそれを自分の事と心得て返事したから靫負尉は斯ういつたのである。
うちけざやぎて　はつきりした態度で。未練氣なしにの意。

出づるぞ、あながちなる見なしなるべき。かの（発官された）解けたりし藏人
も（復職した）かへりなりにけり。靫負（ゆげひ）の尉（じよう）にて、今年（叙爵）かうぶり得てけり。
昔にあらため、心地よげにて、御佩刀（はかし）取りに寄り來たり。人影
を見つけて、（靫負）「（あの當時の事は忘れないが）さし方の物忘れし侍らねど、かしこければ、え・
こそ。浦風覺え侍・る（つ）曉のねざめにも、驚かし聞えさすべきよ
すがだになくて」と氣色ばむを、（女房）「（大井の事）八重立つ山は、更に（明石浦の事）島隱れ
にも劣らざりけるを、（古い友達もない事を心もとなく思つて居ましたに）松も昔のとたどられつるに、忘れぬ人も
物し給ひけるに、賴もし・・・（くなん）」など（答）いふ。（靫負尉心）こよなしや、我も
思（ふ心）ひ・なきにしもあらざりしを、など、（あきれたけれども）あさましうおぼゆれど、
（又改めてお訪ねします）「今殊更に」と、うちけざやぎて（お供した）參りぬ。（源氏が威儀を正してお歩きになる時）いとよそほしくさし
歩み給ふほど、かしがましう追ひ拂ひて、御車の尻に頭中將、
兵衛督乘せ給ふ。（源）「いとかる（ろ）／＼しき（大井邸の事）隱れが、見あらはされぬ
るこそねたう」と、（源氏が）いたうからがり給ふ。（頭中等）「よべの月に、口
惜しう御供におくれ侍りにけると思ひ給へられしかば、今朝、

小鷹に　小鷹狩をして居つたのですが。小鷹は、はやぶさ、はいたか、このり、つみ等小形鷹類の總稱。

海人のさへづり　須磨卷五〇頁。

醉ひにまぎれて　人々は醉ひの爲に諸事を忘れて終日遊び暮された。

彈物　絃樂器。

うへにさぶらひけるを　この四五人は主上の御前に伺候して居たのだが。

霧をわけてまゐり侍(つ)る。山の錦はまだしう侍りけり。野邊の色こそさかりに侍りけれ。なにがしの朝臣の、小鷹にかかづらひて、立ちおくれ侍りぬる、いかがなりぬらむ」などいふ。「今日はなほ桂殿に」とて、そなたざまにおはしましぬ。俄なる御あるじしさわぎて、鵜飼ども召したるに、海人のさへづりおぼし出でらる。野にとまりぬる君だち、小鳥しるしばかり引きつけさせたる荻の枝など、つとにして參れり。大御酒あまたたびずん流れて、川のわたりあやふげなれど(は)、醉ひにまぎれておはしまし暮しつ。おの〳〵絶句など作りわたして、月花やかにさしいづる程に、大御遊び始まりて、いと今めかし。彈物(は)・琵琶、和琴ばかり、笛ども上手の限りして、折にあひたる調子吹き立つるほど、川風(に)・吹きあはせて面白きに、月高くさしあがり、よろづの事澄める夜のやや更くる程に、殿上人四五人ばかりつれてまゐれり。うへにさぶらひけるを、御遊びありけるついで

月のすむ　月が常住の地としてゐる桂川の川向の里の事故、さぞ桂の月影は長閑な事でせう、月の常住の地だから、月の入るといふ心配もない筈だから。さういふ面白い所に興を盡されるあなた方が羨しい、と歌から詞に續く。「桂の影」は月光のこと。この歌は月中に桂樹があるといふ傳說があるので、それを地名の桂に結びつけてよんだもの。

設けの物　祿や引出物として豫て用意してあるかづけ物。

ひさかたの　桂といへば名だけは月の光に近うございますが、此の山里は朝霧夕霧の晴間はございませぬ。この歌は古今雜下の「久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ賴むべらなる」の歌を踏んだので、光を賴むとは行幸を待ち奉る意である。故に「行幸待ち聞え給ふ御心ばへなるべし」といつたのである。

所がらかも　新古今雜上躬恒「淡路にてあはと遙に見し月の近き今宵は所がらかも」

に、「今日は六日の御物忌あく日にて、必ず參り給ふべきを、いかなれば」と仰せられければ、ここにかう(く)とまらせ給ひにける由聞召して、御消息あるなりけり。御使は藏人の辨なりけり。

「月のすむ河のをちなる里なれば桂の影はのどけかるらむ

羨ましう」とあり。かしこまり聞えさせ給ふ。うへの御遊びよりも、なほ所がらのすごささへ添へたる物のねをめでて、また醉ひ加はりぬ。ここには設けの物もさぶらはざりければ、大井に、「わざとならぬ設けの物や」と、いひつかはしたり。とりあへたるに從ひて參らせたり。衣櫃二かけにてあるを、御使の辨は疾く歸りまゐれば、女の裝束かづけ給ふ。

「ひさかたの光にちかき名のみしてあさゆふ霧も晴れぬ山里

行幸待ち聞え給ふ御心ばへなるべし。「なかに生ひたる」とうちずんじ給ふついでに、かの淡路島をおぼし出でて、躬恒が、「所がらかも」とおぼめきけむ事など宣ひいでたるに、物あはれ

廻り來て 源氏の歌。この里まで廻つて來て手に取る程手近かに澄んでゐる月が、嘗て明石浦であれが都の月かと眺めたその月であらうか。「淡路の島の」は「あは」の枕詞。源氏が明石で「あはと見るあはぢの島のあはれさへ殘る隈なくすめる夜の月」と讀んだのとも結びつけて見るべき歌である。
浮雲にの歌 浮雲の爲にまごついた月影が澄みきつた今日はもはや何の心にかゝる雲もなくのび〳〵として居られる事だらう。「まよひし」の方がよからうと思ふ。
雲の上の 故院は崩御遊ばして何處に御姿をおかくしになつた事だらう。
今日さへは 今日までも遊び暮す事は出來ない。
しな〴〵に 身分に應じて頂戴してそれを肩に打掛けて。
物の節 近衞府の舍人中東遊に堪能なる者。
其駒 神樂歌其駒「その駒ぞや我に、我に草乞ふ、草は取り飼はむ、轡取り、草は取り飼はむや、水は取り飼はむや」
ぬぎかけ給ふ 人々が舍人や物の節に祿としてかづける色さま〴〵の衣裳。

れなる（思ひ出深い）醉ひ泣きどもあるべし。
廻（めぐ）り來て手に取る許りさやけきや淡路の島のあは（あれは）と見し月
頭中將、
浮雲に（浮に憂をきかしてある）暫しまが（よ）ひし月影のすみ（澄みに住みをきかしてある）果つる世ぞのどけかるべき
右大辨、すこし（この人は少し年ふけて居つて）おとなびて、故院（桐壺院）の御時にも、睦まじう仕うまつり馴れし人なりけり。
雲の上（右大辨）のすみかを捨てて夜半の月いづれの谷に影隱しけむ
心々にあまた（歌が）あ・（ん）めれど、うるさくてなむ。けぢかう打靜まり（君の打解けてしんみりとした御物語が）たる（多少碎けて來て）御物語すこし打亂れて、千年も見聞かまほしき・（お ほ ん）・御有樣なれば、斧の柄も朽ちぬべけれど、「今日さへは」とて、急ぎ歸り給ふ。物（引出物を）どもしな〴〵にかづき（け）て、霧の絶間に立ちまじりたるも、前栽の花に見えまがひたる色合（祿の絹の色）など、殊にめでたし。近（近）衞（衞府）づかさの名高き舍人（とねり）、物の節（ふし）どもなどさぶらふに、さう〴〵し（この儘歸るのが物足りないから）ければ、「其駒」など亂れ遊びて、ぬぎかけ給ふ色々、秋の錦を

いとま聞えし お約束の暇乞の日限が過ぎたので。二一六頁に「二三日は侍りなむ」とあつた。
例の心解けず 紫上の樣子が例の如く不機嫌さうに見えるが。
なずらひならぬ 比較にもならぬ卑しい明石上を、御自分と比べてお考へになるのはよくない事です。
そば目こまやかに わきから瞥見するに、こま〴〵と認めて居られるらしい。
御達など 紫上の女房達は。
解けざりつる 直らなかつた紫上の機嫌取りに。

風の吹きおほふかと見ゆ。ののしりて歸らせ給ふ響きを、大井（明石上の方）には物隔てて聞きて、名殘淋しうながめ給ふ。御消息をだにせ（明石上に消息をさへ遣さずに歸るのかと源氏も氣がかりに思召した）で、と、おとども御心にかかれり。殿に（二條院に歸着して）おはして、とばかり打休み給ふ・（ひ て）。山里の御物語など聞え給ふ。源「いとま聞えし程・（に）過ぎつれば、いと苦しうこそ。この（例の）すきもの（ずき連中がやつて來て）どもの尋ね來て、いといたう強ひとどめしに引かされて、今朝はいとなやまし」とて、大殿籠れり。例の心解けず見え給へど、見知らぬやうにて、源「なずらひならぬ程（明石上の事）を、おぼしくらぶるも、わろきわざなめり。我は我と思ひなし給へ（自分は自分だ人の事などどうでもよいと高く構へて下さい）」と教へ聞え給ふ。暮れかかるほどに、うち（禁中）に參り（へ）給ふに、引きそばめて（物蔭に引寄せて書く手紙は）急ぎ書き給ふは、かしこ（大井）へなめり。そば目こまやかに見ゆ。うちささめきて遣はすを（使に小聲でいひ含めて遣すのを）、御達（ご たち）など憎み聞ゆ。その夜はうちにもさぶらひ給ふべけれど（禁中に宿直なさる筈であつたが）、解けざりつる御氣色取り（ど も）に、夜更けぬれどまかで給ひぬ（御歸邸になつた）。ありつる御返り（先刻の御返事を大井から持參した）もてまゐれり。え引き隱（紫上に隱す譯に行）

斯かる物の　こんな女文などがそこに散らばつて居るのも。

せめて見隱し給ふ　強ひて見ぬ風をなさるその目付が私には氣になる。

まことは　實は可愛い姫君もあるので淺い緣とも思はれませんが、といつてそれを大切らしく扱ふのも憚り多いので、思ひ惱んで居ます。

此處にて育み　あなたのお手で育てては下さらんか。

蛭の子がよはひ　三歳の事。神代紀上「次生二蛭子一雖二已三歲一脚猶不レ立」日本紀竟宴和歌「かぞいろは哀と見ずや蛭の子は三年になりぬ足立たずして」朗詠集には上句「かぞいろはいかに哀と思ふらむ」

いはけなげなる　裳着をさせてやりたいと思つて居ますが。

下つ方も　腰の方も。

し給はで御覽ず。殊に憎かるべきふしも見えねば、「これ、やり隱し給へ。むつかしや。今はつきなき程になりにけり」とて、御脇息に寄り居給ひて、御心のうちには、いとあはれに戀しうおぼしやらるれば、火をうち眺めて、殊に物も宣はず。文はひろごりながらあれど、女君見給はぬやうなるを、「せめて見隱し給ふ御まじりこそ煩はしけれ」とて、うちゑみ給へる御愛敬、所せきまでこぼれぬべし。さし寄り給ひて、「まことは、らうたげなるものを見しかば、契り淺くも見えぬを、さりとて、物めかさむ程も憚りおほかるに、思ひなむ煩らひぬる。おなじ心に思ひめぐらして、御心に思ひ定め給へ。いかがすべき。此處にて育み給ひてむや。蛭の子がよはひにもなりにけるを、罪なきさまなるも思ひ捨てがたうこそ。いはけなげなる下つ方もまぎらはさむなど思ふを、めざましとおぼさずば、引きゆひ給へかし」と聞え給ふ。「思はずにのみ取

いはけなからむ　私は小さい人にはお氣にかなふでせう。

年のわたりには　年に一度の機棚の契りよりはましだから、これ以上は叶はぬ願ひと諦めては見るものの、やはり物思は絶えない。後撰秋上「玉かづら絶えぬものからあら玉の年のわたりは只一夜のみ」

りなし給ふ御心の隔てを、せめて見知らずうらなくやはとてこそ。いはけなからむ御心には、いとようかなひぬべくなむ。いかにうつくしき程に」とて、すこしうちゑみ給ひぬ。ちごをわりなうらうたきものにし給ふ御心なれば、得て抱きかしづかばやとおぼす。いかにせまし、迎へやせまし、とおぼし亂る。渡り給ふこといと難し。嵯峨野の御堂の念佛など待ちいでて、月に二たびばかりの御契りなめり。年のわたりには立ちまさりぬべかめるを、及びなき事と思へども、なほいかが物思はしからぬ。

つらき所 細流「後撰十一に、假初なる所に侍りける女に心變りにける男の、こゝにては斯くびんなき所なれば、志はありながらなん、え立寄らぬといへりければ、所をかへて侍りけるに、見えざりければ、女、宿かへて待つにも見えずなりぬればつらき所の多くもある哉、此詞書歌能く是に叶へり。愛も彼處もつらき所多かるべしと也。明石上の心は二條院に移りても源の同じさまにかれ〴〵にし給はゞいかがの心也」

試み果てむも、 明石でためし大井でためし、また二條にいつてためして見たりして、源氏の無情をためしきつてしまつたら、あとには何にも殘つてゐないやうな氣がするだらうが、それでも無情が止まなかつたら。

いかにいひてか 拾遺戀五「恨みての後さへ人のつらからばいかにいひてか音をも泣かまし」

かくてのみは 此儘置くのは不都合な事です。

思ふ心あれば 將來女御后にもと心ざして居るのだから、斯かる川づらの住居は姬君に對して畏多い。

對に 紫上が噂を聞いて姬君を見たがつて居るから、姬君を二條院に引取つて紫上に馴染ませて。

さおぼすらむと さういふ御意見だらうと思つて居た事故。

うしろやすからぬ 繼子としていぢめられはせぬかなどとの御心配は無用。

（源氏三十二歳の冬）冬になりゆくままに、河づら（明石上の大井の住居）のすまひ（は）いと心細さまさりて（なるに）、（明石上のさま）うはの空なる（惘然として心の落着かぬ事）心地のみしつつ明し暮すを、君も、「なほかくては（此儘では濟せまい）え過ぐさじ。かの近き所（二條院の東院に引移る決心をしなさい）に思ひ立ちね」と勸め給へど、つらき所おほく試み果てむも殘りなき心地すべきを、いかにいひてかなどいふやうに、思ひ亂れたり。（源）「さらば此の若君（姬君今年三つ）を、かくてのみはびんなき事なり。思ふ心あれば（いと）忝し（くなん）。（かの）對（紫上）に聞きおきて常にゆかしがる（り給ふ）を、暫し見ならはさせて、袴著（はかまぎ）の事なども、人知れぬさまならずしなさむとなむ思ふ（を）」と、（源氏が明石上に）まめやかに語らひ給ふ。さ（ぞ）おぼすらむと思ひわたる事なれば、（明石上は）いとど胸つぶれぬ。（明石）「（紫上の子として大切に取扱はれた所で）あらためてやんごとなき方にもてなされ給ふとも、人の漏り聞かむ事は、なかなかにやつくろひがたく思されむ」とて、（姬君を）放ちがたく思ひたり。（源）「ことわりにはあれど、（紫上に渡しては）うしろやすからぬ方にやなどは、な疑ひ給ひ（う）そ。（紫上の事）かしこには、年經ぬれど、（子供のないのが物足らぬ故）かかる人もなきがさうざうしく覺ゆるままに、前（さき）

前齋宮 六條御息所の女梅壺。秋好。今年二十二歲。紫上は二十三歲。

おぼろげの 並大抵の因緣ではない。

人の御有樣も 紫上の人柄も多くの婦人達の中ですぐれて居られたからだ。

かずならぬ身の 自分如きつまらぬ者が肩を並べる事の出來る寵愛でもないのに。

さすがに 紫上が如何に思ふやうなる人であつても、自分が、出しやばつたら、さすがにの義。「めざましとおぼす」を修飾する語。

人もめざましと 紫上も自分をけしからぬと思召す事もあらう。

とてもかくても どちらにしても現狀と變りはない。

何心なき程に 姬君がまだ物心のつかぬ内に紫上に渡してしまはう。

讓り聞え 河內本「讓りき聞え」は本の儘。

齋宮のおとなび物し給ふをだにこそ、あながちにあつかひ聞ゆめれば、・まして斯く憎みがたげなめる程・を、おろかには思ひ放・つまじき・・心ばへにな・む」・と、女君の御有樣の思ふやうなる事・も語り給ふ。げに古へは、いかばかりの事に定まり給ふべきにかと、・つてにもほの聞えし・・・・・・・・御心の、名殘なくしづまり給へるはおぼろげの・・御宿世にもあらず、人の・・御有樣も、こころの御なかにすぐれ給へるにこそはと、思ひやられて、かずならぬ人の・・・・並び・・聞ゆべき覺えにもあらぬを、さすがに立ちいでて、人もめざましとおぼす事やあらむ、わが身はとてもかくても同じこと。生ひ先遠き人の御うへも、遂にはかの御心にかかるべきにこそあめれ、さ・・・りとならば、げに斯う何心なき程にや讓り・聞え・まし、と思ふ。又、手を放ちてうしろめたからむ事、つれ〴〵も慰む方なくては、いか・が明し暮

たまさかの 稀々の源氏の御來訪も絕えよう。

あぢきなし それは詰らぬ事です。

淺くおぼして 源氏もいい加減なお考で仰しやるのではあるまい。

母方がらこそ 母方の種姓によりて皇子でも差等があるのです。

故大納言の 外祖父大納言が他の女御達の父君より身分が一段低かつた爲に源氏が更衣腹と人々に賤しまれた、その差別によるのです。

ましてただ人は 帝の御子でもさうだ。まして普通の家では比較にもならない。

又みこたち大臣の 親王達や大臣の女の腹に生れた子供でも、さしあたり落ちぶれた家に生れた者は。尼君は中務卿宮の孫女で、本の種姓は貴いが今零落してゐるのである。それを含んでいつてゐるのである。この釋諸註皆誤つてゐる。

程々につけて 子供といふものは身の程相應に、親からも大事にされる子供こそ他人からも輕蔑されぬ初めとなるのです。

すべからむ、何につけてかたまさかの御たちよりもあらむ、など、さま〴〵思ひ亂るるにも、身の憂きこと限りなし。尼君、思ひやり深き人にて、「あぢきなし。見奉らざらむことは、いと胸痛かりぬべけれど、遂にこの御ためによかるべからむ事をこそ思は・・・め。淺くおぼして宣ふ事にはあらじ。只うち賴み聞えて、渡し奉りたまひてよ。母方からこそ・御門の御子もきは〴〵におはすめれ。このおとどの君の、・・世に二つなき御有樣ながら、・・・世に仕へ給ふは、故大納言の、今一きざみなりおとり給ひて、更衣腹といはれ給ひしけぢめにこそおはすめれ。ましてただ人は、なずらふべき事にもあらず。又みこたち大臣の御腹といへど、なほさし向ひたる劣りの所に・・・・は、人も思ひおとし、親の御もてなしも、えひとしからぬものなり。ましてこれは、やんごとなき御方々に斯かる人出で物し給はば、こよなく消たれ給ひなむ。程々につけて、親

にも一ふしもてかしづかれぬる人こそ、やがておとしめられぬ初とはなれ。御袴著の程も・・、いみじき心を盡すとも、かかるみ山隠れにては、何のはえかあらむ。只まかせ聞え給ひて、もてなし・・給はむ・有樣をも聞き給へ」と敎ふ。さかしき人の心のうらどもにも、物問はせなどするにも、「なほ渡り給ひてはまさるべし」とのみいへば、思ひ弱りにたり。殿もしかおぼしながら、思は・む所のいとほしさに、強ひてもえ宣はで、「御袴著のこと、いかやうにか」と宣へる御返りに、「よろづの事・・かひなき身にたぐへ聞えては、げに生ひ先もいとほしかるべく覺え侍るを、立ちまじりて・、いかに人笑へにや」と聞えたるを、いとあはれにおぼす。日など取らせ給ひて、忍びやかにさるべき事など宣ひおきてさせ給ふ。放ち聞えさせむことは、なほいとあはれに覺ゆれど、君の御ためによかるべき事をこそは、と念・・ず。「乳母をも引き別れなむこと、あけくれの物思

もてなし給はむ　どんなお扱ひをなさるかその樣子を聞いて御覽なさい。

殿も　源氏も姫君を引取る方がよいとは思ひながらも、明石上の心中が氣の毒で。

よろづの事　萬事取るに足らぬ私の手許に姫君を置いては。

立ちまじりて　姫君が人中に出ては、どんなに笑ひものになります事やら。

放ち聞えさせむ　明石上は姫君を手放す事をやはり可愛さうに思ふけれども。

乳母をも　乳母は姫君と一緒にあちらに行くからその乳母と別れる事も。

はしさ、つれ〳〵をもうち語らひて慰めならひつるに、いとどたづきなき事をさへ取添へ、いみじう覺ゆべき事」と・君も泣く。乳母も、「さるべきにや、覺えぬさまにて見奉りそめて、年頃の御心ばへの忘れがたう戀しう覺え給ふべきを、打絶え聞ゆる事はよも侍らじ。遂にはと頼み・・・ながら、暫しにてもよそ〳〵に・・思ひのほかのまじらひし侍らむが、安からずも侍るべきかな」など、打泣きつつ過ぐす程に師走にもなりぬ。雪霰がちに心細さまさりて、あやしくさま〳〵に物思ふべかりける身かな、と打歎き・て、常よりもこの君を・・・撫でつくろひつつ・ゐたり。雪かきくらし降り積・・るあした、きし方ゆく先の事殘らず思ひ續けて、例は殊に端近なるいでゐなどもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなる・數多著て、眺めた・・る容體、頭つき、うしろでなど、かぎりなき人と聞ゆとも、かうこそ・おはすらめと見ゆ。落つる涙を

いとどたづきなき事を　その乳母まで居なくては一入頼りなさまでが附け加はつて悲しく思はれる事だらう。

打絶え　これぎりになる事はよもやございますまい。

遂にはと　結局御前樣もあちらにお移りになつて又お側に居られることと當てにはして居ますが。

なよよかなる　糊氣のない。糊氣があるとごは〳〵して寒いからである。

かぎりなき人と　どんな貴人でもこれ位のものだらうと思はれる。

かやうならむ日 姫君の居なくなつた後の事を想像していふのである。

雪深き 明石上歌。いつまでも文通を絶やさないで下さい。

ゆきまなき 乳母の歌。心の通ふ跡は絶えず始終御音信申上げます。古今誹諧歌の「もろこしの吉野の山にこもるともおくれんとおもふ我ならなくに」の意味で吉野山を用ひてゐる。即ち如何に人里遠い山奥でもの意。王朝時代には吉野山を深山と考へてゐたと考へられる事實は多い。

さならむと 姫君お迎への爲だらうと思ふから。

わが心にこそ 姫君をやるやらぬは自分の勝手なのだ。

かろ〴〵しきやうなり 今更違變する事は輕率なやうだと強ひて思ひ返す。

いとうつくしげにて 姫君がかはいらしい姿をして明石上の側にゐらるるのを源氏が御覽になつてゐる。

よその物に こんな美しい子を他人の物にして案じ暮す明石上の親心を御推察なさると。

かい拂ひて、「かやうならむ日、ましていかに覺束なからむ」と、らうたげにうち歎きて、

雪深きみ山の道は晴れずともなほふみかよへ跡絶えずして

と宣へば、乳母・・・・打泣きて、

ゆきまなき吉野の山をたづねても心のかよふ跡絶えめやは

といひ慰む。

この雪すこし解けて渡り給へり。例は待ち聞ゆるに、さならむと思ふ事・により、胸うちつぶれて、人やりならず覺ゆ。わが心にこそあらめ、いなび聞えむを強ひてやは、あぢきな、と覺ゆれど、かろ〴〵しきやうなりと、せめて思ひ返す。いとうつくしげにて前に居給へ・・るを見給ふに、おろかには思ひ難かりける人の宿世かなとおも・ほす。この春よりおほす御髮、尼そぎの程にて、ゆら〳〵とめでたく、つらつきまみの・かをれる程など、いへば更なり。よその・・物に思ひやらむ程の心の闇推し量

何か どう致しまして。身分卑しい人の娘だと輕蔑して下さらないなら結構でございます。

すゑ遠きの歌 行末久しい幼少な姫君に別れていつその御成人の姿を見る事が出來よう。姫君を小松に譬へたのはその將來を祝福したもの。「引き」は小松の縁語。

生ひそめしの歌 深い因縁あつて生れた姫君だから貴女と姫君とは末長く同棲させませう。花鳥餘情に「武隈の松は二本なれば明石と紫上の二人に喩たるべし、さきの巻にあさき根ざしゆゑいかゞと尼君のいひしをなぐさめて根もふかければと讀給へり」とある。

のどかにを 氣長に構へておいでなさい。

さる事とは いづれ又同棲が出來るだらうと胸をおさへてゐるもの。

御劔 守刀。

天兒 ねりの絹で人形を縫ひ、綿を入れたもの。仙源抄に「三歳まで用之。諸事凶事これにおほする也」とある。

とまりつる人 明石上の事。

り給ふに、いと心苦しければ、・・・打返し宣ひあかす。「何か。只・かく口惜しき身の程ならずだにもてなし・給はば」と聞ゆるものから、念じあへず打泣くけはひ、あはれなり。姫君は何心もなくて、御車に乘らむ事を急ぎ給ふ。寄せたる所に、母君自ら抱き・出で給へり。片言の聲は、いとうつくしうて、袖をとらへて、乘り給へと引くもいみじう覺えて、

すゑ遠き二葉の松に引きわかれいつか木高き陰を見るべき

えもいひやらずいみじう泣けば、さりや、あな苦し、と思して、

「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べむ

・・のどかにを」と慰め給ふ・。さる事とは思ひしづむれど、えなむ堪へざりける。乳母、少將とてあてやかなる人ばかり、御劔天兒やうの物取り・て乘る。人だまひによろしき若人わらはなど乘せて御送りに參らす。道すがら、とまりつる人の心苦しさを・・・・・、いかに罪や得らむとおぼす。

暗うおはしつきて 暗くなつてから二條院に著いて。
はしたなくてや きまりわるい思ひをしながら奉公する事かと案じたのであるが、君は姫君の爲に西向きの部屋を特に設備されて。
やう／＼ 姫君があたりを見廻して、母君の居られぬのを探して、次第に泣きだされるので。
山里のつれ／＼ 大井の山里は姫君が居られないので、ましてどんなに寂しからうと。
いかにぞや人の思ふべき 他人の非難するやうな缺點のないかうした子供が紫上の腹に生れないでと源氏は殘念に思ふ。

暗う（く）おはし（まし）・・つきて、御車寄す（せた）・るより、花やかにけはひ異なるを、田舎びたる心地どもは、・はしたなくてやまじらはむと思ひつれど、西面を殊にしつらはせ給ひて、ちひさき御調度ども、美しげに整へさせ給へり。乳母の局には、西の渡殿の、北に當れるをせさせ給へり。若君は道にて（の君）寝給ひにけり。抱きおろされて（起き給へれど）・・・・・、泣きなどはし給はず。こなたにて御くだもの參りなどし給へど、やう／＼見めぐら（か）・して、母君の見えぬをもとめて、らうたげにうちひそみ給へば、乳母召しいでて、慰めまぎらはし聞え給ふ。山里のつれ／＼、ましていかにとおぼしやるはいとほしけれど、あけくれ思すさまにかしづきつつ見給ふは、物あひたる心地し給ふらむ（にも）。いかにぞや人の思ふべき瑕なきことは、このわたりに出でおはせで、と口惜しくおぼさる。暫しは人々もとめて泣きなどし給ひしかど、大方心やすくをかしき心ざまなれば、（物し給ひて）・うへにいとよくつきむつび聞え

又やんごとなき 別に又身分のある女で乳の多く出るのを乳母の中に加へてお抱へになつた。
御しつらひ 袴着の日の設備。
參り給へる 祝賀の當日參會のお客達は、平素と一寸も變りがないので、あながち目立ちもしなかつた。
襷引きゆひ 宇津保藏開上に「給の袴襷がけにて」又同國讓下に「襷がけの御袴」と見え、枕草子にも「うつくしきもの」の條に「襷がけにゆひたる腰」とある。這ひあるく兒の袴の落ちぬやうに、紐を背で十文字になるやうに合せて結んだものやうである。源語秘訣や貞丈の説などは信ぜられない。
身の怠りを 姫君を手放した我身の過失を。
さこそいひしか 姫君を養女にやる事を勸めたものの。
何事をか あんなに何もかも行屆いた處へなまなかに何を贈つてあげられよう。
御方の人々に 姫君付の侍女達に。
待遠ならむも 明石上に待遠しがらせるのも、案の如く姫君を渡してからは足遠くなつたと思はらのが氣の毒故。

給へれば、いみじううつくしきもの得たりとおぼしけり。他事（こと）なく抱きあつかひもてあそび聞え給ひて、乳母もおのづから近う仕うまつり馴れにけり（た）。又やんごとなき人の乳ある、添へてまゐり給ふ。

御袴着は、何ばかりわざとおぼし急ぐ事は・なけれど、（いと）・・氣色殊なり。御しつらひ、雛遊びの心地してをかしう見ゆ。（人々の）・・・（姿）・參り給へる（ふこ）客人（な）・ども、只明暮の（かはる）・・けぢめしなければ、あながち（くはしう）に目も立たざりき。ただ姫（若）君の襷引きゆひ給へる・（御腰）胸つきぞ、うつくしげさ添ひて見え給へる。大井には、盡きせず戀しきにも、身の怠りを（と）嘆き添へたり。さこそいひしか、尼君もいと泪もろなれど、かくもてなしかしづかれ給ふを聞くは（さすがに）・・・嬉しかりけり。何事をか・なか（は）／＼とぶらひ聞え給はむ。ただ御方の人々に、乳母よりはじめて、世になき（かさね）・・・色合を（と）・思ひ急ぎてぞ贈り聞え給ひける。待遠ならむも、いとど

思ふらむ事の　源氏は、明石上が悲しがつてゐるのが氣の毒故、絶えず消息を遣して慰めてゐられる。
うつくしき人に　可愛い姫君に免じて咎めだてはなさらなかつた。
年も返りぬ　源氏三十二、紫上二十四。明石上二十三。
七日の御よろこび　正月七日に年賀に來られたのである。
うはべは　内心には私の不滿もあらうが、朝廷に對する公の不平はないので、表面は滿足さうに。
對の御方　花散里。
近きしるしは　二條院の近所に住んで居るお蔭で。

されば よと思はむに、いとほしければ、年の内に忍びてわたり
給へり。いとど淋しきすまひに、あけくれのかしづきぐさをさ
へ・・離れ聞えて、思ふらむ事の心苦しければ、御文なども絶
間なく遣はす。女君も、今は殊にゑ・じ聞え給はず、うつくし
き人に罪許し聞え給へり。
・・年も返りぬ。うららかなる空に、思ふ事なき・・御有樣は
いとどめでたく、みがき改めたる御よそひ・・に、參りつどひ
給ふめる人の大人しきほどのは、七日の御よろこびなどし給ふ、
・・・・引きつれ給へり。若やかなるは、何ともなく心地よげ
に見えたり。つぎつぎの人も、・・・・心のうちには思ふ事も
やあらむ、うはべはほこりかに・・・・・・見ゆる頃ほひ
なりかし。ひんがしの院の對の御方も、有樣は好ましうあらま
ほしきさまに、さぶらふ人々わらはべの姿など、打解けず心づ
かひしつつ過ぐし給ふに、近きしるしは・こよなくて、のど・

こめきて　こせこせしないで。
かばかりの　花散里はこれだけの運命を持つた我身なのであらうと諦めて。
折節の　源氏からの時折の御心附なども紫上と格段の差をつけずに待遇なさつて。
同じごと　紫上方と同樣に。
べたう　花散里方の別當。別當は家司と同樣家政を司どる人。
櫻の御直衣　櫻は表白に裏赤花。又裏は紫とも二藍とも。
まかり申し　紫上に暇乞をされる樣子が。
ただならず　氣がかりに。

かなる・・御いとまの隙などには、ふと這ひわたりなどし給へ
ど、夜立ちとまりなどやうに、わざとは見え給はず。只御心ざ
まのおいらかにこめき・・て、かばかりの宿世なりける身にこ
そあらめと思ひなしつつ、ありがたきまでうしろやすくのどか
に物し給へば、・・・・・・・・・・・・
・・・折節の御心おきてなども、こなたの御有樣・・に劣
るけぢめこよなからずもてなし給うて、・あなづり聞ゆべうは
あらねば、同じごと人も參り仕うまつりて、べたうども・・も
事怠らず、なかなか亂れたる所なく、めやすき御有樣なり。
山里のつれづれをも絶えずおぼしやれば、おほやけ私物さわが
しき程過ぐして、渡り給ふとて、常より殊にうちけさうじ給
ひて、櫻の御直衣にえならぬ御ぞ引きかさねて、・・・・
・たきしめさうぞき給ひて、まかり申し給ふさま・、隈なき
夕日に、いとどしく淸らに見え給ふを、女君、ただならず見奉

り送り聞え給ふ。姫君はいはけなく、御指貫の裾にかゝりて慕ひ聞え給ふほどに、外にも出で給ひぬべければ、立ちとまりていとあはれとおぼしたり。こしらへおきて、「明日歸りこむ」と口ずさびて出で給ふに、渡殿の口に待ちかけて、中將の君して聞え給ふ。

舟とむる遠方人のなくばこそ明日歸りこむせなと待ち見め

いたう馴れて聞ゆれば、いと匂ひやかにほほゑみて、

行きて見て明日もさねこむなか〳〵に遠方人は心おくとも

何事とも聞きわかでざれありき給ふ人を、うへはうつくしと見給へば、遠方人のめざましきも、こよなくおぼし許されにたり。いかに思ひおこすらむと、我にていみじう戀しかりぬべきさまをと、うちまもりつゝ、懷に入れて、うつくしげなる御乳をくゝめ給ひつゝ、たはぶれ居給へる御さま見どころ多かり。御前なる人々は、「などか。同じくは。いでや」など語ら

外にも　簾の外。

明日歸りこむ　催馬樂櫻人「櫻人、その舟とゞめ島つ田を、十町作れる、見て歸りこむや、そよや、あす歸りこむや、そよや。二段、ことをこそ明日ともいはめ、遠方に、妻さるせなは、明日もさね來じや、そをよ、さあすもさね來じや、そよや」

舟とむるの歌　源氏を引止める明石上があちらに居なければ、わが夫は明日歸り來る事と待つても居ませう。櫻人の言葉で歌つてある。

行きて見ての歌　とにかく一寸行つて見て明日に必ず歸つて來ませう。なまじひ訪ねながら歸りをいそぐ爲に、あちらの人が氣をわるくしようとも。櫻人の言葉でよんだ歌。

遠方人のめざましさも　明石上に對する不快な念も我慢が出來た。

いかに思ひおこすらむ　明石上は此姫君をどんなに氣遣つて居る事だらう、自分が明石上の位置であつたら、戀しくてたまらぬ程のかはいらしい姿であるのにと。

などか　紫上には何で子がないのでせう、同じ事なら實子であればよいのに。どうも世の中は思ふ儘にならぬものだ。

ひあへり。

かしこには、いとのどやかに心ばせあるけはひに住みなして、家のありさまも、やう離れて珍らしきに、みづからのけはひなどは、見るたびごとに、やんごとなき人々に劣るけぢめこよなからず、かたち用意あらまほしうねびまさりゆく。只世の常の覺えにかき紛れたらば、さるたぐひなくやはと思ふべきを、世に似ぬひがものなる親の聞えなどこそ苦しけれ、人の程などは、さてもあるべきものを、などおぼす。はつかに飽かぬ程にのみあればにや、心のどかならず立ち歸り給ふも苦しくて、「夢のわたりの浮橋か」とのみ打歎かれて、箏の琴のあるを引寄せて、かの明石にて小夜更けたりしねも、例のおぼし出でらるれば、琵琶をわりなく責め給へば、すこしかき合せたる、いかで斯うのみ引きすぐしけむとおぼさる。若君の御事など、こまやかに

心ばせあるけはひ　奥ゆかしい樣子に。

只世の常の覺えに　明石上が十人並みだといふ事で、別に目立たない女であるならば、さういふ明石上のやうな人間は世間に類がないではないと諦めても居ようが。この句は「人の程などは」に續く。

世に似ぬひがもの　この一句は「人の程などは」の句を修飾する獨立句である。「父入道が非常識だといふ評判はつらいけれども明石上の人がらなどは」と續く。

人の程などは　明石上の人柄はあれで十分なのだに。

はつかに飽かぬ程に　源氏はいつも明石上方に來ても物足りない心持でばかり歸らるる爲か。「打歎かれて」につゞく。

夢のわたりの　奥入「世の中は夢のわたりの浮橋か打渡りつゝ物をこそ思へ」來てはをるが物思ひは止まないの意。

かの明石にて　源氏の歸京も明後日といふ晩の事。九四頁以下參照。

いかで斯うのみ　源氏の心。どうしてこんなに人に勝れた技術を持つてゐたのだらう、別に師をとつたとも聞いてゐないのにの義。

強飯　粥に對するもので今の普通の御飯。

近き御寺桂殿などに　源氏は嵯峨野のお寺や桂殿などに來るやうな顏して大井に來られて。

いとけざやかに　さう際立つて無愛相な並々の待遇はなさらないのは。

おぼろげに　並々ならず高貴な婦人達の處でさへ、源氏はこれ程まで打解けらるる事もなく、け高い態度をくづされないといふ事を前以て聞いて居つたから。

ふりはへ給へるこそ　わざわざおいで下さる方が自分にはその方が氣がいい。

明石よりも　明石に居る入道の所からも。

語り給ひ(聞え給ふ)つつおはす。ここは斯かる所(大井は淋しい所だが)なれど、かやうに立ち(源氏が)とまり給ふ折々あれば、はかなき(一寸した)(御)くだもの(菓子)、強飯(こはいひ)(など)ばかりは聞召す時もあり。近き御寺、桂殿などにおはしまし紛らはしつつ、いとまほには亂れ給はね(すつかり打解ける事はなさらないが)ど、又いとけざやかにはしたなく(無愛相に)、おしなべてのさまにはもてなし給はぬ(い)などこそは、いと覺え殊には見ゆめれ(寵愛が特に深いものと思はれる)。女(明石上)も斯かる御心(源氏の)の程を見知り聞えて、過ぎたりとおぼすばかりの事はし出でず(過分だと源氏が思ふやうな事は明石上はしない)。又いたく卑下(う)せずなどして、御心おきて(源氏の)にもてたがふ事なく(こ)、いと目やすくぞ(なん)ありける。おぼろげにやんごとなき所にてだに、かばかりも打解け給ふ事なくけだか(くよそほし)き御もてなしを聞きおきたれば、近き程にまじらひては(二條院の東院に引移つては)、なかなかいと目馴れて、人あなづられなる事どももぞあらまし、たまさかにて(も)、かやうにふりはへ給へるこそたけき心地(も)すれ、と思ふべし。明石に(より)も、さこそいひしか(あんなに氣強くはいつたものの)、この(源氏の)御心おきて有様

人は通はしつつ　入道から京に使を遣して。

胸つぶるる　姫君を紫上に渡したと聞いて。

太政大臣　葵上の父。今年六十六歲。

暫しこもり　賢木卷に春の初の頃、致仕の表を奉つて籠居して居つた事。卷一、四三七頁。

御門　冷泉院。御年十四。

誰に譲りてかは　誰にこの御後見を讓つたら佛道專念の素懷が遂げられようぞとお思ひになると。

御子ども　太政大臣の子息や孫達より以上に源氏が懇に佛事を營まれた。

をゆかしがり(知りたがつて)て、覺束なからず(ぬ程に)人は通はし(行きかふ)つつ、胸つぶる(入道の心に)る事もあり、又おもだたしく(明石上が寵愛を受けてゐる事を聞いて)嬉しと思ふことも多くなむありける。

その頃太政大臣(おほきおとど)亡せ給ひぬ。世のおもしとおはしつる(一世の重鎭としておいでになつた方故)人なれば、おほやけ(冷泉院)にもおぼし歎く。暫しこもり給へりし程をだに(辭表を出して籠居して居つた時さへ)、天の下の騷ぎなりしかば、まして悲しと思ふ人多かり(なん)。源氏のおとども、いと口惜しう(く)、よろづの事(政事を)押し讓り聞えてこそ(御)いとま(のひま)もありつるを、心細く(も)事繁くもおぼされて、歎きおはす。御門は、(大人々しく)御年(の程)よりはこよなう大人々しうねびさせ(まさり)給ひて、世のまつりごとも、うしろめたく思ひ(見奉)聞え給ふべきにはあらねども、又取り立てて御後見し(聞え)給ふべき人もなきを、誰に讓りてかは靜なる御本意もかなはむと思すに、いと飽かず口惜し。のちの御わざ(葬後の供養)などにも、御子どもうま(孫)ごに過ぎてなむこまやかにとぶらひあつかひ聞え給ひける。

大方世の中　世間一帶に疫病が流行し。

雲のたたずまひ　雲の形。

道々のかんがへぶみ　天文や陰陽の道々の博士の勘文。

入道后の宮　藤壺。

いといはけなくて　桐壺院の崩御は賢木卷の冬で、その時冷泉院は御年五。

おどろ〱しき　さう大しい氣分惡くもありませんでしたので、豫て死期を知り顔な風をするのも、人がいやに仰々しく思ひませうかと遠慮致しまして。

その年、大方世の中さわがしくて、おほやけざまに物のさとし繁くのどかならで、天つ空にも、例にたがへる月日星の光見え、雲のたたずまひありとのみ世の人おどろく事多くて、道々のかんがへぶみども奉れるにも、怪しう世になべてならぬ事どもまじりたり。内のおとどのみなむ、御心のうちに煩はしくおぼし知らるる事ありける。入道后の宮、春のはじめより惱みわたらせ給ひて、三月にはいと重くならせ給ひぬれば、行幸などあり。院に別れ奉らせ給ひしほどは、いといはけなくて、物深くもおぼされざりしを、いみじうおぼし歎きたる御氣色なれば、宮もいと悲しくおぼしめさる。「今年は必ずのがるまじき年と思う給へつれど、おどろ〱しき心地にも侍らざりつれば、命の限り知りがほに侍らむも、人やうたて事々しう思はむと憚りて、功德のことなども、わざと例よりも取分きてしも侍らずなりにける。參りて心のどかに昔の御物語も、

うつしざまなる折　氣分のはつきりした折が少くて、殘念に氣しよくわるく思ひながら暮して參りました。

惜しく悲しと　冷泉院御心に。

よろづの事　加持祈禱など。

月頃は常の事　今迄は普通の御病氣とばかり油斷してゐて、十分の手當もしなかつたのだが。

高き宿世　自分は先帝の后腹の四宮として生れ、國母女院としてて榮えるなど無双の幸福者だが、又物足りなく思ふ事も人一倍の身の上だ。

斯かる事の心　源氏の御子といふ秘密の事情。

など思ひ給へながら、うつしざまなる折すくなく侍りて、口惜しういぶせくて過ぎ侍りぬること」と、いと弱げに聞え給ふ。三十七にぞおはしましける。されどいと若くさかりにおはしますさまを、惜しく悲しと見奉らせ給ふ。「つつしませ給ふべき御年なるに、晴れ〲しからで月頃過ぎさせ給ふ事をだに歎きわたり侍りつるに、御つつしみなどをも常よりも殊にせさせ給はざりける事」といみじう思召したり。只此頃ぞ、驚きて、よろづの事をせさせ給ふ。月頃は常の御惱みとのみうちたゆみたりつるを、源氏のおとども深くおぼしりたり。限りあれば、程なく還らせ給ふも、悲しきこと多かり。宮いと苦しうて、はか〲しう物も聞えさせ給はず。御心のうちに思しつづくるに、高き宿世、世の榮えも並ぶ人なく、心のうちに飽かず思ふことも、人にまさりける身とおぼし知らる。うへの、夢のなかにも斯かる事の心を知らせ給はぬを、さ

やんごとなき人の限り 太政大臣や藤壺女院など貴人ばかりが引續いておかくれになるのを。

年頃おぼし絶えたりつる 多年斷念して居つた思慕の情をさへもう一度打明けずにしまふのが殘念で。

御ありさまなども 御容體などを女房にお尋ねになると。

親しき限り 藤壺が親しく召使つてゐられる女房達だけが。

月頃なやませ 長い間御病氣の中を、御勤は一刻も懈怠なさらなかつた、その御無理が積つて。

院の御遺言に 桐壺院の御遺言通りに、主上の御後見をして下さる事については今迄感謝して居る事が澤山にございますが。

すがに心苦しう見奉らせ給ひて、これのみぞうしろめたくむすぼほれたる事におぼしおかるべき心地し給ひける。おとどは、おほやけがたざまにても、斯くやんごとなき人の限り打續き亡せ給ひなむことを、人知れずおぼし歎く。人知れぬあはれは限りなくて、御祈りなどおぼし寄らぬ事なし。年頃おぼし絶えたりつるすぢさへ、今一たび聞えずなりぬるがいみじく思さるれば、近き御几帳のもとに寄りて、御ありさまなどもさるべき人々に問ひ聞き給へば、親しき限りさぶらひて細かに聞ゆ。「月頃、なやませ給へる御心地に、御行ひを時の間もたゆませ給はずせさせ給ふ積の、いといたうくづほれさせ給へるに、此頃となりては、柑子などをだに觸れさせ給はずなりにたれば、頼みどころなくならせ給ひにたる事」と、歎く人々多かり。「院の御遺言にかなひて、うちの御後見仕うまつり給ふ事、年頃思ひ知り侍

何につけてかは 何のついでに、あなたに對して格別の好意を持つてゐることをお漏らししようかと、機會を待ちつつ暢氣に構へて居りましたが。

ほのぼの聞ゆるに 取次の女房に語る藤壺の聲が、几帳の外に居る源氏にかすかに聞えるのである。

大方の世につけても 自分に特別關係のない人として見ても。世間一般の立場から見ても。

世の中心あわただしく 又公務が殖えて氣ぜはしく感じましたが。**又斯くおはしませば** 又藤壺が重體でいらつしやるから。

ること多かれど、何につけてかはその心寄せ殊なるさまをも漏らし聞えむとのみのどかに思ひ侍りけるを、今なむあはれに口惜しく」と、ほのかに宣はするもほのぼの聞ゆるに、御いらへも聞えやり給はず、泣き給ふさまいといみじ。など斯うしも心弱きさまにと、人目をおぼしかへせど、古へよりの御有樣を、大方の世につけても、あたらしく惜しき人の御さまを、心にかなふわざならねば、かけとどめ聞えむ方なく、いふかひなくおぼさるること限りなし。「はかばかしからぬ身ながらも、昔より、御後見仕うまつるべきことを、心の至るかぎりは、おろかならず思ひ給ふるに、おほきおとどのかくれ給ひぬるをだに、世の中心あわただしく思ひ給へらるるに、又斯くおはしませば、よろづに心亂れ侍りて、世にはべらむ事も殘りなき心地なむし侍る」と聞え給ふほどに、ともし火などの消え入るやうにて果て給ひぬれば、いふかひなく悲しき事をおぼし

御心ばへなどの　宮は御性質など、世の人に對して一様に愛情深くいらせられて、人は權門を笠に着て下々の迷惑となる振舞などもありがちであるが、少しもそのやうな間違ひはなく、人が奉仕しようとする事でも、世間の迷惑となる事は御制止になる。

がうけ　河海抄に「豪家。有千人德謂豪。又高家。」史記註、揭冠子曰、「德萬人者謂之俊、德千人者謂之豪、德百人者謂之英也」とある。權門だてすること。

只もとよりの　所有の寶物や頂戴する筈の年官年爵及び封戸の中で、使つても差支ない分だけを使つて、本當に有りがたい佛事のありたけをしておかれたから。

なべて一つ色に　皆一様に喪服をつけて。

今年ばかりは　古今哀傷「深草の野邊の櫻し心あらば今年ばかりは墨染に咲け」

歎く。かしこき御身の程と聞ゆるなかにも、御心ばへなどの、世のためにもあまねくあはれにおはしまして、がうけに事寄せて、人のうれへとある事などもおのづからうちまじるを、いささかもさやうなる事の亂れなく、人の仕うまつる事をも、世の苦しびとあるべき事をばとどめ給ふ。功德のかたとても、勸むるにより給ひていかめしう珍らしうし給ふ人など、昔のさかしき世にも皆ありけるを、これはさやうなる事なく、只もとよりの寶物、得給ふべきつかさかうぶり、御封のものの、さるべき限りして、まことに心深き事どもの限りをしおかせ給へれば、何と分くまじき山伏などまで、惜しみ聞ゆ。をさめ奉るにも、世の中響きて悲しと思はぬ人なし。殿上人など、なべて一つ色に黑み渡りて、物の榮えなき春の暮なり。二條の院のお前の櫻を御覽じても、花の宴の折などおぼし出づ。「今年ばかりは」と獨りごち給ひて、人の見咎めつべ

入日さすの歌　夕陽のさしてゐる峯に棚引く薄雲のうす黑いのは悲しんでゐる私の喪服の色に似せてゐるのであらうか。

おほやけにも　主上も厚く御信仰になつて。

いかめしきお願ども　重い勅願を數多起して。

宮の御事によりて　藤壺の御病氣平癒の祈禱の爲に。

ければ、御念誦堂に籠り居給ひて、日一日泣きくらし給ふ。夕日花やかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何事も御目とどまらぬ頃なれど、いと物あはれにおぼさる。

　入日さす峯にたなびく薄雲はものおもふ袖に色やまがへる

人聞かぬ所なれば、かひなし。

御わざなども過ぎて、事どもしづまりて、御門、物心細くおぼしたり。この入道の宮の御母后の御世より傳はりて、御祈りの師にてさぶらひける僧都、故宮にもいとやんごとなく親しきものにおぼしたりしを、おほやけにもおもき御覺えにて、いかめしき御願ども多く立てて、世にかしこきひじりなりける。年七十ばかりにて、今は終りの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、うちより召しありて、つねにさぶらはせ給ふ。此頃は猶もとの

參りさぶらはるべきよし　御持僧として宮中に伺候すべき由を源氏もお勸めになるので。

夜居　終夜加持祈禱して護身する事で、その僧を夜居僧といひ清涼殿の二間に伺候する。

ふるき御志を添へて　藤壺の母后以來の御法志をも合せ考へまして。

知ろしめされぬに　主上が御存じないのに、罪障が重くて、天の照覽も怖ろしく思つてをります事を心の中で泣いてゐるばかりで、そのまゝ告白することも出來ないで死にましたらば何の役に立ちませう。それでは佛も私を腹黑くまで思召す事でございませう。「罪重くて」は「命終り侍りなば」にかゝる。罪が重い爲に告白しようとしてもその機を得ないで命が終るといふ意。

忍び殘されたる　私に隱していひ殘された事のあるのが恨めしい。

如く參りさぶらはるべきよしおとども勸め(聞え給)宣へば、僧都「今は(宵)夜居など•(も)いと堪へがたう覺え••(くなりにて)侍れど(るを)、仰せごとの畏こきによ(そ)り、(こ)ふるき(か)御志を添へて(により)」とてさぶらふに、靜なる曉に•、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬる程(後)に、古代にうちしはぶきつつ、世の中の事ども奏し(する)給ふ(こ)ついでに、僧都「いと•(も)奏しがたくて、•却りては罪にもやまかり當らむと思ひ•••給へ憚る事多(かた)かれ•••(さぶらこ)ど、•(年頃)•知ろしめされ•ぬに、罪重くて、天(てむげん)のまな(の)こ怖ろしく思う給へらるる事を、心にむせび侍りつつ命終り侍りなば、何の益(やく)かは•(ん)べらむ。佛も心ぎたなしとや思召さ(見給は)む」とばかり奏しさして、え打出でぬ事あり。••••••(いといたく思ひ煩ふ)•(を)うへ、何事ならむ、この世に恨み殘るべく思ふことやあらむ、法師はひじりといへども、•••(怪しく)あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあン••なるものを、と•••••(いとほしく)おぼして、冷泉「いはけなかりし時(程)より、隔て思ふことなきを、そこには、かく忍び(心に)•こ

更に佛のいさめまもり給ふ　佛が秘するやうに禁じておかれた眞言の秘法をさへ決して隱す事なく御傳授申上げたのでございます。

すべて却りて　却つて宜しからぬ結果となつて世間に漏れ傳はる事でございませう。

たとひ憂へ侍りとも　これを申上げた爲に災難が降りかかつて參りましても。

故宮　藤壺。

法師の心に　拙僧のやうな坊主の心には何の意味か分りません、僧に緣のない男女の間の事であるから。

御祈りども　玉體安穩の御祈禱。

御位につき　冷泉院の御卽位まで引續き御祈禱に奉仕して參りました。

•(め)殘された•(りけ)•る事ありけるをなむつらく思ひぬる」と宣はすれば、僧都「あなかしこ。更に佛のいさめまもり(まもりいさめ)給ふ眞言(のり)の深き道をだに、隱しとどむる事なく、廣め仕(つか)うまつり侍り。まして心(い)に隱あること何事に(につけて)•か侍らむ。これはきしかた行く先の大事と侍る(あ)事を、過ぎおはしましにし院、后の宮、只今世をまつりごち給ふおとどの御ため、すべて却りてよ•(ろし)•からぬ事にや漏り出で侍らむ。かかる老法師の身には、•••••(今は限りの道には)たとひ憂へ侍りとも、何の悔い•(に)か侍らむ(るべき)•。佛天の告げあるによりて•••(斯くも)奏し侍るなり。わが君孕まれおはしましたりし時より、故宮の(は)深くおぼし歎くことありて、御祈り仕(つか)うまつらせ給ふゆゑ(やう)なむ侍り(あ)し。くはしく•(は)法師の心にえ悟り侍らず。事のたがひ目ありて、おとど•(の)横さまの罪に當り給ひし時、いよいよおぢ思召して、••••(をこ)かさねて御祈りども承り(れる由を知りてなん)侍りしを、••••、おとども聞召して(の)••••なむ又(殊)•更に事•(を)加へ仰せられて、御位につ

その承りしやう 私が御祈禱を仰せつかった仔細は。

煩はしう思ひて 當惑して。

又この事を 御身の外にこの事を知つて他に漏らし傳へるやうな人はあるか。

いときなく 主上が御幼少で御分別もないお年頃ならばとにかく。

きおはしましまで、仕うまつる事ども侍りし、その承りしやう」とて、くはしく奏するを聞こしめすに、あさましう珍らかにて、怖ろしうも悲しうも、さま〳〵に御心亂れけり。とばかり御いらへもなければ、僧都、進み奏しつるをびんなく思召すにやと、煩はしう思ひて、やをらかしこまりてまかづるを、召しとどめて、「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりける事を、今まで忍びこめられたりけるをなむ却りてうしろめたき心なりけると思ひぬる。又この事を知りて漏らし傳ふるたぐひやあらむ」と宣はす。「更になにがしと王命婦とよりほかの人、この事の氣色見たる侍らず。さるによりなむいと怖ろしう侍る。天變しきりにさとし、世の中しづかならぬは、このけなり。いときなく物の心知召すまじかりつるほどこそ侍りつれ、やう〳〵御よはひ足りおはしまして、何事もわきまへさせ給ふ

思ひ給へ消ちてし 一度は口外すまいと決心致しました事を、又あらためて奏上致すのでございます。

かくなむと 主上御不快の由を源氏がお聞きになつて。

式部卿のみこ 桃園式部卿宮。源氏の御弟で權齋院の父宮。

里 二條院。

べき時にいたりて、とがをも示すなり。よろづの事、親の御世より始まるにこそ侍るなれ。何の罪とも知召さぬが怖ろしきにより、思ひ給へ消ちてしことを、更に心よりいだし侍りぬること」と、泣く〳〵聞ゆるほどに、明け果てぬればまかでぬ。うへは、夢のやうに、いみじき事を聞召して、いろ〳〵におぼし亂れさせ給ふ。故院の御ためもうしろめたく、おとどの斯くただ人にて世に仕へ給ふも、あはれに忝かりける事、かたがたおぼしなやみて、日闌くるまで出でさせ給はねば、かくなむと聞き給ひて、おとども驚きて參り給へるを、御覽ずるにつけても、いと忍びがたく思召されて、御涙のこぼれさせ給ひぬるを、大方故宮の御ことをひる世なく思召したる頃なればなめりと見奉り給ふ。その日式部卿のみこ亡せ給ひぬる由奏するに、いよ〳〵世の中の騷がしきことを嘆きおぼしたり。斯かる頃なれば、おとどは里にもえまかで給はで、つとさぶらひ

世は盡きぬるにや　私の壽命も盡きてしまふのかしら。
故宮のおぼさむ所に　故母宮の思召を憚つてこそ帝位を讓る事も遠慮して居つたのですが、今は氣樂に暮したいもので。
世の中　湖月本は「世間」と書いて「よのなか」と傍訓を施してある。
唐土にも　河海「堯湯負洪水大旱之責、高宗成王有鴝雉迅風之變、雖有小異不失大德（後漢皇后記上）及成王用事人或讒周公、周公奔楚（史記）貞觀政要曰、昔黃帝與蚩尤七十餘戰、其亂甚矣、既勝之後、便致太平、九黎亂德、顓項征之、既尅之後、不失其治、桀爲暴虐、而湯放之、在湯之代、即致太平、紂爲無道、武王伐之、成王之代、亦致太平、本朝延喜聖代菅家左遷事以下歟、和漢先蹤不可勝計」
ましてことわり　まして當然死ぬべき高齡の人達が、死期が來て死ぬのをお歎き遊ばす事はございませぬ。
年頃御鏡にも　主上も今迄に御鏡を御覽になつても氣附いて居られた事實だが。

給ふ。しめやかなる御物語のついでに、「世は盡きぬるにやあらむ、物心細く例ならぬ心地のみ・・なむするを、天の下も斯くのどかならぬに、よろづ・あわただしくなむ。故宮のおぼさむ所によりてこそ世の中のことも思ひ憚りつれ、今は心やすきさまにても・過ぐさまほしくなむ」・・と語らひ聞え給ふ・。「いとあるまじき御事なり。世の靜かならぬことは、必ず政事のなほくゆがめる・・にもより侍らず。さかしき世にしもなむよからぬ事どもも侍りける。ひじりの御門の世にも、横さまの亂れ出でくる事、唐土にも侍りける・。わが國にもさなむ侍る・・・。ましてことわりの齡どもの、時至りぬるをおぼし歎くべき事にも侍らず」など、・・すべて多くの事どもを・聞え給ふ。片端まねぶもいと傍痛しや。常よりも黑き御よそひにやつし給へる御かたち・、たがふ所なし。うへも、年頃御鏡にもおぼし寄・る事なれど、聞召しし事ののちは、又こま・かに見奉り給ひつつ、

さすがにはしたなくも　何といつても源氏がきまりわるくお思ひになりさうな事なので。
いと斯くさだ〱と　からまで確かにこの秘密を聞召しておいでにならうとは氣附きなさらなかつた。
しか忍び給ひけむ事　故母宮が秘して居られた事を聞き知つてしまつたと王命婦にも思はれたくない。
唐土にはあらはれても　河海抄「秦始皇は莊襄王の子として位に即と雖も、實は始皇の母太后嫪毒、呂不韋といふ臣下に密通して所生云々（見史記傳）」
日本には　日本ではさういふ例をかつて御發見なさる所がない。

殊にいとどあはれに思召さるれば、いかでこの事をかすめ聞えばやとおぼせど・、さすがにはしたなくもおぼし・・ぬべき事なれば、若き御心地に・・つつましく・、ふともえ打出で聞え給はぬほどには、只大方の事どもを、常より殊になつかしう聞えさせ給ひ・、うちかしこまり給へるさまにて、いと御氣色殊なるを、かしこき人の御目には、怪しと見奉り給へど、いと斯くさだ〱と聞召したらむとは・おぼさざりけり。うへは、王命婦に委しき事・問はまほしう思召せど、今更にしか忍び給ひけむ事・知りにけりとかの人にも思はれじ、只おとどにいかでほのめかし問ひ・・聞えて、さき〱・斯かる事の例はありけりやと聞かむとぞ・おぼせど、更についでも・なければ、いよ〱御學問をせさせ給ひつつ、さま〱にふみどもを御覽ずるに・、唐土には、あらはれても忍びても、亂りがはしきこといと多かりけり。日本には、更に御覽じ得る所なし・・・。

一世の源氏 皇族で源姓を賜はつて臣籍に下つたその第一世の人。

更にみこにもなり 是忠親王、是貞親王、兼明親王、盛明親王等がその例である。

位にもつき給へるも 光仁天皇桓武天皇、光孝天皇、宇多天皇など。

秋の司召 京官任官式。

御門おぼし寄するすぢの事 御門が考へてゐられる筋、即ち源氏に帝位を讓らうとの思召。

故院の御志 故院の御心持も、數ある皇子のうちに、わけて私を御寵愛遊ばしたが。

今すこしの も少し年を取りましたら、引籠つて心靜かに佛道を勸めたいと思つて居ります。

たとひあらむにても、かやうに忍びたらむ事をば、いかでか・・・傳へ知るやうのあらむとする。一世の源氏、また納言、大臣になりて後に、・更にみこにもなり、位にもつき給へるも、あまたの例ありけり、人がらのかしこきにことよせて、さもや讓り聞え・ましなど、よろづにぞ・おぼしける。

秋の司召に、太政大臣・・になり給ふべきこと、うち〳〵に・定め申し給ふついでになむ、御門おぼし寄するすぢの事・・漏らし聞え給ひけるを、・おとどいとまばゆく・・・・怖ろしうおぼし・・て、更にあるまじき由を申し返し給ふ・。「故院の御志、あまたの御子たちの御なかに、取りわきて思召しながら、位を讓らせ給はむことを思召し寄らずなりにけり。何か、その御心・改めて、及ばぬきはにはのぼり侍らむ。只もとの御おきてのままに、おほやけに仕うまつりて、今すこしの齡かさなり侍りなば、のどかなる行ひに籠り侍りなむと思ひ給ふる」と、

暫しと もう暫く元の儘にと御斟酌なさる仔細があつて只位階だけが昇進して。

牛車許されて 親王や攝關などで牛車の宣旨を賜はれば、建禮門まで牛車の儘で出入する事が出來る。

みこになり給ふべき 皇子も親王宣下があつて親王となられる。

世の中の御後見 今は御門の後見すべき人がない。

權中納言 葵上の兄、昔の頭中將。

今一きは 權中納言がもう一階昇進した曉に一切の政事を讓つてしまはう。

故宮の御ためにも 主上がこの秘密を御存じとすれば藤壺の御爲にも氣の毒であり、又主上が斯く煩悶しておいでのさまを御覽になるのも畏多いので。

命婦は 王命婦は御匣殿が交迭した跡に引移つて、そこに局を戴いて主上に奉仕して居つた。

案内し給へど 尋ねて見られたが。

常の御言の葉に變らず奏し給へば、いと口惜しうなむおぼし・・ける。太政大臣になり給ふべき定めあれど、暫しとおぼす所ありて、ただ御位添ひて、牛車・許されて參りまかでし給ふを、御門・飽かず忝きものに思ひ聞え給ひて、なほみこになり給ふべき由を・・・・おぼし宣はすれど、世の中の御後見し・・・・給ふべき人なし・・、權中納言、大納言になり・・て右大將かけ給へるを、今一きはあがりなむに何事も讓りてむ、さてのちに、・ともかくも靜かなるさまに、とぞおぼしける。なほおぼしめぐらすに、故宮の御ためにもいとほしう、又うへの斯くおぼしなやめるを・・・・見奉り給ふ・・・も忝きに、たれとどたいめんし給ひて、この事を、もし物のついでに・・、御匣殿のかはりたる所に移りて、曹司賜はりて參りた・り。命婦・・は斯かる事を漏らし奏しけむと、怪しうおぼさる・。命婦・・はおとどたいめんし給ひて、「この事を、もし物のついでに・・露ばかりにても漏らし奏し給ふ事やありし・」と、案内し給へ

かけても　藤壺は主上が一寸でもこの秘密を聞召す事を大變な事と思召して、又一つには、このを御存じないといふのは、源氏に對して親子の禮を失する佛罰に當る事もやと、主上の御爲を心配しておいでになりました。

一方ならず　あれやこれやと故宮の用心深かつた事を源氏は限なく追慕せられる。

おぼしもしるき　源氏が豫想した通りの主上のよいお世話役でした。澪標卷の末に秋好を入內させる事について藤壺と源氏と相談せさるる所に「すこし大人びて添ひさぶらはむ御後見は、必ずあるべき事なりけり」とあつた。一四五頁。

今はむげの親ざまに　源氏は今は全く親といふ態度で梅壺を世話される。

こまやかなる　色の濃い。

世の中の騷がしき　世の中の平穩ならぬ事などを口實になさつて、實は藤壺の爲に其儘引續いての精進であるから。

ど、（命婦）「更に、かけても聞召さむことを、いみじき事に思召して、かつは罪得る事に(も)やと、うへの御ため(の事)を(も)、なほ思召し歎きたりし」(な)と聞ゆるにも、一方ならず心深くおはせし(おほむ)御有様など(を)、盡きせず戀ひ聞えさせ給ふ。

（梅壺卽ち秋好）齋宮の女御は、おぼしもしるき御後見にて、（主上の御寵愛が厚い）やんごとなき御覺えなり。御用意有樣なども、思ふさまにあらまほしう(く)見え給へれば、（主上が梅壺を）忝きものにもてかしづき聞え給へり。秋の頃二條の院に（梅壺が里下りされた）まかで給へり。寢殿の御しつらひ、いとど輝くばかりし給ひ(なし)て(給へり)、今はむげの親ざまにもてなしてあつかひ聞え給ふ(へり)。

秋の雨いと靜かに降りて、お前の前栽の(ともの花)いろいろ(に)亂れたる露のしげさに、（源氏は）古への事どもかきつづけおぼし出でられて、（源氏が）御袖も濡れつつ女御の御方に渡り給へり。（源氏のさま）こまやかなる鈍色(にびいろ)の御直衣姿にて、世の中の騷がしきなどことづけ給ひて、やがて御さうじん(み)なれば、數珠(ずず)引きかくして、御さまよくもてなし給

御几帳ばかりを　女御は御几帳だけを隔てて取次なしに直接源氏にお話申される。

野の宮に　賢木卷の初にある。御息所が秋好と共に伊勢に下向の折、九月七日頃源氏が野宮で御息所に對面した事。卷一、三八八頁。

宮も　齋宮卽ち梅壺も。

かくればとにや　拾遺戀二「わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしをるらむ」

見奉らぬこそ　源氏はまだ梅壺の顏を見ないのが殘念だと。

胸うちつぶるるぞうたてあるや　胸にこたへるのはいやなことだ。源氏が今も好色がましい心の動搖を感じるのを、記者が批評したものである。

過ぎにしかた　これまで別に氣苦勞なしに過ごさうとすれば過ごせた折にも。

さるまじき事どもの　無理な戀で苦勞した事の澤山あつた中で。

へる、盡きせずなまめかしき御有樣にて(こ)御簾の内に入り給ひぬ。御几帳ばかりを隔てて、(御)みづから聞え給ふ。（源）「前栽ども(の花)こそ殘りなく（花が咲き揃ひました）ひもとき侍りにけれ。いと物すさまじき（諒闇故）年なるを、（花は）心やりて時知りがほなる(し)も(こそ)あはれに(なれ)こそ」とて、（源氏のさま）柱に寄り居給へる(御)夕ばえ、いとめでたし。（故御息所の）昔の御事ども、かの野の宮に(忍びて)立ち煩ひし曙（あけぼの）などを聞え出で給ふ(て)。（源氏が）いと物あはれとおぼしたり。宮も、かくればとにや、すこし泣き給ふけはひ、いとらうたげにて、うちみじろき給ふ程も、あさましく(う)やはらかになまめきて(い)(こ)おはすべかんめる。（源氏の心）見奉らぬこそ口惜しけれ、と(思すに)胸(の)うちつぶるるぞうたてあるや。（源）「過ぎにしかた(いにしへこ)、殊に思ひなやむべき事もなくて侍りぬべかりし世の中にも、なほ心から（自ら求めて）すきずきしき（色めいた事で）事につけて物思ひの絶えず(ゆる折なくもあ)も侍りけるかな。さるまじき事どもの心苦しきがあまた侍りしなかに、遂に心も解けずむすぼほれてやみぬる(にし)事二つなむ侍(りけ)る。

まづ一つは、この過ぎ給ひにし御事よ。あさましうのみ思ひつめてやみ給ひにしが・、ながき世のうれはしきふしと思ひ給へられしを、かうまでも仕うまつり御覽ぜらるるをなむ慰めに思・う給へなせど、燃えし煙のむすぼほれ給ひけむは、なほいぶせうこそ思ひ給へらるれ」とて、今一つは宣ひさしつ。「中頃身の無・きに沈み・侍りし程、かた〴〵に思ひ給へしこと、片端づつかなひにたり。東の院に物する人の、そこはかとなくて心苦しう覺えわたり侍りしも、おだしう思ひなりにて侍り。心ばへの憎からぬなど、我も人も見給へあきらめて・・、いとこそさわやかなれ。かく立ちかへり、おほやけの御後見・仕うまつ・・る喜びなどは、さしも心に深くしまず・・、かやうなる・・すきがましき方は、しづめがたうのみ侍るを、おぼろげに思ひ・・忍びたる御後見とはおぼし知らせ給ふらむや。あはれ・・とだに宣はせずば、いかにかひなく侍らむ」と宣・・ふ。

あさましうのみ　御息所が私をあまりと思はれるほど恨みつめた儘で死なれた事が私に永劫の悲しみの種と思はれたのですが、あなたを斯う迄もお世話もし親しくもして頂くので、それを慰めと思つて居ますが。

燃えし煙の　源氏に對する恨が永久に解けずにある事。奥入「結ぼほれ燃えし煙もいかがせむ君だにかけよ長き契を」

なほいぶせう　御息所の後世の障りにならうかと氣がかりです。

身の無きに沈み　配所に沈淪して居つた時分。

おだしう　今は東院に引取つて不自由なく暮して居る故私も安心しました。

我も人も　私も外の人も花散里の性質を見拔いて。

さしも心に　さう深く嬉しいとも思はず、色めかしい事はまだやめ得ずに居りますが、あなたに對しても隨分胸の思を抑へてお世話をして居るのだとは御存じでせうか。

あはれと　同情しますとでも一言仰しやつて貰はなければ、どんなに張合のない事でせう。

むつかしうて、御いらへもなければ・、「さりや。あな心憂」とて、異事にいひまぎらはし給ひつ。「今はいかでのどやかに・、生ける世の限り・・、思ふ事・・殘さず、のちの世の勤めも心にまかせて、こもり居なむと思ひ侍るを、この世の思ひいでにし・つべきふしの侍らぬこそ、さ・す・が・に口惜しう侍りぬべけれ。數ならぬをさなき人の侍る・、生ひ先いと待遠なりや。忝くとも、なほこの門廣げさせ給ひて、侍らずなりなむのちにも・、かずまへさせ給へ」など・・・聞え給ふ。御いらへはいとおほどかなるさまに、からうじて一言ばかり・・かすめ給へるけはひ、いとなつかしげなるに、聞きつきて、しめ〴〵と暮るるまでおはす。「はか〴〵しき方の望み・はさるものにて、年の內ゆきかはる時々の花紅葉、空の氣色につけても、心のゆく事もし侍りにしがな。春の花の林、秋の野のさかりを・・・・とり〴〵に人爭ひ侍りける・。・そのころのげにと心寄るばか

むつかしうて　不愉快な氣がして。

さりや　やつぱり自分を嫌つてゐられるのだ。

思ふ事殘さず　心殘りのない程。

かずまへさせ給へ　遺族の者を世話してやつて下さい。

聞きつきて　源氏はそれに聞き取れて。

はか〴〵しき方の　子孫繁昌の望はさておき。前に「御門廣げさせ給ひて」とあるのを受けた文句。

心のゆく事も　滿足を覺える程の事もして見たいものです。

そのころの　その色別けの成程と贊成の出來る程はつきりした判定はありませんが。河內本に「そのいろ」とあるのがよろしからう。

り、あらはなる定めこそ侍らざンなれ、唐土には、春の花の錦に如くものなしといひ・はンべめり。大和言の葉には、秋のあはれを取立てて思へる、いづれも・・・時々につけて見給ふに、目移りて・、えこそ花鳥の色をも音をもわきまへ侍らね。せばき垣根の内なりとも、その折々の心見知るばかり、春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野邊の虫をも住ませて、人に・御覧ぜさせむと思ひたまふるを、いづかたにか御心寄せ侍るべからむ」と聞え給ふに、いと聞えにくき事とおぼせど、むげに絶えて御いらへ聞え給はざらむもうたてあれば、「ましていかが思ひわき侍らむ。げにいつとなきなかに、怪しと聞きし夕べこそ、はかなう消え給ひにし露のよすがにも・・・思ひ給へられぬべけれ」と、しどけなげに宣ひ消つもいとらうたげなる・・。に、え忍び給はで、

「君もさばあはれをかはせ人知れず我身にしむる秋の夕風

唐土には 文集三十春遊「逢レ春不二遊樂一、但恐是癡人」奥入「晋石季倫、居二金谷一春花滿レ林、作二五十里錦障一」

秋のあはれを 拾遺雜下「春はただ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる」萬葉一額田王「冬ごもり、春さりくれば、鳴かざりし、鳥も來鳴きぬ、咲かざりし、花も咲けれど、山を茂み、入りても取らず、草深み、取りても見ず、秋山の、木の葉を見ては、もみぢをば、取りてぞしぬぶ、青きをば、置きてぞ歎く、そこし恨めし、秋山吾は」

まして 春秋の優劣は源氏さへ判定出來ないのにまして私如きは。

怪しと聞きし 古今戀一「いつとても戀しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり」秋の夕べは、はかなくなられた母君に、涙の露に縁があるやうにも思はれます。故に齋宮を秋好（あきこのむ）とも申す。

君もさはの歌 私は内々秋の夕風を身にしみて哀と思つて居るのですから、あなたも、それではその私の心に同情して下さい。源氏が秋好に對する思慕の意がこもつてゐる。

忍びがたき折々も侍りしか」と聞え給ふに、いづこの御いらへかはあらむ。心得ずと・・おぼしたる御氣色なり。このついでにえこめ・・給はで、恨み聞え給ふ事どもあるなし。今すこし・・・ひがごともし給ひつべけれども、・いとうたてとおぼいたるもことわりに、わが御心・も若々しうけしからず、とおぼしかへして、うち歎き給へるさまの物深うなまめかしきも、心づきなうぞおぼしなりぬる。やはらづつ引き入り給ひぬる・氣色なれば、源「あさましうもうとませ給ひぬるかな。誠に心深き人は、かくこそあらざンなれ・。よし、今より・憎ませ給ふなよ。つらからむ」とて、渡り給ひぬ。うちしめりたる御匂ひ・とまりたるさへ、うとましくおぼさる。人々御格子などまゐりて、「この御しとねの移香、いひ知らぬものかな。いかで斯く取りあつめ、柳の枝に咲かせたる御有様ならむ。ゆゆし」と聞えあへり。對に渡り給ひて、とみにも入り給はず、・・いたう眺めて、端・

忍びがたき あなたを戀ふる心が。

えこめ給はで 源氏は胸の思を包みきれないで。

いとうたてと いやな事だと思つて居られるのも尤の事だし。

物深う 源氏の歎きの一通りでないのを見ると、思慕の情も深いやうだの意。

やはらづつ 宮が少しづつ奥にはひつて行かれる樣子なので。

誠に心深き人は 本當に分別のある志の人といふものは、そんないやな仕打はしないものです。

柳の枝に 後拾遺春上中原致時「梅が香を櫻の花に匂はせて柳が枝に咲かせてしかな」

ゆゆし おそろしいやうだ。

對 西の對なる紫上の方。

人々　女房達を。

かうあながちなる　こんな無理な戀の爲に胸が一ぱいになる癖がまだ自分には殘つて居るよと。

怖ろしう罪深き　過去の好色の怖ろしく罪障深い點は今より一段と甚だしかつたであらうが、それは分別のない若い頃の過失として佛や神もお許し下さつたであらうと、氣休めしてゐるにつけても。

なほこの道は　矢張戀路についてはもう分別が出來て來て心配はいらぬのだと自分ながら痛感される。

くやしう　秋の哀れを理解してゐるやうな口をきいた爲に、源氏もいやらしい「君もさば」の歌を詠んだのである、だからなまじ知つたかぶりなことを云はなかつたらよかつたとくやしく思ふ意。

いとすくよかに　生眞面目に何氣なく裝つて、いつもより一段と親らしい態度をして居られる。

御心とまるばかりの　お氣に召すやうな遊びをしたいものだ。

近う臥し給へり。燈籠遠くかけて、・近く人々・・さぶらはせ給ひて、物語などさせ給ふ。かうあながちなる事に胸ふたがる癖のなほありけるよ、とわれ・・ながらおぼし知らる。これはいと似げなき事なり、怖ろしう罪深きかたは多く・まさりけめど、いにしへのすきは、思ひやりすくなき程のあやまちに、佛神も許し給ひけむとおぼしさます・も、なほこの道はうしろやすく深きかたのまさりけるかな、とおぼし知らせ給ふ。女御は、秋のあはれを・・知りがほにいらへ聞えけるもくやしう恥かしと、御心一つに物むつかしう・なやましげにさへ・・し給ふを、いとすくよかにつれなくて、常よりも親がりありき給ふ。女君に「女御の秋に心を寄せ給へりしもあはれに、君の、春のあけぼのに心・しめ給へるもことわりにこそあれ。時々につけたる木草の花に寄せても、御心・と・まるばかりの遊びなど・してしがな。おほやけ私の營みしげき身こそふさはしからね。いかで

只御ため　これも只あなたの爲にお淋しからうと思ふのが心苦しいのです。

山里の人　明石上。

所せさのみ　身分が一層高くなつて自由には出かけられないので。

世の中を　以下源氏の心。明石上は世の中をつまらなくつらいものだと思つて居る樣子だが、何もそんなに思ふにも當らない。氣輕に京に出て來て、好い加減な生活はしたくないと思つて居るのは身の程知らずだと源氏は思ひながらも。

例の不斷の　嵯峨野の御堂で催される。

つらかりける御契りの　恨めしい夫婦仲ではあるが流石に淺い因緣ではない事を思つて見ると、却つて悲しくて。

斯かるすまひに　私も須磨明石で斯樣な住居の經驗があるが、もしさうでなかつたら珍らしく感じた事でせう。海邊の住居であつたから、「しほじむ（潮染む）」といふ語を用ひたものである。

思ふことしてしがなと、只御ため・・さう／＼しくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひ聞え給ふ。

山里の人もいかになど絶えずおぼしやれど、所せさのみまさる御身にて、渡り給ふこといと難し。世の中をあぢきなく憂しと思ひし・る氣色、などかさしも思ふべき、心やすく立ちいでて、おほぞうのすまひはせじと・・思へるを、おほけなし、とはおぼすものから、・・いとほしくて、例の不斷の御念佛にことづけて渡り給へり。住み馴るるままに、いと・・・心凄げなる所のさまに、いと深からざらむ事にてだに、あはれ添ひぬべし。まして見奉るにつけても、つらかりける御契りの、さすがに淺からぬを思ふに、なか／＼にて慰めがたき氣色なれば、こしらへかね給ふ。いと木繁きなかより、篝火どもの影・・の、遣水の螢に見えまがふもをかし。源「斯かるすまひにしほじまざらましかば、珍らかに覺え・まし」と宣ふに、

いさりせしの歌 あの篝火を見ると、明石の浦で苦しんでゐた時の漁火の影も思ひ出される、これは明石時代のつらさが私の跡を追つて來たのであらう。「うき舟」は「憂き」といふ事をいふ代りに漁火の緣で舟を出したまでの歌言葉である。

思ひこそ 此處での物思ひも明石での物思ひも似たやうなものでございます。「思ひ」に火をひびかしてある。

淺からぬの歌 私の深い心の底を御承知ない爲に嘆き悶えて居らるるのでせうか。孟津抄「篝火の影となる身のわびしきは流れて下に燃ゆるなりけり、とはたれの思ひは深きを、そなたは淺く思召して、心の騷ぎ給ふにやとよめり」「篝火の影と」の歌は古今戀一に見える。

たれ憂きもの 六帖五「うたかたも思へば悲し世の中をたれ憂きものと知らせそめけむ」

（明石）「いさりせし影忘られぬ篝火は身のうき舟（浮きに憂きをいひかけたもの）や慕ひ來にけむ

思ひこそまがへられ侍れ」（この漁火も明石の浦の漁火に見誤られます）と聞ゆれば、

（源氏）「淺からぬしたの思ひ（火をかけてある）を知らねばやなほ篝火の影は騷げる

たれ憂きもの」と、おしかへし（反對に源氏の方から）恨み給ふ。大方（も）・物靜かにおぼさるる頃なれば、（源氏は）尊き事どもに・御心とまりて、例よりは日頃經（大井に長逗留）給ふにや（になる故か）、（明石上が）すこし思ひまぎれけむとぞ。

斎院 桃園式部卿宮の姫君で、槿斎院と申す。源氏が心をかけてゐられて帚木にも「式部卿の宮の姫君に朝顔奉り給ひし」とあつた。巻一、七三頁。

御服 父宮の御喪の爲に斎院をおりられた。式部卿宮は薄雲巻の末に薨去された。二五五頁。

宮煩らはしかりし事を 槿斎院は以前にも源氏の爲に迷惑した事が思ひ出されるので。

桃園の宮 槿斎院の自邸。

女五の宮 式部卿宮の御妹で槿斎院の叔母。

故院の 故院が女五宮などを特別大切に思つておいでになつたので、源氏は今も親しくそれからそれへと音づれて居られるのである。

同じ寝殿の 桃園の宮の同じ寝殿の東の方には女五の宮、西の方には槿が。

このかみに 葵上の母宮は女三の宮で女五宮の御姉でいらせられるが。

故おほとのの宮 左大臣の北方で葵上の母宮。

古りがたき 若々しい。

もて離れ 女五の宮はその方とは全く違つて。

斎院は御服にておりゐ給ひにき(しぞ)・かし。(源氏)おとど、例のおぼしそめつる事絶えぬ御癖にて、(父宮の御弔問にかこつけて)御とぶらひなど、いと繁う聞え給ふ(も)・。宮、煩らはしかりし事をおぼせば、御返り(など)・・も打解けて聞え給はず。(源氏心)いと口惜しと(く)おぼしわたる。長月になりて桃園の宮に(槿斎院が)わたり給ひぬるを(源氏が)聞き(給ひ)・・て、女五の宮の(桃園の宮)そこにおはすれば、(女五宮の御方へ)そなたの御とぶらひにことづけてまうで給ふ。(桐壺院)故院の、このみこたちをば心殊にやんごとなく思ひ聞え給へり(こ)しかば、今も親しくつぎ〳〵に聞えかはし給ふめり。同じ寝殿の西東にぞ住み給ひける。(式部卿宮薨後間もなく)程もなく荒れにける心地して、あはれにけはひしめやかなり。(女五)宮たいめんし給ひて、(源氏に)御物語(など)・・聞え給ふ。(女五)いと(五の宮の年寄つた御さま)舊めきたる御けはひ、しはぶき(咳)がちにおはす。このかみにおはすれど、故(左大臣)おほとのの宮は、あらまほしく古(う)りがたき御有様なるを、もて離れ、聲(無器用で)ふつつかに、(無骨)こち〳〵しく(う)覺え給へるもさるかたなり。(女五)「(桐壺院)院のうへかくれ給ひてのち、よろづ心細く覺

この宮さへ 御兄式部卿宮までが薨去されたので。

かしこくも お氣の毒なほど年寄られた事だ。

たまたま 偶召返されて朝廷の要職に任ぜられてからは。**取り亂り暇なく** あれやこれや政務多端の爲に。

いともいともあさましく 院の崩御や源氏流謫の事など。

かくて世に立ちかへり 又再び歸京なさいました芽出度さを思ふと、先年の流謫中に私が死んでしまひましたら殘念な事だつたらうと存じます。**うちわななき** 聲をふるはして。

え侍りつるに、年の積るままに、いと涙がちにて過ぐし侍るを、この宮さへかく打捨て給へれば、いよいよあるかなきかにとまり侍るを、かく立寄り訪はせ給ふになむ、物忘れ（物思を忘れさうな氣がします）しぬべく侍る」と聞え給ふ。かしこくも（女五宮を見ての源氏の心）古り給へるかな、と思へど、うちかしこまりて、源「院かくれ給ひてのちは、さまざまにつけて同じ世のやうにも侍らず。覺えぬ罪にあたり侍りて、知らぬ世（須磨明石に）に惑ひ侍りしを、たまたまおほやけにかずまへられ奉りては・、（は）また取り亂り暇なくなどして・（つこ）、年頃も、參りて（女五宮の方に）古への御物語をだに聞え承らぬを、いぶせく思ひ（う）給へわたりつつなむ」など聞え給ふを、女五「いとも・もあさましく（う）、いづかたにつけても定めなき（無常な世の有樣を）世を、同じさまにて（徐々と長らへて）見給へすぐす命長さの恨めしきこと多く侍れど、かくて世に立ちかへり給へる御喜びになむ、ありし年頃を見奉りさしてましかば、口惜しからましと覺え侍・・・る（思給へられけ）」と、うちわななき（老いたるさま）・・（泣い）給ひて、女五「いと清らに（源氏の美しさをほめるのである）ねびまさり給ひに

ゆゆしく覺え あまりの美しさに不幸な事でもありはせぬかと恐ろしくさへ思はれました。

殊に斯く わざわざ面と向つてはほめぬものだと源氏はをかしくお思ひになる。

怪しき御推し量り とんでもない御推量です。

時々見奉らば 時々あなたにお目にかかれば、殘りずくない命も延びる事でせう。

三の宮 葵上の母宮。**さるべき御ゆかり添ひて** 聟姑といふ緣が出來て、親しくあなたにお逢ひの出來るのを羨しく思つて居ります。

さやうにこそ悔い給ふ さう申してあなたを聟にしなかつた事を後悔。

さもさぶらひ馴れて 私が聟として睦じくして居りましたら。

けるかな。わらは（源氏が子供であつた頃）にものし給へりしを見奉りそめし時、世に斯かる光の出でおはしたる事と、おどろかれ侍りしを、時々見奉るだ・（ごと）にゆゆしく覺え侍りてなむ。『内のうへ（冷泉院が源氏に）なむいとよく似奉らせ給へる』と人々聞ゆるを、さりとも劣り（冷泉院が）給へらむとこそ推し量り侍れ」と、ながながと聞え給へば、殊に斯くさしむかひて人のほめぬわざかな、とをかしくおぼす（う）。源「山がつ（須磨に下つて）になりて、いたう思ひくづほれ（すつかり滅入りこんでしまつた數年の後）侍りし年頃ののち、こよなく衰へにて侍るものを、うち（冷泉院）の御かたちは、古への世にも並ぶ人なくやとこそありがたく（世にも類なく）見奉り侍れ。怪しき御推し量りになむ」と聞え給ふ。女五「時々見奉らば、いとどしき命や延び侍らむ。今日は老いも忘れ、憂き世の歎き皆さめぬる（り）心地なむ」とてもまた泣い給ふ。女五「三の宮羨しく（源氏を聟にしてゐられるから）。さるべき御ゆかり添ひて、親しく見奉り給ふをうらやみ侍る。この亡せ（式部卿宮）給ひぬるも、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか」と宣ふにぞ、すこし（源氏）・（御）耳とまり給ふ。源「さもさ

氣色ばみ聞え給ふ 意中をそれと知らせるやうな、氣を持たした口のきゝかたをなさる。
のどやかに 槿のさまを源氏が想像するのである。
かくさぶらひたる 折角參上した機會を失しては誠意が足りないやうですから。
鈍色の御簾 喪中故に帽額や緣を鈍色にしたのである。
追風なまめかしく 薰物の香を吹送る風もなまめかしく。
すのこは 源氏の御座席が緣側では人前もわるいから。
宣旨 槿齋院の侍女。
今更に若々しき 御簾の中に入れ下さればよいのに、御簾の外にて置くとは若者扱ひにされるやうな氣がします。
神さびにける 長い間あなたの爲に盡した骨折も數へて見れば澤山有るのですから、もう御簾の內外の出入もお許し下さる事だらうと當てにして居つたのです。
內外も 簾の內外も。婦人の居る部屋の御簾の中には、男子は特別に深い關係がなければ入る事は出來ない。
ありし世は 今までの生活は夢であつたとして。

ぶらひ馴れな・ましかば、いま(か)に思ふさまに侍らまし。皆さし放(私を疎外されまして)たせ給ひて」と、恨めしげに・(うち)氣色ばみ(槿に心かかる故)聞え給ふ。あなたのお前(槿の居間を源氏が)を見やり給へれば、枯れ〴〵なるせんざいの心ば(庭草の風情も殊に面白く)へも殊に見わたされて、のどやかに・(て)眺め給ふらむ御有様(槿の)かたちもいとゆかしくあはれにて・(なるに)、え念じ給はで、源「かくさぶらひたるついでを過ぐし侍らむは、志なきやうなるを、あなたの(槿の君にも御挨拶)御とぶらひ聞ゆべかりけり(しなければなりません)とて、やがてすのこより渡り(槿の方に)給ふ。暗うなりたる程なれど、鈍色(にびいろ)の御簾(みす)に黒き御几帳の透影(すきかげ)あはれに・・・・(見渡されて)、追風なまめかしく吹きとほし・・(たる)、けはひあらまほし。すのこは傍痛ければ、南の廂(ひさし)に入れ(源氏を)奉る。宣旨たいめん・して、御消息(槿の)・(は)聞ゆ(とイ)。源「今更に若々しき心地する御簾の前かな。神さびにける年月のらう(勞)數へられ侍るに、今は內外(ないげ)も・許させ給ひてむとぞ頼み侍りける」とて、飽かずおぼしたり。槿「ありし世は皆夢に・(見)なして、今なむ(今こそその夢からさめて見ると、夢の昔と現の今といづれがはかないのかと)さめてはかなきにやと思ひ給

人知れずの歌 あなたに逢つてもよいといふ神のお許しの出る時を內々お待ち申して居つた間に、そしらぬふりして暮した年月の長い事は。よく辛抱の出來たものだ。齋院をおおりなさいました今日に於ては何の禁制にかこつけて私を遁れようとなさるのですか。
さま〲 流謫のなやみと槿に對するなやみと、それぞれになやみの限をしつくしました。
さるはいといたう でも、相當年輩にはなられたが、內大臣といふ地位には釣合はぬ程若々しくお見えになる。
なべて世の歌 一通り世の哀を語りあふだけでも、私のやうに一度神に仕へた身は、それは誓を破るのだと、直樣神からお咎めを蒙る事でございませう。「からには」「さうすると直に」の意。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を嵐といふらん」參照。
その世の罪は 齋院時代の罪は皆科戸の風につけて祓ひのけてしまひました。科戸は風の神で級長戸邊神の事。
みそぎを神は 戀せじの御禊をして誓つても、神がそれをお受けになつたためしがありませうか。伊勢物語「戀せじと御手洗川にせし御禊神は受けずもなりにけるかな」

へ定め(分別がつきかねて居ますので)がたく侍るに、らうなど(仰せの功勞の事などはあとからゆつくり考へ定める事に致しませう)は靜かにや定め聞えさすべう侍らむ」と聞えいだし給へり。げに(源氏の心)こそ定めがたき世なれと、はかなき事につけてもおぼしつづけらる。

源氏「人知れず神の許を待ちしまにここらつれなき世を過ぐす哉

今は何の諫めに・(か)かこたせ給はむとすらむ。なべて(須磨引退の後)世に煩はしき事さへ侍りしのち、さま〴〵(いろ〳〵煩悶しました)に思ひ給へ集めしかな。いかで片端(その一端なりとも聞いていたゞきたい)をだに」と、あながちに聞え給ふ御用意(源氏の)なども、(は)昔よりもいますこしなまめかしきけさへ添ひ給ひにけり。さるはいといたう過ぐし給へど、御位の程にはあはざめり。

槿「なべて世の哀ればかりをとふからに誓ひし事と神やいさめむ

とあれば、源「あな心憂。その世の罪は、みな科戸(しなど)の風にたぐへてき」と宣ふ愛敬もこよなし。源「みそぎを神はいかが侍りけむ」など、はかなき事(とりとめもない事を)を聞ゆるも、まめやかに(槿は心からきまりわるく思はれる)いと傍痛し。世づか(男女の道には)ぬ御有様(疎い槿の有様は)は、年月に添へても・物深く(奥へ〳〵と引込んで)のみ引き入り給ひて、え

今ぞとだに　住吉物語「君が門今ぞ過ぎゆく出でて見よ戀する人のなれる姿を」

過ぎにし　過去の情感が蘇つて來て。この詞によつて齋院に度々音づれた事が知られる。

心やましくて　むしやくしや心地で歸られた事故。

けざやかなりし　はつきりした（とりつきはのない）あしらひを受けて。

いとど　「ねたく」を修飾する。

聞え給はぬを、見奉りなやめり（侍女達は當惑した）。源「すき〴〵しきやうになりぬるを（色めいたお話のやうになりました）」など（とて）、浅はか（源氏が）ならず打歎きて立ち給ふに、源「よはひの積りには（年を取ると面目ない目にあふものでした）、おもなくこそなるわざなりけれ。世に（源氏自身の事）知らぬやつれを、今ぞとだに聞えさすべくやはもてなし給ひける」とて出で給ふ名殘、所せきまで例の聞えあへり（女房達が）。大方の空（九月の末故）もをかしき程に、木の葉の音なひにつけても、過ぎにし物の哀取り返しつつ、その折々をかしくもあはれにも、深く見え給ひし御心ばへ（源氏の）なども思ひ出で聞えさす（女房達の心に）。

心やましくて（源氏の心）立ち出で（歸り）給ひぬるは、まして（源氏は）寢覺めがちにおぼしつづけける（ら）。疾く（朝早く）御格子まゐらせ給ひて、朝霧を眺め・・（給ふ）。枯れたる花どものなかに、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて、匂ひ（色つや）も殊にかはれるを折らせ給ひて、奉れ（槿に）給ふ。源文「けざやかなりし御もてなしに、人わろき（人前のわるい）心地し侍りて。うしろ手（後姿）もいとどいかが御覽じけむとねたく。されど、

見し折のの歌　以前にあなたを見た折の事が少しも忘られませんが、あの頃の盛の美しさは過ぎはしないでせうか。

秋果てての歌　秋も暮れて霧の罩めて居る垣根に纏ひついてゐるかなきかに色あせてゐる朝顔の花、それが私の姿でございます。

人の御程　一體贈答の消息などは、その人の身分や書振などに取繕はれて、その爲にその當座は缺點のないものでも、後にそれを尤らしく語り傳へる場合には、その當時どほりになりかねるやうに思はれるので、有りのまゝには書かれない。

書きまぎらはしつつ　ごまかして書き〳〵して、その爲に。

源氏 見し折のつゆ忘られぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらむ

年頃（月）の積りもあはれとばかりは、さりともおぼし知るらむやと（長い間積り積つた私の思をも氣の毒だ位には察して下さるかと一つは頼もしく思つてゐます）なむ、かつは」など聞え給へり。大人び給へる（たこ）御文（源氏の）の心ばへに、おぼつかなからむも（返事しないのも）見知らぬ（程）やうにやとおぼし、人々（侍女達も）も御硯取りまかなひて聞ゆれば、

槿「秋果てて霧の籬にむすぼほれあるかなきかにうつる朝顔

似つかはしき御よそへにつけても露けく（私を朝顔の御譬が似つかはしい譬へであるにつけても涙の露が）」とのみあるは、何のをかしきふしもなきを、いかなる（源氏は）にか・・・（あらん）、置きがたく御覽ずめり。青鈍の紙のなよびかなる墨つきはしも（槿の文のさま　青鈍の紙になよやかなる文字で書いてあるさまも）、をかしく見ゆめり。人の御程、書きざまなどにつくろはれつつ、その折は罪なき事も、つき〴〵しうまねびなすには、ほほゆがむ事もあめればこそ。さかしらに書きまぎらはしつつ、おぼつかなき事も（はつきりしない事も多い）多かりけり。立ちかへり（源氏心）今更に若々しき御文書（ふみがき）なども似げなき事とおぼせど、なほかく昔よりもて離れぬ御氣色ながら（槿が昔から振切るでもない仕向ながらも）、口惜（思を遂げ）

しくて過ぎぬるを思ひつつえやむまじくおぼさるれば、(得ずに過ぎた事を思ふと迚も思ひ切れない氣がするので)さらが(又蒸返して熱心に槿に言ひ寄られる)へりてまめやかに聞え給ふ。

東(ひんがし)の對に離れおはして、宣旨(槿の侍女)を迎へつつ語らひ給ふ。さぶらふ(槿に侍する女房で)人々の、さしもあらぬきはの事をだに靡きやすなるなどは、あやまち(間違ひも引起しさうに)もしつべくめで(源氏を)聞ゆれど、宮(槿は昔でさへ源氏から綺麗に遠のいて居った事故)はそのかみだにこよなくおぼし離れたりしを、今はまして、誰も思ひなか・る(おもりかな)べき御よはひ覺えにて、はかなき木草につけたる御返りなどの折すぐさぬも、かる〴〵しくや取りなさるらむなど、人のものいひを憚り給ひつつ、(源氏に)うちとけ給ふべき(槿の)御氣色もなければ、舊(ふ)りがたく同じさまなる(槿の)御心ばへを、世の人にかはり、珍らしくもねたくも(源氏の心に)思ひ聞え給ふ。世のなかに漏り聞えて、「前齋院(槿)に・懇に聞え給へばなむ女五の宮などによろしく(も)おぼしたなり。似げなからぬ御(源氏と前齋院とは似合の夫婦だ)あはひならむ」などいひけるを、對(紫上)の上は傳へ聞き給ひて、暫(初の)しは、(内は)さりともさやうならむ事もあらば、隔てては・・(よも)おぼし

東の對 源氏が二條院の東院に人を避けておいでになつて。

さしもあらぬ つまらぬ身分の男にも靡き易い女などは。

誰も思ひなかるべき 雙方共色めいた心などない筈の御年輩や地位で。

はかなき木草の 一寸した木草につけての手紙の返事などを機をはずさずにするのも、それを人が輕率と思はれはせぬかと他人の非難を憚つて。

舊りがたく 昔の儘相變らず。

世の中に漏り 槿に源氏が懸想して居るといふ事が。

前齋院に 源氏が槿に懇に言ひ寄るので、女五宮などにおかせられても相當受入れて居られるのだ。

さりとも いくら何でもそんな事があれば自分に隱しておきになる事はあるまいとは思つたが。

たらじ、(た)とおぼしけれど、うちつけに目とどめ(源氏の樣子に)聞え給ふに、御(源氏の)氣色なども、例ならずあくがれ(有頂天なのも)たるも心憂く、まめ〴〵しくお(前齋院を)ぼしなるらむ事を、つれなくたはぶれにいひなし給ひけむよ、と・・(おほす)、同じすぢ(槿と紫上と)には物し給へど、覺え殊に、昔よりやんごとなく聞え給ふを、御心など移りなば、はしたなく(世間に對して氣まりわるからう)もあべいかな、と・、年頃の御もてなし(年來源氏から受けた寵愛は肩を並べる人もなかつたのが常になつて居るので)などは、立ちならぶ方なくさすがにならひて、人におし消たれむことなど、(今更壓倒されるのが殘念だ)人知れずおぼし歎かる。かき絶え名殘なきさまにはもてなし給はずとも、(自分と絶縁するやうな態度はなさらぬにしても)いと物はかなきさまにて見馴れ給へる年頃のむつび、あなづらはしきかたにこそはあらめなど、さま〴〵に思ひみだれ給ふに、よろしき事こそうちゑ(怨)じなど憎からず聞え給へ、まめやかにつらしとおぼせば、色にもいだし給はず。端近うながめがちに、(源氏の心あくがれたるさま)うちずみ(内裏住まひ)繁くなり・・(たまて)、役(仕事のやうにして手紙を書いて居られるので)とは御文を書き給へば、げに人(紫上心)のことは空しかるまじきなめり、氣色をだにかすめ給へかしと、うとましく

うちつけに 句を隔てて「例ならずあくがれたる」に續く。

まめ〴〵しく 心からの戀にならうとするのを何氣ない顏して冗談のやうに胡麻化して居られたのだと紫上は考へて。

同じすぢには 槿も自分も同じ宮家の血筋ながら、槿は世の名望も重いので、源氏が以前から重んじて居られたのだから、もし槿に愛情が移つたならば、自分は馬鹿な目を見る事だらう。

いと物はかなきさまにて 幼少な時から見なれてゐられる親しさの心やすだてから、自分を輕く扱ふやうにならうも知れぬ。

さま〴〵に 源氏の隔意と自分の體面とそれ〴〵に。

よろしき事こそ 紫上は並大抵の事なら嫉妬なども源氏の感じをわるくしないやうに仰しやるのだが、これは心から恨めしいと思召すので。

氣色をだに それならさうと樣子にだけでも匂はして下さればよいに。

ふゆつがた　藤壺の諒闇故、十一月であるけれども神事も停廢されるのである。

なれたる　糊氣の落ちて柔かになつた。

心弱からむ人はいかが　氣の弱い女はどうして靡かずにゐられようやと見えた。

はた聞え給ふ　祕密にしてはゐられるとはいへ、紫上に仰しやる。

側目　横顔。

罪もなしや　お叱りを受けるやうな過ちも私にはありませぬ。

鹽燒き衣の　伊行釋「須磨の蜑の鹽燒衣なれゆけば疎くのみこそなりまさりけれ」

馴れゆくこそ　新古今戀三徽子女王「馴れゆくは憂き世なればや須磨の蜑の鹽燒衣間遠なるらむ」

のみ思ひ聞え給ふ。

（ゆふ）ふゆつがた、かんわざ（神事）などもとまりてさう／＼しきに、（源氏は）つれづれとおぼしあまりて、五の宮に（擢故に）例の近づきまゐり給ふ。雪うち散りてえん（艶）なるたそがれ（黄昏）時に、なつかしき程になれたる御ぞどもを、いよ／＼たき（香を）しめ給ひて、心殊にけさうじ（化粧）暮し給へれば、いとど心弱からむ人はいかがと見えたり。さすがにまかり申し（紫上に暇乞を）はた聞え給ふ。源「女五の宮のなやましくし給ふなるを、とぶら（お見舞に）ひ聞えになむ」とて、つい居給へれば、（ど）（紫上は源氏の方を）見もやり給はず、若君（明石姫君）をもてあそびまぎらはしおはする側目（そばめ）のただならぬを、源「怪しく御氣色の變れる（べき）・・頃かな。罪もなしや。鹽燒き衣のあまり（あまり見馴れ過ぎて見ばえなく思召す）目なれ見だてなくおぼさるるにや（のかと態と内裏住をしてお目にかからずに居るのを）とて、とだえおくを、又いか（どんな意味に）が（邪推なさるのか）」など聞え給へば、紫「馴れゆくこそげに憂き事多かりけれ」とばかりにて、うちそむきて（添ひ）・・臥し給へるは、（紫上を）見捨てて出で給ふ道（も）・物憂けれど、宮に御消息聞え給ひてければ（女五宮に今晩訪問する旨を告げてあるので）、出で給ひ

斯かりける　こんな事も起る筈の仲であつたのに。

にびたる御ぞども　源氏の衣裳のさま。

誠にかれまさり　本當にこれ以上源氏が自分から離れて行かれたならば悲しからうと。

御前　前驅の人。

讓り聞えつるを　女五宮のお世話をお任せ申しておいたのだが。

今は頼む　女五宮が私に、以後は宜しく頼むと仰しやるのも尤で。

宮には　桃園の宮の御所では。

入り給はむも　君はその人繁き門から入られるのも輕々しいと思はれたので。

ぬ。（紫上心）斯かりける事もありける世を、うらなくて過ぐしけるよ（心をゆるして過して來た事であるよ）、と思ひつづけて臥し給へり。にびたる（鈍色の）御ぞどもなれど、色合、かさなり好ましくなか／＼（鈍色ではあるが）見えて、雪の光にいみじくえん（艶）なる（源氏の）御姿を見いだして、（紫上心）誠にかれまさり給はばと、忍びあへずおぼさる。御前（ごぜん）など、忍びやかなる限りして、源「うちよりほかの（參内以外の出あるきは）ありきは、物憂きほどになりにけりや。（女五宮）桃園の宮の心細きさまにて物し給ふも、式部卿の宮に年頃は讓り聞えつるを、『今は頼む』など（女房達にいひ繕はれるけれども）おぼし宣ふもことわりにいとほしければ」など、人々にも宣ひなせど、人々「いでや、御すき心の舊（ふ）りがたきぞあたら御疵（きず）（源氏の缺點だ）なめる。（嫉妬沙汰などが）かる／＼しき事も出で來なむ」などつぶやきあへり。宮には、北面の人繁きかたなる御門は、入り給はむもかろ（る）／＼しければ、西なる（西面にあるのが大きい門ではあるが）がこと／＼しきを、（供人を）人入れさせ給ひて、（女五）宮の御かたに（來意を告げると）御消息あれば、（今日はまさかお出にはなるまいと宮は思って居られたのに）今日しも渡り給はじとおぼしけるを、驚きてあけさせ給ふ。御門守（みかどもり）、寒げなるけはひ（こゑに）、（慌てながら）うすずき出で來

昨日今日と 細流「青表紙本みそとせのあなたとあり。私案之、みそとせ可然也。その故は源氏今年卅一歳也。我身昨日今日のわらはべと思ひしに、はや卅年さきに成ぬると身を觀じ給ふ也。尤みそとせ可用也（天文三九月講也云々）」湖月師説「これ式部卿宮のかくれ給ひて此御所のいつしかと荒れたるにつけて、光陰の移り易く、物の有樣の變り易き世を見つつも猶發心もせで、あだなる色に迷ふと思す心也」「花鳥」源氏廿七歳須磨より都へ歸り給ふ。今年は卅一歳。今年五ケ年なれどみとせのあなたといへるは、大方久しき事には三とせと云たれど、猶久しき事には三とせのあなたとはいへる也」「夕霧巻にも「昨日今日と思ふ程に、みそとせよりあなたの事になる世にこそあれ」とある。

いつのまにの歌 此のお邸は、いつの間にむさくろしい蓬生となつて、古里と荒れ果てた事であるぞ。「古里」とは人が住まなくなつて荒廢した里をいふ。「雪」は「ふる」の枕詞。

古事どもの 女五宮はとりとめもない昔話を始めていろ〳〵話されるけれども。

聞召したらむと 私がこのお邸に居る事はお聞きの事と信じて居りましたに。

て、とみにもえあけやらず、これよりほかのをのこ（この男の外には召使もないのだらう）はたなきなるべし、ごほ〳〵と（錠を）引きて、門番「錠（ぢやう）のいといたくさびにければ、あかず」と憂ふる（こぼしてゐるのを）を、あはれと（源氏）聞召す。昨日今日とおぼすほどに、み・そとせ（みとせイ）のあなたにもなりにける世かな、斯かるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ捨てず、木草の色にも心を移すよ、とおぼし知らる。口ずさびに、

源氏 いつのまに蓬がもと（か）とむすぼほれ雪ふる里（降に古がかけてある）と荒れし垣根ぞ

やや久しく（う）（錠を）ひ・こじろひあけて入り給ふ。（女五）宮の御方に、例の御物語聞え給ふに、古事（ふること）どものそこはかとなきうちはじめ、聞え盡し給へど、（源氏のさま）御耳も驚かずねぶたきに、宮もあくびうちし給ひて、女五宮「宵惑ひをし侍れば、物も聞えやらず」と宣ふほどもなく、いびきとか聞き知らぬ音すれば、（源氏は）喜びながら立ちいで給はむとするに、又いと古めかしき（咳拂）しはぶきうちして參りたる人あり。源内侍「（畏多い事ですが）かしこけれど、聞召したらむと頼み聞えさするを、世にあ（生）

おばおとど 祖母殿。葵巻に源氏が祖母殿とからかつたとあるが、院の事は物語の上にない。巻一、三六〇頁參照。

親なしに臥せる旅人 拾遺哀傷「しなてるや片岡山のいひに飢ゑて臥せる旅人あはれ親なし」

すげみたる 齒が拔けてすぼまつた口元の思ひやられる聲づかひでありながら。

舌つきにて 甘えた物言ひをして。

いひこし程に 「身をうしと云ひ來し程に今はまた人の上ともなげくべきかな」（伊行釋所引）この歌によつて「あなたもお年を召しましたなあ」とふざけかゝつて來たのである。この語を引歌なしに說かうとする說もあるが、このものの語のさまは必ず本歌あるべきものである。

まばゆさよ 聞いてゐられない。

これもあはれなり この歌の歌つてゐるところも哀れ深いといつて昔さかえた女御達の衰へを數へた書き方である。

このさかりに 源内侍の女盛りの頃寵を競つた女御や更衣達。

るものとも（きて居るものとも）かずまへさせ給はぬになむ。（桐壺院）院の上は、（私を）おばおとどと笑はせ給ひし」など名のり出づるにぞ（源氏は）おぼし出づる。（源氏の心）源内侍のすけといひし人は、尼になりて、この（女五）宮の御弟子にて（なん）・・行ふと聞きしかど、今まで（生きて居ようとも）あらむとも尋ね知り給はざりつるを、あさましうなりぬ。源「（故院の御代の事）その世の事は皆昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心細きに、嬉しき御聲かな。（親のない孤兒と思つて私を）親なしに臥せる旅人と（世話して下さい）はぐくみ給へかし」とて、（物によりかゝつてゐられる源氏の）寄り居給へる御けはひに、いとど昔思ひいでつつ、（相變らずの）ふりがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるる聲（こわ）づかひの、・さすがに（若び）・・舌つきにて、うちざれむとはなほ思へり。内侍「いひこし程に」など聞えかかるまばゆさよ。（源氏の心）（今急に年を取つたのでもあるまいに）今しも來たる老いのやうに、などほほゑまれ給ふものから、（その意味（年齢）ではなしに）引きかへこれもあはれなり。このさかりに挑み（給ひ）・・し女御、更衣、あるはひたすらなくなり（跡形もなしに世を去られ）給ひ、あるはかひなくて（生き甲斐もなく）、はかなき世にさすらへ給ふもあべか

心ばへなども 心構なども頼りなげに見えた人が却つて生き殘つて長閑に佛道修行をして月日を送つて居るとは、惣じて定めない浮世なのだと君はお思ひになるにつけて。

心ときめきに 内侍は源氏が自分に對する戀情の動きと感違をして。

年經れどの歌 親の親即ちお祖母さんといつて頂いた御一言もございますもので、君との御因縁は幾年たつても忘られませぬ。拾遺雜下「親の親と思はましかばとひてまし我が子の子にはあらぬなるべし」

身をかへての歌 生をかへてあの世からでも御覧下さい、この世で子が親を忘れる例があるかどうかと。

よからぬものの 世間ではよからぬものの譬へにして居るとか聞いて居つた事であるよと思ひ出されて。何か典據のあることか。

めり、入道（藤壺）の宮などの御よはひよ（短い御壽命よ）、あさましとのみおぼさるる（老少不定の世のさまを歎く語）世に、年のほど身の殘りすくなげさに（年齢からいへば餘命もすくなさうであるのに）、心ばへなども物はかなく見えし人の生きとまりて、のどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは、なほすべて定めなき世なりとおぼすに、物あはれな（感慨無量な）る（源氏の）御氣色を、（内侍は）心ときめきに思ひて、若やぐ。

（内侍）年經れどこのちぎり（此に子のがかけてある）こそ忘られね親の親とかいひし一こと（言）

と聞ゆれば、（源氏心）うとましくて、

（源氏）「身をかへて後も待ち見よ此世にて（此に子のがかけてある）親を忘るる例（ためし）ありやと

頼もしき契りぞや。今のどかにぞ聞えさすべき（いづれゆつくりお話しませう）」とて立ち給ひぬ。（槿の部屋）西面には、御格子まゐりたれ（おろしたが）ど、厭ひ聞えがほならむもいかがとて（源氏を嫌ふやうに見えても如何とて）、一間（ひとま）二間はおろさず。月さし出でて、うすらかに積れる雪の光にあひて、なかなかいと面白き夜（よ）のさまなり。ありつる（さつきの）（老女の心づくろひも）老いらくの心げさうも、よからぬものの世のたとひとか聞きし、とおぼし出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやか

人づてならで 後拾遺戀三「今はただ思ひたえなむとばかりを人づてならでいふよしもがな」

故宮などの 故父宮などが私を源氏に縁づける御考であられたのをも、私はとんでもない恥かしい事と思つて其儘になつて居つたのだもの。

心やましきや 却つてじれつたい氣がする。

つれなさをの歌 昔ながらのあなたの無情を懲りずに居る私の心を、あなたを怨めしく思ふ心に取添へて、我ながら怨めしく思ひます。

心づからの 我とわが心から苦しむのです。古歌「戀しきも心づからのわざなれば置所なくもてぞ煩ふ」

げに傍痛し 「げに」は前に「人づてならで」と源氏のいつた言葉を受けたものである。返事もしないでほつておくのは人前もよくないのである。女房達のこの言葉で「改めて」の歌をよまれたのである。

改めての歌 今更お目には懸られませぬ。他の女に對しても君はかうした心變りのお振舞があつたと聞いて居りますから。

昔に變る事は 私は元の心を改めるといふ事は仕馴れて居りませぬ。

に（槿に）聞え給ひて、（源）「（只）・一言、憎しなども人づてならで宣はせむを、思ひ絶ゆるふしにもせむ（それを諦める種にもしませうに）」と、（熱心に）おり立ちて責め聞え給へど、（槿）むかし（の心）我も人も若やかに（自分も源氏も若くて世間から大目に見られて居つた時でさへ）罪許されたりし世にだに、故宮（式部卿宮）などの心寄せおぼしたりしを、（私は）なほあるまじく恥かしと思ひ聞えてやみにしを、世の末に（晩年の今）、さだ過ぎつきなき程にて（年もふけ不似合な年輩で）、一聲もいとまばゆからむ（一言の返事も恥かしい）とおぼして、更に動きなき御心なれば、（源氏心）あさましうつらしと思ひ聞え給ふ。さすがにはしたなくさし放ちてなどはあらぬ（併し源氏に恥をかかせるやうに構ひつけずに置いたりなどはせず）人づての御返りなどぞ（源氏の心に）心やましきや。夜（よ）もいたう更けゆくに、風のけはひ烈しく（しき）て、（源氏の心に）まことにいと物・心細く覺ゆれば、さまよき程に（涙を）おしのごひ給ひて、

（源氏）「つれなさを昔に懲りぬ心こそ人のつらさに添へてつらけれ

心づから（の）・」と宣ひすさぶるを（しきりに仰しやる）、「げに傍痛し」と人々（女房達）例の（源氏びいきの意）聞ゆ。

（槿）「改めて何かは見えむ人のうへにかかりと聞きし心變りを

昔に變る事はならはず」（な）・と聞え給へり。

いと斯く　世間の物笑の種にもなりさうな我身の上を、人に漏して下さるな。
いさら川　古今東歌「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へてわが名漏らすな」
せちに　河内本の如く「せんじに」とあるべきである。
なさけおくれて　なぜつれないお仕打をなさるのでせう。
げに　以下槿の心。
物思ひ知るさまに　自分が君の御情をありがたく思つて居る事を知つて頂いた所で。
なつかしからむなさけも　君を慕つて居るやうな氣持を示すのもつまらぬ事だ。河内本に「いと」とあるのに從ふべきである。
年頃沈みつる　今迄齋院として佛から遠ざかつて居た罪障を贖ふだけの勤行がしたいものだ。

いふかひなくて、いとまめやかにゑじ聞えて出で給ふも、いと若々しき心地し給へば、「いと斯く世のためしになりぬべき有樣・漏らし給ふなよ。ゆめ〳〵。いさら川などもなれ〳〵しや」とて、せち・にうちささめき語らひ給へど、何事にかあらむ。人々も、「あなかたじけな・。・・あながちになさけおくれても・もてなし聞え給ふらむ。かるらかにおし立ちてなどは見え給はぬ御氣色を、心苦しう」といふ。げに人の程のをかしきにもあはれにもおぼし知らぬにはあらねど、物思ひ知るさまに見え奉る・とて、おしなべての世の人の、めで聞ゆらむつらにや思ひなされむ、かつはかる〳〵しき心の程も見知り給ひぬべく恥かしげなめる御有樣を、と思せば、なつかしからむなさけもいと・どあいなし、よその御返りなどは打絶えで、おぼつかなかるまじき程に聞え給ひ、人づての御いらへはしたなからで過ぐしてむ・・・・・、年頃沈みつる罪失ふばかり御行ひを、とはお

俄に斯かる　急に源氏との關係を打切りがほに見せるのも却て思はせぶりの新手のやうに。
見え聞えて人の　今ならば、「人がさういふやうに解釋して、源氏の目にも耳にもさういふやうに寫らない筈はない」といふ順序にいふところである。
御兄弟の君達　槿の兄弟。
さばかりめでたき人の　あんな立派な源氏が懇切に情意を盡されるので。
一つ心と見ゆ　源氏と同じ腹と思はれる。
げにはた人の御有樣　源氏の人柄や聲望が特に申分もなく、物の道理を深く辨へ、世の人の善惡の區別も聞き集めて、以前よりも一段と經驗を積んだ積りで居られるから、今更の浮氣沙汰は一方では世間の非難を憚りながらも。「はた」は戀に負けるのもいま〳〵しく「といつて」今更浮氣沙汰でもあるまいの意。

ぼし立てど、俄に斯かる御事をしも、もて離れがほにあら・むも、なか〳〵今めかしきやうに、見え聞えて人の取りなさじやは、と世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつはさ・ぶらふ人にもうちとけ給はず、いたう御心づかひしつつ、やう〳〵御行ひをのみし給ふ。御兄弟の君達あまた物し給へど、一つ御腹ならねばいとう〳〵しく、宮の内いとかすかになりゆくままに、さばかりめでたき人の懇に御心を盡し聞え給へば、皆人心を寄せ聞ゆるも、一つ心と見ゆ。

おとどは、あながちにおぼしいらるるにしもあらねど、つれなき御氣色のうれたきに、負けてやみなむも口惜しく、げにはた人の御有樣、世の覺え殊にあらまほしく、物を深くおぼし知り、世の人のとあるかかるけぢめも聞き集め給ひて、昔よりもあまた經まさりておぼさるれば、今更の御あだげも、かつは世のもどきをもおぼしながら、むなしからむはいよ〳〵人笑へなるべ

たはぶれにくく　古今誹諧「ありぬやと試みがてらあひ見ねばたはぶれにくきまでぞ戀しき」

御髪を掻きやりつつ　源氏が紫上の。

太政大臣　葵上の父。薄雲巻（二四五頁）に薨。

見譲る人なき　政事を委すべき人がなくて忙しい爲にあなたと一緒に居られないことも多いのです。

今はさりともと　こんな仲になつては、もう大丈夫だとやきもきしないやうに。

おとなび給ひ　あなたも年を取られたやうだが。

斯くまで　かうまで紫上から分けへだてされるのもつまらぬ事だ。

し、いかにせむ、と御心動きて、二條（紫上の方）の院に夜がれかさね給ふを、女君（紫上）は、たはぶれにくくのみお（も）ぼす。忍び（紫上は）給へど、いかがうちこぼるる（涙の）折もなからむ。源「あやしく（妙に様子がいつもと違つてゐるので氣になる）例ならぬ御氣色こそ心得がたけれ」とて、御髪（みぐし）を掻きやりつつ、いとほしとおぼしたるさまも、繪にかかまほしき御あはひなり。源「宮（藤壺）亡せ給ひ（たま）てのち、うへ（冷泉院）のいとさうざうしげにのみ世をおぼしたるも心苦しう見奉る（り）。太政大臣（おほきおとど）も物し給はで、見譲る人なき事繁（ことしげ）さになむ。この程の絶間などを、見馴らはぬ（今まで見なれない事と）事におぼすらむもことわりにあはれなれど、今はさりとも心のどかにおぼせ。おとなび給ひためれど、まだいと思ひやりもなく、人の心も見知らぬさまに物し給ふこそらうたけれ」など、まろがれたる（涙にもつれた）御額髪（おんひたひがみ）引きつくろひ給へど、いよいよ（紫上は）そむきて物も聞え給はず。源「いといたく若び給へるは（聞きわけがないのは）、たが習はし聞えたるぞ」とて、常なき（源氏心）世に、斯くまで心おかるるもあぢきなのわざや、とかつは（源氏のさま）うちながめ給

齋院に　槿に私が何でもない事を申上げるのを、もしや思ひ違ひして居られるのではありませんか。

昔よりこよなう　槿は昔から浮いた心のない人ですが、寂しい折に、何だかだまつてゐられなくなつて私がうるさく文通しますと。

斯くなむ　かうかうだとあなたに同情を求める必要もない。

松と竹とのけぢめ　雪は降りかくしてゐても松と竹とは識別がついて。

あやしう　雪は色もないのに、妙に身にしみついて、と、の「しみて」は「染みて」である。

すさまじきためしに　舊註には此語が枕草子に見えると註してあるが今の本にはない。總角巻にも、狹衣にも、更級日記にも篁物語にも見えてゐるから、古い典據があらう。

ふ。源「齋院（槿）にはかなしごと聞ゆるや、もしおぼしひがむる方ある。それはいともて離れたる（見當違ひです）事ぞよ。おのづから（いづれ分ります）見給ひてむ。昔よりこよなうけどほき御心ばへなるを、さうざうしき折々、ただならで聞え惱ます（す）に、かしこもつれづれ（槿も無聊に暮して居られるので）に物し給ふ所なれば、たまさかの御いらへなどし給へど、まめまめしき（眞劍な戀ではないのだから）さまにもあらぬを、斯くなむあるとしもうれへ聞ゆべき事にやは。うしろめたうはあらじとを思ひなほし給へ」など、日一日慰め（紫上を）聞え給ふ。

雪のいたう降り積りたる上に、今も散り（雪が）つつ、松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に、人（源氏）の御かたちも光りまさりて見ゆ。

源氏「時々につけても、人の心を移すめる花紅葉のさかりよりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしみてこの世のほかの事まで思ひ流され、面白さもあはれさも殘らぬ（悉く感ぜられる）折なれ。すさまじきためしにいひおきけむ（冬の月を殺風景なものの例にいひおいた昔の人は思慮が淺い）

むせびて 凍つてさら〳〵と流れない事。流れの音が停滯しがちなこと。

大きやかに なりが大きく物馴れてゐる童女。

衵 婦人や童女の身に近く著る服。

亂れ着 着方の整頓してゐないこと。

宿直姿 宿直の時の裝束で、唐衣や袴や裳はつけない略裝である。

ちひさきは 小さい童女は。

かたへは 他の人々は東の緣などに出て居て。

一年 先年。以下紫の上に語る詞。

くはしき御有樣を 源氏は藤壺に逢つた事を隱して居られるのである。

人の心淺さよ」とて、御簾まきあげさせ給ふ。月は隈なくさしいでて一つ色に（雪も月も一色に白く）見え渡されたる・（庭）に、しをれたる前栽の蔭心苦しう、遣水もいといたうむせびて、池の氷もえもいはずすごきに、わらはべ（童女を庭に）おろして、雪まろばしせさせ給ふ。をかしげなる姿、頭つきども月にはえて、大きやかに馴れたるが、さま〴〵の衵（あこめ）亂れ着、帶しどけなき宿直姿（とのゐすがた）なまめいたるに、こよなう餘れる髮の末、白き庭には、ましてもてはやしたる（一段と引立つて見えて居るのが實に鮮明である）、いとけざやかなり。ちひさき・・（ども）は、わらはげて（子供らしく）喜び走るに、扇なども落して、打解けがほ・・（たるいと）をかしげ（綺麗だ）なり。いと多うまろばさむとふくつけ（慾張るが）がれど、えも押し動かさでわぶめり（困つてゐる）。かたへ（一部分）は、東（ひんがし）のつまなどに出でゐて、心もとなげに（氣のもめるやうに）笑ふ。源「一年（ひととせ）、中宮（藤壺）のお前に雪の山造られたりし、世に古りたる事（陳腐な事ですが）なれど、なほ珍らしくもはかなき事をしなし給へりしかな（つまらぬ事を珍らしくおもはせるやうに工夫なさつた）。何の折々につけても、口惜しう（藤壺の亡き事が）飽かずもあるかな。いとけどほくもてなし給ひて（藤壺は遠のいて居られたので）、くはし（私は藤壺の姿）

もて出でて 見たところ功者らしい事はありませんでしたが。

いふかひありて 一寸した事柄をも申分なく取りまかなはれまして、相談甲斐がありました。

君こそは あなたは何といつても藤壺の姪だけあつてよく似て居られるが、すこし嫉妬の氣があつて、きかん氣の勝つて居られるのがつらい。

紫の故 六帖五「知らねども武藏野といへばかこたれぬよしやさこそは紫の故」

我も心づかひせらるべき 相手がしつかりしてゐるからである。

あさはかなる 輕々しい振舞などなさらぬ性分でしたのに。

き御有樣（しい樣子を見た事はないが）を見馴らし奉りし事はなかりしかど、御まじらひ（禁中に居られた時分）の程に、うしろやすきもの（私を頼りになる者と思つて下さつた）にはおぼしたりきかし。うち頼み（私は藤壺を）聞えて、とある事かかる折につけて、何事も聞えかよひし（相談しましたが）に、もて出でてらう〳〵じ・・・（うをかし）き事も見え給はざりしかど、いふかひありて、思ふさまに、はかなき事わざをもしなし給ひしはや（嘆辭）。世に又さばかり（藤壺程の人はない）のたぐひありなむや。やはらかにおびれたる（柔和でおど〳〵したところがあつたが）ものから、深うよしづきたる（深みがあつて趣ある點は）所の並びなくものし給ひしを、君（紫上）こそは、さいへど紫の故こよなからず物し給ふめれど、すこし煩はしきけ添ひて、かど〳〵しさの進み給へるや苦しからむ。前齋（槿）院の御心ばへは、又さま殊にぞ見ゆる。さう〴〵しき（物寂しい折）に、何と（別段の用）はなくとも（事はなくとも相談相手にし）聞え合せ、我も心づかひせらるべき（私も氣兼ねして居なければならぬ人は）御あたり、只こ（槿）の一ところ（一人だけが）や世に殘り給へらむ」と宣ふ。紫「内侍のかみ（朧月夜）こそは、らう〳〵じく（功者で）故々しき（奧ゆかしい）方は人にまさり給へれ。あさはかなる筋など・（は）、もて離れ給へりける人の御心（御心であるのに）を、怪しくもありける事

いとほしく 朧月夜には氣の毒にもあり遺憾に思ふ事が少くない。

まいて 朧夜月のやうな人さへさうだから、まして。

人よりは 私は普通の人よりは非常におちついてゐると自分では思つて居たのでさへこの通りだから。

山里の人 明石上。

人より異なるべき 受領風情の娘だから、外の人とは同列には出來ぬ筈のこと故。

いふかひなき 取りえのないやうな女とはまだ關係した事はありませぬ。

古りがたく 相變らず。

さるかたにつけての あゝした種類の女としては殊勝な氣立の女とりあげて馴れ初めてから、今も初と同じやうに愼ましい態度で暮して居ります。

ども・・かな」と宣へば、源「さかし。なまめかしう（朧月夜の事）かたちよき女のためしには、猶引きいでつべき人ぞかし。さも思ふに（さう思ふのに）、いとほ（私は）しく・・・（いたく）うちあだけすきた（浮氣な色めかしい人の）る人の、年つもりゆくままに、いかにくやしき事多からむ。人よりはこよなき静けさと思ひしだに」など宣ひ出でて、かんの（朧月夜）君の御事にも、泪すこしは落し給ひつ。源「この、かずにもあらずおとしめ給ふ山里の人こそは、身の程にはやや打過ぎ、物の（物が分る）心など得つべけれど（やうですが）、人より異なるべきものなれば、思ひあが（氣位の高いのを見）れるさまをも見消ちて侍る（ない風して居ります）かな。いふかひなききはの人はまだ見ず。人はすぐれたるは難き世なりや。東（ひんがし）の院にながむる人の（花散里）心ばへこそ、古（ふ）りがたくらうたけれ。さはた更にえあらぬもの（何といつても、決してあゝは出來ないものだな）を、さるかたにつけての心ばせ人（びと）に取りつつ見そめしより、（やが）て同じやうに世をつつましげに思ひて過ぎぬるよ。今はたか（何といつても）たみに背くべくもあらず（互に離れられさうもなく）深うあはれと思ひ侍る」など、昔今の

こほりとぢの歌 石間の遣水は凍つて流れかねて居るが、空に澄む月の光はよどみなく流れていく。

かんざしおもやう 髮の樣子や顏立ち。

いささか分くる すこし槿の方に引かれて居る愛情も引戻されさうである。

かきつめての歌 色々取集めて昔の事が戀しく思ひ出される此の雪の夜に、浮寢の鴛鴦の鳴く聲が猶一層の哀を添へる。

漏らさじと 源氏が紫上に藤壺の噂をしたからの怨みである。

御物語に夜（よ）更けゆく。月いよいよ澄みて静かに面白し。女君（紫上）、

こほりとぢ石間（いしま）の水はゆきなやみ空澄む月の影ぞながるる

外（と）を見出だして、すこしかたぶき給へるほど（頭を傾けて月を見て居る紫上の様子は）、似るものなくうつくしげなり。かんざし・おもやう・（など）の、戀ひ聞ゆる人（藤壺）の面影にふと覺え（似て）てめでたければ、聊か分くる御心も取りかへ（さね）しつべ（かさねイ）し。をし（鴛鴦）のうち鳴きたるに、

源氏 かきつめて昔戀しき雪もよにあはれを添ふるをしの浮寢か

入り給ひても（源氏が奥に）、宮（藤壺）の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなく（藤壺の姿を）ほのかに見奉るを、いみじく恨み給へる（藤壺が源氏を）御氣色にて、藤壺「漏らさ（秘密を）じと宣ひしかど、憂き名（二人の）の隠れなかりければ、恥かしう（死後の今）苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」と宣ふ。御いらへ聞ゆとお（源氏が返事をしようと）ぼすに、おそはるる（物に）心地して、女君（紫上）の、「こはなど斯くは」と宣ふに、おどろきて（源氏が目ざめて）、いみじく口惜しく（夢のさめたのが）、胸のおきどころなく騒げば、おさへて、泪も流れいでにけり。今も（夢がさめてからも）いみじく濡らし

とけて寝ぬの歌　物思に安眠も出來ず、心さびしくうつらうつらしてゐる冬の夜に、氣がゝりな夢のなんと短い事よ。（寝たり覺めたりで、長く眠られないから、夢も短いの意）

この世の濁りを　現世の濁りを洗つて成佛する事も出來ずに居られるのであらうと、物の道理を深く考へて見られると。

何わざをして　どんな事でもして、知人もない冥界にさまよつて居られるのをお見舞に行つて、その罪障に代つてあげたいものだなどと。

同じ蓮にとこそは　この句の下に「念じ奉り給ひけれ」といふやうな言葉が省筆してある。

添へ給ふ。女君（紫上）、いかなる事にかとおぼすに、うち（源氏は）もみじろかで臥し給へり。

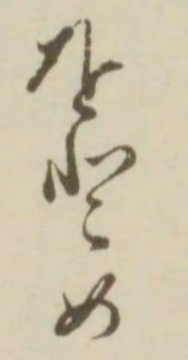
（源氏）とけて寝ぬ寝覺淋しき冬の夜に結ぼほれつる夢のみじかさ

なかなか飽かず悲しとおぼすに、疾く起き給ひて、さとはなく（誰の爲ともいはずに）て、所々（所々に）に御誦經（みずきやう）など・・・せさせ給ふ。苦しき目見せ給ふ（夢の中の藤壺の詞）、と恨み給へる（ふこ）も、さぞおぼさるらむかし（御言葉通りに恨んでいらつしやるだらう）。行ひをし給ひ（ふ）（佛を念願なさつて）、よろづに罪かろげなりし御有様ながら、この一つ事にてぞ（例の秘密一つの爲に）、この世の濁りをすすぎ（くひ）給はざらむと、物・・の心を深くおぼしたどるに、いみじく（源氏の心に）悲しければ、何わざをして、しるべ（へ）なき世界におはすらむを、とぶらひ聞えにまうでて、罪にもかはり聞えばや、などつくづくと（源氏は）おぼす。かの（藤壺の）御ために（と）、取立てて何わざをもし給はむは（特別の佛會を營む事は）、人咎め聞えつべし、うち（冷泉院）にも、御心の鬼におぼす所もあらむ（氣が咎めて思ひ當られる事もあらう）、とおぼしつつむ程に、阿彌陀佛（あみだぼとけ）を心にかけて念じ奉り給ふ。同じ蓮（はちす）にとこそは、

なき人をの歌　亡き藤壺を慕ふ心の行くにまかせて冥途に尋ねて行つても、三途の川でまごつくことだらう、その川の瀬にも藤壺の姿は見えないのだから。

（源氏）なき人をしたふ心にまかせても影見ぬ水のせにやまどはむ（き）

とおぼすぞ憂かりけるとや・・。



年かはりて 源氏今年三十三。
色あらたまりて 喪服を脱いで常服に著換へて。
祭 賀茂祭は四月の中の酉の日に行はれる。二酉の月には後の酉の日に行はれる。
思ひいづる事ども 齋院當時の事を追懐して。
大殿 源氏。
いかにのどかに 齋院をおりた事故。
かけきやはの歌 時も一變して、あなたが齋院もおりになつたその衣にやつれておいでになさらうとは思ひかけませんでした。「かけき」は波の縁語。
立文すくよかに きまじめな立文で。立文は正式書狀の式で風流韻事などに用ひる式ではない。懷紙を竪に巻いて禮紙に包み、更に白紙に包んで上下端を折る。
ふぢ衣の歌 喪服を著たのは昨日の事と思つて居りましたに、時は一轉して今日ははや除服のお禊をする日になりました。かうしたこの世をはかなくおもひます。「瀨に變る」は古今雜下伊勢—「飛鳥川淵にもあらぬ我宿も瀨にかはりゆくものぞありける」—による。
はかなく 歌の「變る世を」からいひつゞけるやうに書かれてゐる。はかなく思ふの意。
宣旨 槿の侍女。
院は 槿は。

年かはりて、宮(藤壺の御一周忌)の御はても過ぎぬれば、世のなか色あらたまり(れ)て、衣がへ(四月一日)の程なども今めかしき(氣が浮き浮きする)を、・・・(まして)祭の頃は、大方の空の・(も)・(こ)氣色心地よげなるに、前齋院(槿)はつれづれとながめ給ふ。お前(齋院の)なる桂の・(木)・(の)下風なつかしきにつけても、若き人々(槿の侍女達)は思ひいづる事どもあるを、(に)大殿(おほいどの)より、「御禊(みそぎ)の日はいかにのどか・(や)におぼさるらむ」ととぶらひ聞えさ・せ・給へり。(源文)「・(こ)・(そ)・(の)今日・(ま)・(で)は、

かけきやは川瀬(賀茂の糺川の波も)の波も立かへり(は)君が御禊のふぢのやつれ(藤に淵をかけてある)を」

紫の紙・(の)立文(たてぶみ)すくよかに・(て)、藤の花(紫の料紙に縁をもたせて)につけ給へり。折のあはれなれば御返り・(し)・(こ)あり。

(槿)「ふぢ衣着しは昨日と思ふまに今日は御禊の瀨に變る世を

はかなく」とばかりあるを、例(源氏)の御目(心)とどめ給・ひ・て見おはす。御ぶく(槿の除服の折)なほしの程(事)などにも・、・宣旨(せじ)のもとに、所せきまで(源氏から槿着料の吉服を贈った)おぼしやれる事・ど・も・あ・る・を、院・は・見苦しき事に・(院)・(は)おもほし宣へど、

おほやけざまの折々の　表向のお見舞などは例の事で眞面目な手紙だから。

いかがは聞えも　どういふやうにして、權に申上げないやうに取りかくすことが出來ようと。**もてわづらふべし**　取扱ひに困つてゐるやうだ。

こなたの宮にも　女五宮が權に對面の折は。

何か今始めたる　なあに、今更の懸想でもない。**故宮も**　父宮もあなたが齋院に立たれた爲に源氏を聟にしないたから、事を歎いては、私の意志に背いたからだと仰しやつて。

故おほいどのの姫君　葵上。

をかしやかに氣色(心持をほのめかした)ばめる御文(せうそこにて)などの・・あらばこそとかくも聞えかへさめ、年頃も(いとすくしうしない給ひて)・・・・・・・・・、おほやけざまの(に)折々(年頃も)の御とぶらひなどは聞えならはし給ひて(へるままに)・・・・、いとまめやかなれば、いかがは聞えも紛らはすべからむ・(な)と、もてわづ(あつか)らふべし。女(をんな)五の宮の御方にも、かやうに折(の)・過(々)ぐさず(ご)・・・(とぶら)・(ひ)聞え給へば、いとあはれに(女五宮の心に)、女五「この君(源氏の事)の昨日今日の兒(ちご)と思ひしを、かく大人びて・・(思ひ)とぶらひ給ふこと。かたちのいとも清(け)らなるに添へて、心さへこそ人には殊に生ひ出で給へれ」と、ほめ聞え給ふを、若き人々(若女房達)は笑ひ聞ゆ(ふ・こ)。こなた・・(の宮)にもたいめ(對面)し給ふ折・(々)は、女五「このおとど(源氏)の、かくねんごろに・・(思ひ)聞え給ふ(權に)めるを、何か・(は)。今始めたる御志・・(て聞え給ふ事)にもあらず。故宮(式部卿宮)も、筋(方角)ことになり(違ひなことに)給ひて、え見奉り給はぬ(世話が出來ない)・・(らこ)歎きをし給ひて(へこ)は、『思ひ立ちし事を、強(權が)ちにもて離れ給ひ・(に)し事』など宣ひいでつつ(てこ)、くやしげに(き事に)こそ思し(い)たり(る)し折々ありしか・(と)。されど故(大)おほいどの

三の宮　葵上の母宮。女五宮の御姉君。

えさらぬ筋にて物せられし人　動きのとれぬわけあひで正妻にすわつてゐられた。**げになどてかは**　あなたがそのあとになほられてもわるい事もありますまいと。**さらがへりて**、源氏が元に立返つて、懇に仰しやつて下さるのも。

しか心ごはきものに　強情者と思はれとほして來たのですもの。

強ひても　無理にお勸めもならない。

宮人　邸内の人々。侍女達。**上下皆心かけ**　誰も皆源氏贔屓の人々故、どんな間違が起らうも知れぬと氣づかはしいが。**かの御みづからは**　源氏自身。

あながちなるさまに　無理わざをして權の意志を破らうなどとはお思ひにならぬ。

の姫君(葵上)物せられし限りは、三の宮のおもひ(ほさ)給はむ(・こ)事の(所)いとほしさに、とかく(何かと)言(こと)添へ聞ゆる事もなかりしなり(をこ)。今は・・・・そのやんごとなくえ(葵上)さらぬ筋にて物せられ・・し人さへ(もこ)なくなられにしかば、げになどてかはさやうにて・(も)おはせましもあし(を)・・・からまし(こ)、と打覺(思ひ)え侍・・(りこ)るにも、・・(かく)さらがへりて・・斯くねんごろに聞(物と)え給ふも(める)・・(は)、さる(宿縁といふものでせう)べきにもあらむとなむ思ひ(見こ)侍る」など、いと古代に聞え給ふを(へは)、心(權心)づきなしと思して、權「故宮(父宮)・・(など)にも、しか・・心ごはきものにおもは(ほえこ)れ奉りて過ぎ・・・・侍りにしを、今更に又・世(源氏に靡くの)に靡き(も)侍らむも、いとつきなき事になむ(思ひ給へらるる)・・・・・」と・・・(ばかり)聞え給ひて、恥かしげなる御氣色なれば、・(え)強ひてもえ聞・・・えおもむけ・・(聞え)給はず。宮人も、上下・・・・(こなたかなた)皆心かけ(よせ)聞えたれば、世の中いと・・うしろめたく(う)のみ思さるれど、かの御みづから・・・・・・は、わ(權)が心を盡し(に親切を盡して)あはれを見え聞え(奉り)て、人(權の靡く折を待ちこそすれ)の御氣色の、うちもゆるが(はイ)む程をこそ待ちわたり給へ、さ・・・やうにあながちなる・・・さまに御心

大殿腹の若君 葵上腹の夕霧。
二條の院にてと 元服式を源氏の里邸二條院で擧げたいと源氏は思ふけれども。
大宮 葵上の母、夕霧の祖母。
かの殿 大宮の居所三條殿。
右大將殿 昔の頭中將。薄雲卷に右大將に昇進。
御をぢ 夕霧の伯父卽ち葵上の兄。
あるじがたにも 主人側の三條殿でも、この伯父の君達が我も我もとそれ〴〵元服に關する相當なお世話をなさる。
所せき 「勢なり」を修飾する。大した。
四位になしてむと 源氏は夕霧を四位にしようと思ひ。
わが心にまかせたる 自分の思ひの儘の天下であつて、人の意表に出て四位にするといふ事もありきたりのいき方だとあつて、源氏はそれを中止された。
淺黃にて 淺黃は六位の袍。
御對面ありて 源氏が大宮に對面されて。
この事聞え給ふに 六位にしておく事の不平を申された所が。
おひつかす 諸說あるが河海抄或說に「老つく」は今よりおとな〳〵しき心歟」とある說がいゝ。萬葉集并にこの物語に「おいつく」とある語の他動詞である。早くから元服させたり叙官させたりしておとなくさせないがよからうと思ふがの意。

やぶり聞えむなどは、おぼさざるべし。

大殿腹の若君の御元服の事おぼし急ぐを、二條の院にてとおぼせど、大宮のいとゆかしげにおぼしたるもことわりに心苦しければ、なほやがてかの殿にてせさせ奉り給ふ。右大將殿をはじめ聞えて、御をぢの殿ばら、皆上達部のやんごとなき御覺え殊にてのみ物し給へば、あるじがたにも、我も我もとさるべき事どもとりどりに仕うまつり給ふ。大方世ゆすりて、所せき御いそぎの勢なり。四位になしてむとおぼし、世の人もさぞあらむと思へるを、まだいときびはなる程を、わが心にまかせたる世にて、しかゆくりかならむも、なかなか目馴れたる事なりと、おぼしとどめつ。淺黃にて殿上に歸り給ふを、大宮は飽かずあさましき事とおぼしたるぞことわりにいとほしかりける。御對面ありて、この事聞え給ふに、源「只今かうあながちにしも、まだきにおひつかすま

今二三年を もう二三年は棒に振つた積りで、そのうちに朝廷のお役に立つ程になつたら出世も致しませう。
今人となり侍りなむ すぐに一人前になりませう。
お前に 桐壺院のお側に。
かしこき御手より 桐壺帝から傳へた道でさへ。
廣き心を 廣い知識を持たなかつた間は學問を學ぶにしても。
ね足らず 意味が明かでない。河内本に從つて「年足らず」としては益分らない。これは琴笛が直上にあるので、その方で「一音が十分でない」といつて、文才の不完全を兼ねたいひ方ではないかとおもふ。
はかなき親に 賢い子でもつまらぬ親にまさる事はむつかしい事ですから。
思う給へおきて 夕霧に學問させようと決心したのです。
さかりに 日常盛んで。
學問などに 學問などで苦勞する氣にはならないでせう。

じう侍れど、思ふやう侍りて、大學の道にしばしならはさむの本意侍るにより、今二三年をいたづらの年に思ひなして、おのづからおほやけにも仕うまつりぬべき程にもならば、今人となり侍りなむ。みづからは九重の内に生ひ出で侍りて、世の中の有樣も知り侍らず、夜晝御前にさぶらひて、わづかになむはかなきふみなども習ひ侍りし。只かしこき御手より傳へ侍りしだに、何事も廣き心を知らぬほどは、文才をまねぶにも、琴笛のしらべにも、ね足らず、及ばぬ所の多くなむ侍りける。はかなき親に賢き子のまさるためしは、いと難きことになむはべれば、まして次々傳はりつつ、隔たりゆかむ程の行く先、いとうしろめたきによりなむ、思う給へおきて侍る。たかき家の子として、官位心にかなひ、世の中さかりに驕りならひぬれば、學問などに身を苦しめむ事は、いと遠くなむ覺ゆべかめる。たはぶれ遊びを好みて、心

くわんじやく　官爵。

時に隨ふ　襟元につく人心で、蔭では嘲りながら、うはべは追従し機嫌を取つて服從してゐる間は。

おのづから　自然人物らしく見えて。

大和魂　世才。

さし當りて　今の當座はもどかしいやうでも將來大臣たるべき修養をしておく方が。

只今は　只今は碌に力になる事も出來ませんが、とにかく私がかうして世話して居れば。

げに斯くも　成程さういふやうに思ひ付かなければならぬのでしたのに。

この大將　大宮の子、昔の頭中將。

かたぶき侍るめるを　非難してゐるやうですが。

この幼心地にも　夕霧の子供心にも殘念がつて。

のまゝなるくわんじやくにのぼりぬれば、時に隨ふ世の人の、下には鼻まじろきをしつつ、つゐせうし、氣色取りつつ従ふほどは、おのづから人と覺えてやんごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世衰ふる末には、人にかるめあなづらるるに、かかりどころなき事になむ侍る。なほざえをもととしてこそ大和魂の世に用ひらるる方も強う侍らめ。さし當りては心もとなきやうに侍りとも、遂の世のおもしとなるべき心おきてを習ひなば、侍らずなりなむのちもうしろやすかるべきによりなむ、只今ははか〴〵しからずながらも、かくてはぐくみ侍らば、せまりたる大學の衆とて、笑ひあなづる人もよも侍らじと思う給ふる」など聞え知らせ給へば、うちなげき給ひて、「げに斯くもおぼし寄るべかりける事を、この大將なども、『あまり引きたがへたる御ことなり』とかたぶき侍るめるを、この幼心地にもいと口

大將左衞門督　共に葵上の兄。大將は昔の頭中將。

いとおよずけても　それは本當にこましやくれた恨みやうですね。

この人の程よ　夕霧の年輩では無理もない。

字　河海抄「禮記云已冠而字之、成人之道也」また花鳥餘情「學生の入學の時、文章院の堂監が書きくだす名簿にあざなを書く也。聖廟の御字は菅三、三善清行のあざなは三耀といへり。夕霧のあざなも、源なにとあるべきなり」

東の院　二條院の東院。

なだむる事なく　容赦なく嚴格に事を行へ。河内本に「ものゝしふ」とあるは「もの〳〵しう」の誤寫か。

家より外に　借物の裝束の身にそぐはず見にくい姿などをも恥かしがらず。

かたくなしき　河内本「かたくるしき」の「る」の傍に「な歟」とある。

惜しく、大將、左衞門督の子どもなどを、我よりは下﨟と思ひおとしたりしだに、皆おの〳〵加階しのぼりつつおよずけあへるに、淺黃をいとからしと思はれたるが心苦しう侍るなり」と聞え給へば、打笑ひ給ひて、「いとおよずけても恨み侍るなりな。いとはかなしや、この人の程よ」とて、いとうつくしとおぼしたり。「學問などして、すこし物の心も得侍らば、その恨みはおのづから解け侍りなむ」と聞え給ふ。字つくる事は東の院にてし給ふ。東の對をしつらはれたり。上達部、殿上人、珍らしくいぶかしき事にして、我も〳〵とつどひ參り給へり。博士どもも、なか〳〵臆しぬべし。「憚る所なく、例あらむにまかせて、なだむる事なくきびしう行へ」と仰せ給へば、強ひてつれなく思ひなして、家より外に求めたるさうぞくどもの、打合はずかたくなしき姿などをも恥ぢなく、おももち聲づかひ、うべ〳〵しくもてなしつつ、座に着き並びたる作法よりは

じめ、見も知らぬさまどもなり。若き君だちは、え堪へずほほゑまれぬ。さるは物笑ひなどすまじく、過ぐしつつ、静まれる限りをとえり出だして(でこ)、へいじ(瓶子)なども取らせ給へれ(るに)ど、筋異なりける(方の)まじらひにて、右大將(昔の頭中將)民部卿などの、あぶなあぶな(あぶなかしい手附で盃を受けて居られるのを見咎めて)かはらけ取り給へるを(に)、あさましう(きびしく)咎め(缺點を指摘しつつ)出でつつおろす。博士「おほ(をこ)しかいもと(垣下)あるじ(饗)(は)甚だひざう(非常)にはべりたうぶ。斯くばかりのしるしとあるなにがし(拙者)を知らずしてや、おほやけには仕うまつり給ふ、甚だをこなり」などいふに、(皆)人々皆ほころびて(吹き出して)笑ひぬれば、また、博士「鳴り高し(騒々しい)。鳴りやまむ(静にく)。甚だひざうなり。座(ざ)を引きて(退席してもらはう)立ちたうび(はべ)なむ」など、おどしいふ(に)もいとをかし(けれは)。見ならひ(見なれない)給はぬ人々は、珍らしく(う)興ありと思ひ、この道より(なり)出で立ち給へる上達部などは、したりがほにうちほほゑみなどしつつ、斯かる方ざまをおぼし好みて心ざし給ふがめでたきこと、と限りなく(いとど)思ひ聞え(の)給へり(ふこ)。いささか(博士達が制する)物いふ

さるは　實は笑ひこけたりなどしないやうに、年寄つて落着きのある人々のみを選り出してお酌などもさせたのだが、何分儒者といふ風變りな席故。

おろす　河海抄に「おろすは盃を、のみくたす也巡流也」とあるが、弄花抄に「おろすはおとろかしいさむる也」とあるのに從ふべきである。こきおろす意。

「おほし」は「凡そ」である。弄花抄に「大饗などにも人數の外の人の交はりたるを垣下の公達と云、あるじは饗也」とある。

おほしかいもとあるじ　一體相伴役の人達が甚だ無作法でござる。このあたりは時勢にうとい學者の口吻をそのまゝ寫してある。

斯くばかりの　斯程の學問の効驗によつて博士となつてゐる（學問の權化である）拙者を知らないやうな事で朝廷に御奉公が出來ますか。諸說あるが誤つてゐる。

をこなり　智慧が足りない。河内本「をこり」の「こ」と「り」の傍に「な歟」とある。

この道より　儒道出身の公卿達などは。

斯かる方ざまを　源氏が學問の道を愛好されて夕霧を大學へ入れられた事を奇特の事と非常に敬服せられた。

をも制す。なめげなりとても咎む。かしがましうののしりをる顔(博士達の顔)どもも、夜(よ)に入りては、なかなか今すこしけちえんなる火影(ほかげ)に、さる(猿)がう(樂)がましくわびしげに人わろげなる(るき)など(こ)、(いと)さまざまに(て)、げにいとなべて(平凡なものではなく)ならず、さま異なる(風變りな有樣)わざなりけり。おとど(源氏)は、(源)「いとあざれかたく(自分の樣に滑稽な融通のきかない身)なる身にて、けうさうしまど(なイ)はされなむ」(な)と宣ひて、御簾(隱家の)のうちに隱れてぞ御覽じける。かず定まれる座(ざ)につきあまりて、歸りまかづる大學の衆(す)どもあるを聞召して、釣殿のかたに召しとどめて、殊に物(引出物)など賜はせけり。

事果てて(儀式がすんで)まかづる博士才人(さいじん)ども召し(加へ)て、又々ふみ(詩)作らせ給ふ。上達部殿上人(など)も、さるべき(その道の人達を)限りをば皆とどめ(まり)さぶらは(ひこ)せ給ふ。博士の人々は(皆)四韻(律詩)(の詩)、ただの人(學者外の人)は、おとど(源氏)を(より)始め奉りて、ぜく(絶句)作り給ふ。興ある題の文字えりて(ぞ)文章(もんさう)博士奉る。短き頃(四月の末故)の夜(よ)なれば、明け果ててぞ講ずる(披講)。左(右)中辨講師(かうじ)仕うま

けちえん　掲焉。はつきりきはだつ。

さるがうがましく　道化じみてゐるのや、つらさうなのや、見苦しげなのなど。

けうさうし　王朝時代に於て、漢語が國語として用ひられた時は、m或はn音を寫す假名遣が統一されてゐなかつたので、或は「む」を以て或は「う」を以て或は無文字で示されてゐた。こゝには湖月抄本に「けうさう」とあり、河内本に「けさう」とあるのも、共にmnを表はす假名遣で、同じく「ケン」といふ音を寫したものであらう。こゝは「喧噪」といふやうな漢語を寫したものと思ふ。即ち「席に連なつた人もやかましくまごく〵させられることだらう」の意とおもはれる。假粧と解すべきではなからう。河内本は傍に「けうまん歟」とある。

かず定まれる　座席が足らない爲に歸宅する大學の衆のある事を源氏が聞召して。

釣殿　寢殿造りの廊の南端で、池に臨んだ所に構へた建物。

才人　詩文に堪能な人。

題の文字えりて　花鳥「翰林の出題する也。韻の字は切韻とて何字をもて韻とすといふ時もあり。又題中に取韻といひて題の五文字の中平聲の字を取りて韻とする事もあり。又何韻にても作者の心まかせにて取る事もある也」

左中辨　河内本「右中辨」の「右」

の字の傍に「左歟」とある。

覺え心殊なる　左中辨は信望厚い博士であつた。河内本よし。

窓の螢を　晉書「車胤字武子、南平人、恭勤不レ倦、博學多通、家貧不二常得一レ油、夏月則練囊盛二數十螢火一以照レ書、以レ夜繼レ日焉…後官至二尙書郎一」

枝の雪を　孫氏世錄「孫康家貧無レ油、常映レ雪讀レ書、少小淸介、交遊不レ雜、後至二御史大夫一」

親めき　親らしく切な愛情もにあらはされてゐるので、感涙を流して吟じ騷いだが、女の癖に知りもせぬ事を並べ立てるのは憎い事であるからと、それがいやさに此處にはそれを書き漏らした。「さへ」は言辭も優れてをり、内容も優れてゐたといふ意。

つる。かたちいと清げなる人の、こわづかひ物々しく、神さびて讀みあげたる程、いと面白し。覺え心殊なる博士なりけり。斯かる高き家に生れ給ひて、世界の榮花にのみたはぶれ給ふべき御身をもちて、窓の螢をむつび枝の雪を馴らし給ふ志のすぐれたるさまを、よろづの事によそへなずらへて、心々に作り集めたる、句ごとに面白く、「唐土にもて渡り傳へまほしげなる世のふみどもなり」となむその頃世にめでゆすりける。おとどの御はさらなり。親めきあはれなる事さへすぐれたるを、泪おとしてずじさわぎしかど、女のえ知らぬことまねぶは憎き事をと、うたてあれば漏らしつ。うちつづき、入學といふことせさせたまひて、やがてこの院の内に御曹司造りて、まめやかにざえ深き師にあづけ聞え給うてぞ學問せさせ奉り給ひける。大宮の御もとにも、をさをさまうで給はず。夜晝うつくしみて、なほ兒のやうにのみもてなし

かしこにては　大宮の許では勉强が出來まいと思つて。

つと　夕霧はずつと籠居して居られて。

大方の人がら　夕霧は一體が眞面目な人柄で。

寮試　大學寮の試驗でこれに及第すれば擬文章生となる。擬進士ともいふ。史記中の難儀五條を試問して三條に通ずるを及第とする。

至らぬ隈なく　不明の處なく。

かたがたに　諸說を參照して。

つまじるしのこらず　不審の箇處はなく。

聞え給へれば、かしこにては、え物習ひ給はじとて、靜なるところに籠め奉り給へるなりけり。一月に三度ばかりを參り給へとぞ許し聞え給ひける。つと籠り居給ひて、いぶせきままに、殿を、つらくもおはしますかな、かく苦しからでも、高き位にのぼり、世に用ひらるる人はなくやはある、と思ひ聞え給へど、大方の人がら、まめやかに、あだめきたる所なくおはすれば、いとよく念じて、いかでさるべきふみども疾く讀み果てて、まじらひもし、世にも出で立たむと思ひて、ただ四五月のうちに、史記などいふふみは讀み果て給ひてけり。今は寮試受けさせむとて、まづわがお前にて試みせさせ給ふ。例の大將、左大辨、式部の大輔、左中辨などばかりして、御師の大内記を召して、史記の難き卷々、寮試受けむに、博士のかへさふべきふしぶしを引出でて、一わたり讀ませ奉り給ふに、至らぬ隈なく、かたがたに通はし讀み給へるさま、つまじるしのこらず、あさ

さるべきにこそ　これも天稟でいらせられたのだと。

故おとど　大將の父。夕霧の祖父。

人の上にて　人の上では見苦しい事と見聞きして居つたのですが、子が大人びるのに親は反對に耄碌してゆくのは、私などまだ大した齡といふではありませんが、世間はかうしたものでした。

世のひがものにて　大内記は天下の變人で、學問のわりには世に用ひられず。

大學にまゐり　夕霧が大學に寮試を受けに參られる當日は。

ましきまでありがたければ、さるべきにこそおはしけれと、誰も〳〵泪おとし給ふ。大將はまして、「故おとどおはせましかば」と聞えいでて泣き給ふ。殿も、え心强うもてなし給はず。「人の上にてかたくななりと見聞きはべりしを、子の大人ぶるに、親の立ちかはりしれゆくことは、いくばくならぬ齡ながら、斯かる世にこそ侍りけれ」など宣ひて、おしのごひ給ふを見る御師の心地、嬉しく面目ありと思へり。大將盃さし給へば、いたう醉ひしれてをる顏つき、いと痩せ〳〵なり。世のひがものにて、ざえの程よりは用ひられず、すげなくて身貧しくなむありけるを、御覽じ得るところありて、斯く取りわき召寄せたるなりけり。身にあまるまで御顧みを賜はりて、この君の御德に、忽に身をかへたると思へば、ましてゆくさきは、並ぶべき人なき御覺えぞあらむかし。

大學にまゐり給ふ日は、寮門に、上達部の御車ども數知らずつどひたり。大方世に殘りたる人あらじと見えたるに、またなくもてかしづかれて、つくろはれ入り給へるくわざの君の御さま、げに斯かるまじらひには堪へず、あてにうつくしげなり。例の怪しき者どもの立ちまじりつつ來居たる座の末を、からしとおぼすぞいとことわりなるや。ここにても、又おろしののしる者どもありて、めざましけれど、すこしも臆せず讀み果て給ひつ。昔覺えて大學の榮ゆる頃なれば、上中下の人、我も〳〵とこの道に心ざし集まれば、いよ〳〵世の中にざえありはか〳〵しき人多くなむありける。文人、擬生などいふなる事どもよりうちはじめ、すが〳〵しうしはて給へれば、ひとへに心に入れて、師もいとどはげまし給ふ。殿にもふみづくり繁く、博士、才人ども所得たり。すべて何事につけても、道々のざえの程あらはるる世になむありける。

大方世に殘りたる　此處に集まつて來ない人は殆どあるまいと思はれる有樣であつたが。

くわざの君　冠者の君。夕霧の事。

おろしののしる　叱りわめく儒者達がゐて不快ではあるが。

昔覺えて　今は昔の盛時も思ひ合される程、大學の榮える時代故。

文人　文章生卽ち進士。

擬生　擬文章生。

しはて給へれば　夕霧がすべての資格をすら〳〵と得てしまはれたので。

ふみづくり　作詩の會が頻繁に催されし。

后居給ふべきを　立后の儀がある筈だが。

齋宮の女御を　藤壺も生前に秋好を主上の御世話役にと頼んでおかれた事だからとの口實で源氏は秋好を后に推された。

弘徽殿の　弘徽殿女御が他の方々より先に入内されたのになぜ立后なさらないのだらう。

この御時には　冷泉院の御代には殊更主上の御信任も厚いお方だが、その方の姫宮が目的通り入内された。

王女御　皇族出の女御。

同じくは　同じ王女御を后に立てるのならば、藤壺の姪で親しい間柄にある當方の姫君こそ藤壺のおいでにならぬ代理のお世話役といふ事を口實にして后に適當であらう。

斯く引きかへ　故母六條御息所はあんなに不幸な方であつたのに。

かくて后居給ふべきを、「齋宮（秋好）の女御を・こそは・母宮（藤壺）も御後見・（に）と讓り聞え給ひしかば」と、おとど（源氏）もことづけ・（聞え）・給ふ。源氏のうちしきり（源氏から頻繁に后が出られる）后に居・（なり）給はむ事、世の人・（も）許し聞えず。人々「弘徽（元の頭中將の女）殿の、まづ人より先に參り給ひにしも・いかが」など、うちうちに、此方彼方に心寄せ聞ゆる人々、おぼつかながり（氣をもんでゐる）聞ゆ。兵部（紫上の父）卿の宮と聞えし、今は式部卿にて、この御時（當代には）には、まして・（いと）・やんごとなき御覺えにておはする御むすめ、本意ありて參り給へり。同じごと（秋好と同樣）王女御（わうにようご）にてさぶらひ給ふを、「同じくは（式部卿方詞）、御・母方にて親しく・（う）おはすべきにこそ、母后（藤壺）のおはしまさぬ御・かはりの・（御）後見にとことよせて、似つかはしかるべく・」と、とりどりにおぼし爭ひたれど、なほ梅壺（秋好が立后された）居給ひぬ。御さいはひ（秋好の幸福）の、斯く引きかへすぐれ給へりけるを、世人驚き聞ゆ。おとど（源氏）太政大臣（だいじやう）にあがり・（居）給ひて、大將（元の頭中將）、内（ない）大臣になり給ひぬ（て）。世の中の事ども（天下の政務を執られるやうに）まつりごち給ふべく讓り（源氏が内大臣に）聞え給ふ。人がら（内大臣の人柄）いとすくよかにきら

韻塞には　賢木卷の事。卷一、四三九頁參照。韻塞とは古人の詩の韻字を隱して當てる遊戲。

女御　弘徽殿ともうお一人。そのお一人とは雲居雁をいふ。

王家統流腹にて　そのお一人といふのは王族の姫君の腹で、種姓の位格さは弘徽殿女御に劣るまいけれども。

さしむかひたる　大納言との仲に子供が澤山生れたので、内大臣はこの姫君をその母君に附けてやつて繼父の大納言の手にかけるのは甚だ面白くないと思つて。

女御には　内大臣は雲居雁を弘徽殿よりは輕く見て居られたが。

冠者の君　夕霧。

睦まじき人なれど　夕霧と雲居雁とは。

きらしく・（う）て、心用ひなどもかしこく・（う）物し給ふ。學問を立て（學問に）てし給ひければ、韻塞（ゐんふたぎ）には負け（源氏に）給ひしかど、おほやけごとに・（は）かしこくなむ。腹々に御子ども十餘人おとなびつつ物し給ふも、次次になり（出世して）いでつつ、劣らず榮えたる御家の内なり。女は、・（唯）女御と今一（雲居雁の事）ところとなむおはしける。王家統流（わかんどほり）腹（はら）にて、あてなる筋は劣るまじけれど、その母君、按察の大納言の北の方になりて、さしむかひたる・（へこ）・（御）子どものかず多くなりて・・・・（おはすれば）、それにまかせて後の親に讓らむ、いとあいなしとて、取放ち（手許に引取って）聞え給ひて、大宮にぞあづけ聞え給へり・（ひこ）ける。女御には、いとこよなく思ひおとし聞え・・給へれど、人がら（雲居雁の）かたちなど、いとうつくしうぞおはし・（け）たる。冠者（くわざ）の君・（は）、一つにて（夕霧は雲居雁と一緒に育ったのだが）生ひ出で給ひしかど、おのおの十に・（な）あまり（けイ）給ひてのちは、御方（部屋を別々にして）ことにて、睦まじき人なれど、「をのこごには打解くまじきものなり」と父おとど（内大臣）聞え（雲居雁に）給ひて、・・（いと）けどほく（二人の間は）なりにたるを、幼心地（夕霧の）に、思ふ事（心）なきに

し・(も)あらねば、はかなき花紅葉につけても、雛遊のつゐせう(そ)を
も、懇にまつはれありきて、志を見え聞え(奉り)給へば、いみじう思
ひかはして、・(今も)・けざやかには今も恥ぢ聞え給はず。御後見ど
もも、何かは。若き御心どちなれば、年頃見ならひ給へる御あ
はひを、俄にも、いかがはもて離れ・(ても)・はしたなめ聞えむ、と
見るに、女君こそ何心・(も)なくをさなくおはすれど、男はさこそ
物げなき程と見・(思ひ)聞ゆれ・(ど)、おほけなく、いかなる御なからひに
かありけむ。よそよそになりては、これをぞ靜心なく思ふべき。
まだ片生ひなる手の生ひ先うつくしきにて、書きかはし給へる
文ども・(など)・の、心をさなくて、おのづから落ち散る折・(などの)・あ
るを、御方の人・(々)は、ほのぼの知れるもありけれど、何かは、
斯くこそと誰にも聞えむ、見隱しつつある・(なる)・べし。
所々の大饗ども(など)も果てて、世の中の御いそぎ・(ども)・もなく、・(いと)・
のどやかになりぬる頃、時雨うちして、荻の上風もただならぬ

雛遊の 雛遊をして雲居雁の御機嫌取をしたりして、懇に附纏つて好意を寄せてゐられるので。

何かは なあに、幼い同志の事だから、それに今迄親しくしあつて居つた間柄だもの、急に引放してきまりわるい目をさせるでもあるまい。

女君こそ 雲居雁今年十四歳。

物げなき 頑是ない年頃。夕霧十二歳。

おほけなく 年に似合はず。二人の間に契の結ばれたことをいつてゐる。

まだ片生ひなる まだ未完成ではあるが末の綺麗なのをおもはしめる筆蹟で書きかはした手紙が、不注意から偶人中に落ち散る折などがあるから、姫君の侍女達はうすうす感付いて居る者もあるが。

所々の大饗ども 源氏と內大臣とが催した任大臣の大饗なども濟んで。

荻の上風も 義孝集・朗詠集上秋秋興義孝少將「秋は猶夕まぐれこそただならね荻の上風萩の下露」

夕暮に、大宮の御方に內のおとど參り給ひて、姫君・(も)渡し聞え
給ひ(ふ)・て、御琴など彈かせ奉り給ふ。宮はよろづの物の上手にお
はすれば、いづれも傳へ奉り給ふ。「琵琶こそ女のしたるに憎
きやうなれど、らうらうじきものに侍れ。今の世にまことしう
傳へたる人、をさをさ侍らずなりにたり。何のみこ、くれの源
氏」などかぞ(ず)へ給ひて、「女のなかには、・(只今)・おほきおとどの
山里にこめ置き給へる人こそ、いと上手と聞き侍れ。物の上手
ののちには侍れど、末になりて、山賤にて年へた・(た)る人・(の)、い
かでさしも彈きすぐれけむ。かのおとど、いと心殊にこそ思ひ
て宣ふ折々侍れ。他事よりは、(も)遊びの方のざえは、なほ廣う・(く)物
(に)・あはせ、かれこれに通はし侍るこそかしこけれ。獨りごとに
て上手となりけむこそ珍らしき事なれ」など宣ひて、宮にそそ
のかし聞え給へば、「ぢうさす事・(など)・うひうひ(う)しくなりにけり
や」と宣へど、面白う彈き給ふ。「幸に打添へて、なほ怪しう

姫君渡し聞え 雲居雁を大宮の方に呼び寄せて。

琵琶こそ女の 琵琶といふものは女が彈くとつらにくい感じはしますが、氣が利いたやうに思はれるものです。

物の上手ののち 明石上はもと名人の子孫ではありますが、後になつては、多年明石に海人生活をして居ましたのに、どうしてさうまで上達したのでせう。

宣ふ折々侍れ 源氏が明石上の琵琶の上手な事を吹聽する折があります。

他事よりは 他の事とは違つて。

ぢうさす 左手で琵琶の柱を押す事。

幸に打添へて 明石上は仕合なばかりでなく。

老いの世に　源氏が年寄るまで持たれなかつた女の子をお生みになつて、而もその姫君を手元に置いて見すぼらしい生活もさせないで。

事もなかるべき人　難のない人。

女御を　弘徽殿をさう詰らぬ嫁ではなく、人並には育てたと思つて居ますが、思ひがけない秋好の爲に寵を奪はれた不運から世間は案外なものだと思ひ知りました。

春宮　後に今上と申し奉る。

かういふ　明石上といふ仕合人の腹に生れた后の候補者が引續いて現はれて來ました。

故おとど　もとの左大臣で大宮の夫。

めでたかりける人なりや。老いの世に持給へらぬ女子をまうけさせ奉りて、身に添へてもやつしゐたらず、やんごとなきに譲れる心おきて、事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る」など、かつ御物語聞え給ふ。「女はただ心ばせよりこそ世に用ひらるるものに侍りけれ」など、人の上宣ひ出でて、「女御を、けしうはあらず、何事も人に劣りてはおひ出でずかしと思ひ給ひしかど、思はぬ人に押されぬる宿世になむ世は思ひの外なるものと思ひ侍りぬる。この君をだに、いかで思ふさまに見なし侍らむ。春宮の御元服只今の事になりぬるをと人知れず思ひ給へ心ざしたるを、かういふ幸人の腹の后がねこそ、又おひすがひぬれ。立ちいで給へらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」と打歎き給へば、「などかさしもあらむ。この家にさる筋の人出で物し給はでやむやうあらじ、と故おとどの思ひ給ひて、女御の御事をも居立ち急ぎ給ひしものを、おはせましか

斯くもてひがむる　源氏もこんな非道い目にあはせる事もなさらなかつたでせうに。

太政大臣　源氏。

そばめ給へる　横を向かれたその横顔。河内本「そばみ給へる」がよい。

取由の手つき　左手で絃を押す手つき。

搔合せ　琴の手。

律の調べのなか〳〵　律の調べは秋のものであるが、冬に聞くと却つて粋（いき）に聞えるの意。

風の力　文選豪士賦序「落葉俟微飈以隕、而風之力蓋寡、孟嘗遭雍門而泣、琴之感以末」

なほ遊ばさむや　もつとお彈きになりませうかと大宮に勸めて。

秋風樂　盤渉調、律、嵯峨帝の御代に常世乙魚、大戸淸上が作つたといふ。一說卷一、二七七頁。

皆さま〳〵　河内本が宜しい。雲井雁と内大臣とそれ〳〵に。

ば、斯くもてひがむる事もなからまし」など、この御事にてぞ、太政大臣を恨めしげに思ひ聞え給へる。姫君の御さまの、いときびはにうつくしうて、箏の御こと弾き給ふを、御髪のさがりば、かんざしなどの、あてになまめかしきをうちまもり給へば、恥ぢらひてすこしそばめ給へる側目つらつきうつくしげにて、取由の手つき、いみじう作りたる物の心地するを、宮も限りなくかなしと思したり。搔合など弾きすさび給ひて、押しやり給ひつ。おとど和琴引寄せ給ひて、律の調べのなか〳〵今めきたるを、さる上手の亂れて搔い弾き給へる、いと面白し。お前の梢ほろ〳〵と殘らぬに、老御達など、此處彼處の御几帳のうしろに頭をつどへたり。「風の力けだしすくなし」とうちずじ給ひて、「琴の手ならねど、怪しく物あはれなる夕べかな。なほ遊ばさむや」とて、秋風樂に搔き合せて唱歌し給へる聲、いと面白ければ、皆さま〳〵、おとどをもいとうつく

御几帳隔てて　雲居雁の居る方を几帳で仕切つて。

ざえの程　才學が身の程に過ぎて居るのもつまらない事だと源氏も御存じであるのに、かうまでさせようと考へてゐられるのは、何か仔細があらうとは思ひますが。

笛の音にも　學問に限らず、笛の音の中にも古の人の道は傳はつてゐるものです。

拍子　笏拍子。笏で拍子をとること。

萩が花ずり　催馬樂更衣「ころもがへせんや、さきんだちや、わがきぬは、野原篠原、萩の花摺や、さきんだちや」

大殿も　源氏もこんな演奏に興味を持つて多忙な政務から遁れて休養なさるのでした。

しと思ひ聞え給ふに、いとど・添へむとにやあらむ、冠者の君参り給へり。「こなたに」とて、御几帳隔てて入れ奉り給へり。「をさ〳〵・對面・もえ賜はらぬかな。など斯くこの御學問のあながちな・・・らむ。ざえの程・、程より餘りぬるもあぢきなきわざとおとども・おぼし知れる事なるを、かくおきて聞・・え給ふ、やうあらむとは思・う給へながら、斯う籠りおはする事なむ心苦しう侍る」・と聞え給ひて、「時々はことわざし給へ。笛の音にもふる・ことは傳は・るものなり」とて、御笛奉り給ふ。いと若うをか・しげなる音に吹き立てて、いみじう・・・・面白ければ、御ことどもをば暫しとどめて、おとどは・拍子おどろ〳〵しからず打鳴らし給ひて、「萩が花ずり・」など謡ひ給ふ。「大殿もかやうの御遊びに心とどめ給ひて、いそがしき御・政事どもをば遁れ給ふなりけり。げに・・あぢきなき世に心の・・ゆくわざをしてこそ過ぐし侍りなまほしけれ」など宣

姫君は　雲居雁を自分のお居間に歸された。内大臣は二人の間を無理に遠ざけて、姫君の御琴の音をさへ聞かせまいと無闇に夕霧を隔てなさるので。

いとほしき事　二人の間にやがてお氣の毒な事が起りさうだ。

近う　大宮のそば近く。

人に物のたまふとて　女房に逢ふつもりで。

かいほそりて　身ぼそになつて身輕な衣裳に着かへて。

かしこがり給へど　内大臣は物の分つた顔はしていらつしやるが失張親馬鹿ですね。

子を知るは　雄略紀二十三年七月條「古人有レ言、知レ臣莫レ若レ君知レ子莫レ若レ父」續紀光仁帝天應元年四月三日の詔「古人有言、知子者親止云奈毛聞食」管子大匡篇「鮑叔曰先人有レ言曰、知子莫レ若レ父、知レ臣莫レ若レ君」史記李斯傳「明君知レ臣、明父知レ子」

思ひ寄らぬ事には　氣付かぬ事ではなかつたが。

ひて、御土器参り給ふに、暗うなれば、おほ・殿油参り、御湯漬くだものなど誰も〳〵聞召す。姫君はあなたに渡し奉り給ひつ。強ひてけどほくもてなし・・給ひ、御ことのねばか・・・りをも・聞かせ奉らじと、今はこよなく隔て聞え給ふを、「いとほしき事・ありぬべき世なるにこそ」と近う仕うまつる大宮の御方のねび人ども・ささめきけり。

おとど出で給ひぬるやうにて、忍びて人に物のたまふとて立ち・・給へりけるを、やをらかいほそりて出で給ふ道に、斯かるささめきごとをするに、怪しうなり給ひて、御耳とどめ・・給へば、わが御うへをぞいふ。「かしこがり給へど、人の・親よ。おのづからおれたる事こそ出でくべかめれ。子を知るはといふは、そらごとなめり」などぞつきしろふ・。あさましくもあるかな、さればよ、思ひ寄らぬ事にはあらねど、いはけなき程にうちたゆみて、世は憂きものにもありけるかな、と氣色をつぶ

つぶと心得給へど、音もせで出で給ひぬ。御さき追ふ聲のいかめしきにぞ、「殿は今こそ出でさせ・・給ひけれ。・・いづれの隈におはしましつらむ。今さへ斯かる・あだけこそ」・といひあへり。さゝめきごとの人々は、「いとかうばしきか・・のうちそよめき出でつるは、冠者の君のおはしましつるとこそ思ひつれ。あなむくつけや。しりうごとやほの聞召しつらむ。煩はしき御心を」とわびあへり。殿は道すがらおぼすに、いと口惜しく・あしき事にはあらねど、珍らしげなきあはひに世・の人も思ひいふべきこと、おとどの、・・・强ひて女御を・・・押し沈め給ふもつらきに、わくらはに人にまさる事もやとこそ思ひつれ、ねたくもあ・・る・かな、とおぼす。殿の御なかの、大方に・は昔も今もいとよくおはしながら、かやうの方にては・、挑み聞え給ひし名殘もおぼし出でて、・・心憂ければ、ねざめがちにてあかし給ふ。「大宮もさやうの氣色は御覽ずらむものを、世になくかな

いづれの隈に　どこの隱妻の所へ行かれたであらうか。

あだけ　浮氣事。

冠者の君の　夕霧のお歸なのかと思ひました。

煩はしき　内大臣は氣むづかしい御氣性なのに。

いと口惜しく　夕霧と雲居雁とは不似合なわるい中といふではないが、從兄妹でよくある關係だと世人も噂する事だらう。

故左大臣＝大宮
　├内大臣＝前北方──雲居雁
　└葵上＝源氏──夕霧

强ひて女御を　源氏が秋好を后に立てて强ひて弘徽殿を壓倒なさるのも恨めしいが。

挑み聞え給ひし名殘　競爭なさつた昔の感じが今も殘つてゐるのも。

さやうの氣色は　夕霧と雲居雁との中は御存じだらうに。

しうし給ふ御うまごにて、まかせて見給ふならむ」と、人々のいひし氣色を・、・・・めざましう・・・ねたしとおぼすに、御・・心動・・きて、すこし雄々・しうあざやぎたる御心には、・・・しづめがたし。

二日ばかりありて參り給へり。しきりに參り給ふ時は、大宮もいと御心ゆき嬉しきものにおぼいたり。御尼額引繕ひ・、うるはしき御小袿など奉り添へて、子ながらも恥かしげにおはする人ざまなれば、まほならずぞ見え奉り給ふ。おとど御氣色あしくて、「此處にさぶらふもはしたなく、人々いかに見侍らむと心おかれにたり。はか〴〵しき身に侍らねど、世に侍らむかぎり、御目かれず御覽ぜられ、おぼつかなき隔てなくとこそ思ひ給ふれ。よからぬものの上にて、・・恨めしと思ひ聞えさせつべき事の出でまうで來たるを、かうも思う給へじとかつは思う・給ふれど、なほしづめがたく覺え侍りてなむ」と・、涙おしの

あざやぎたる　事をはつきりしすぎる御氣性故。

御尼額　尼そぎの額髮。尼は髮を肩のあたりで切り揃へて其儘さげて居る。それを尼そぎ又はさげ尼ともいふ。

おぼつかなき隔て　親しくして居たいと思ふのです。

かうも思う給へじ　さう恨めしいとは思ふまいと一方では思ひ直して見ますけれども、矢張辛抱出來ないやうな氣が致しまして。

今更の　どういふ事の爲に、今更この老年の私にわけへだてをなさるのでせう。

頼もしき御蔭に　母上をお頼り申して置きまして、私は却つてあの子の幼少の折から馴染みもせず、差當り弘徽殿の宮仕などの思ふやうにならぬのを歎きもがいて居つて。

さりとも人となさせ　雲居雁の方はいくら何でも母上が立派な者に育てあげて下さる事と當にして居ましたに。

誠に天の下に　夕霧は實際天下無双の物識りでありませうが。

あはつけきやうに　無分別なやうに物の數ならぬ人々の間でも考へて居るのですから。

さし離れ　血族的關係のない立派な感興の新しいやうな家庭に聟となつて。

ゆかり睦び　近親結婚は穩かでないと源氏も聞きもし思ひもなさる所がありませう。

さるにても　それはさうと、かうする積りだと私にお知らせ下さつて、我々から仕向けた結婚のやうに體面を作つて、多少結婚に位をつけてこそ然るべきでせうが。

ごひ給ふに、宮(大宮)けさうじ(化粧)給へる御顔の色たがひて、御目も大き(驚いたさま)になりぬ。大宮「いかやうなる事にてか、今更の齢の末に、心おきては・おぼさるらむ」と聞え給ふも、さすがにいとほしけれど、内大臣「頼もしき御蔭に(雲居雁の幼少の折から)をさなき者を(雲居雁の事)奉りおきて、みづからはなかなかをさなくより見給へも・つかず。まづ目に近きまじらひ(弘徽殿の宮仕の事)など(しこ)・・、はかばかしからぬを見給へ・歎きいとなみつつ、さりとも人となさせ給ひてむと頼みわたり侍りつる・・に、思はずなる事の(夕霧と雲居雁との戀)侍りければ、いと口惜しう(く)なむ。誠に天の下・(に)ならぶ・・(べき)人なき有職(いうそく)には・物せらるめれど、親しき程に斯かるは(近親の間で結婚することは)、人の聞き思ふ所(事)もあはつけきやうになむ何ばかりの程にもあらぬ(なき・・こ)なからひにだにし・侍るを、かの人の御ためにも(夕霧の爲にも)、いとかたはなる事なり(見苦しい)。さし離れ、きらきらしう珍らしげあるあたりに、今めかしうも(花やかにとりもつてもらふのが興味がある)てなさるるこそをかしけれ。ゆかり睦びねぢけがましきさまに、・て(源氏)おとども聞き・・おぼす所(事)侍りなむ。さるにても、斯かる事な

をさなき人々の　幼い二人の自由にまかせてほつておかれるのが面白くないのです。

げにいと口惜しき事は　そんな事があつたとすれば、誠に殘念な事だと私の方が一層歎かねばならぬ事なのです。

もろともに罪を　私迄も一緒にして罪を著せられるのは恨めしい。

そこに　あなたの氣付かぬ事でも立派に仕上げようと内々心掛けて居りました。

物げなき程を　幼い二人を、可愛さに心が暗んで、いそいで一緒にしようとは思ひも寄らぬ事です。

人の言につきて　人の言葉を信じて。

む・と知らせ給ひて、殊更にもてなし、すこしゆかしげ(な)ある事を・ま(さい)ぜてこそ侍らめ。をさなき人々(夕霧と雲居雁と)の心にまかせて御覽じ放ちけるを、心憂く思う・給ふる」と聞え給ふも、(大宮は)夢にも(に)知り給はぬ事なれば、あさましうおぼして、大宮「げに斯う(く)宣ふもことわりなれど、かけてもこの人々の(夕霧と雲居雁との)、下(した)の心・(を)なむ知り侍らざりける。げにいと口惜しき事・(と)は、ここにこそまして歎くべく(う)侍・・(りけ)れ。もろともに罪をおほせ給ふは、恨めしき事になむ。見奉りしより(雲居雁を預った前から)、心殊に(特別に注意して)思ひ侍りて、そこにおぼしいたらぬ事(よこ)をも・、すぐれたるさまにもてなさむとこそ人知れず思ひ侍・・(りこ)れ。物げなき程を心の闇に惑ひ・・(侍り)て、急ぎ物せむとは思ひ・(も)寄らぬ事になむ。さても誰かは斯かる事はきこえ・・(侍り)けむ。よからぬ・・(世の)人の言(こと)につきて、きはだけく(大袈裟に考へもし仰しやりもするのも)おぼし宣ふもあぢきなく、むなしき事に(無實な事の爲に雲居雁の名)て、人の御名やけがれむ(折れにもなる事でせう)」と宣へば、内大「何の浮きたる事(根のない事ではない)にか侍らむ。さぶらふめる人々(侍女達も)も、かつは皆・・(そしり)もどき笑ふべかめる

ものを(は)、いと口惜しく、安〔不快に〕からず思ひ給へらるるや」とて立ち給ひぬ。心知れる人(どち)は、いみじういとほしく思ふ。一夜(ひとよ)のしりうごと〔後言〕の人々は、まして心地もたがひて、「何(し)に斯かる睦(むつ)物語をしけむ」と、思ひ歎きあへり。姫君〔雲居雁〕は何心もなくておはするに、さし〔内大臣が〕のぞき給へれば、いとらうたげなる御さま〔雲居雁のさま〕を、あはれに(口惜しく)見奉り給ふ。内大「若き人といひながら、心をさなく物し給ひけるを知らで、いと斯く(かで)人なみ〳〵にと思ひける、我こそまさりてはかなかりけれ」とて、御乳母どもを(も)さいなみ(の)たまふに、〔乳母達は〕聞えむ方なし。乳母「かやうの事は、限りなき御門の御〔御秘藏の姫宮でも〕いつきむすめも、おのづからあやまつ〔間違をしでかす例は〕ためし、昔物語にもあめれど、〔樣子を知つて橋渡しする人が〕氣色を知り傳ふる人、さるべきひまにてこそ(は)あらめ。これは、あけくれ立ちまじり給ひ(う)て年頃おはしましつるを、何かは、〔何で幼いお二人を大宮のお取扱を差越してまでも私どもで引放す事が出來ませうと〕いはけなき御程を、宮の御もてなしよりさし過ぐ(ぎこ)してもて(て)隔て聞えさせむと打解けて過ぐし聞えつるを、一昨年(をととし)ばか

立ち給ひぬ 内大臣が歸られた。

心知れる人は 事情を知つて居る女房達は。

心地もたがひて 氣もちがふ心地で。

睦物語 打解話。三一五頁にあつた事。

いと斯く人なみ〳〵に 人並々に出世するやうにと願つて居たのは、私こそ御身以上になさけない人間でした。

さるべきひまにて 然るべき隙を覗つての事でせう。所が御兩人樣の事は年來一緒に暮して居られたのだもの。

打解けて過ぐし聞えつるを お親しいまゝにおさせ申して來ましたが。

りよりは、けざやかなる御もてなしになりにて侍るめる(き)に、若き人とても、うちまぎれ(ざ)ばみ、いかにぞや世づきたる人もおはすべかめるを、夢〔夕霧は〕に亂れたる所(心なく何れも)おはしまさざめれ(へこ)ば更に思ひ寄ら(も)ざりけること」と、〔乳母達同志〕おのがどち歎く。内大「よし、暫し斯かる事漏らさじ。隠れあるまじき事(け)なれど、心をやりてあらぬ事とだにいひなされよ。今かしこに〔雲居雁を私方に引取らう〕渡し奉りてむ。宮〔大宮〕の御心のいとつらきなり。そこたち〔乳母達をさしていふ〕は、さりとも、いと斯かれ〔かうなるやうにとは〕としも思はれざりけむと宣へば、〔乳母達心〕いとほしきなかにも、嬉しく宣ふと思ひて、乳母「あないみじや。大納言殿に聞き給はむ事をさへ思ひ侍(うたまふ)れば。(いつしかすぐれたるさまにてとこそ念じ聞えさせ侍れ)めでたきにても、ただびと〔臣下〕の筋(にて)は、何の珍らしき(び)にか思う(ひ)給へかけむ」と聞ゆ。姫君〔雲居雁〕はいと〔知識も幼稚であつて〕をさなげなる御さまにて、よろづに申し給へ(ふ)ども、〔おわかりにはならないから〕かひあるべきにもあらねば、〔内大臣〕打泣き給ひて、「いかにしてか(は)、〔雲居雁が何にもならぬ廢物となられないやうにしたいものだ〕いたづらになり給ふまじきわざは

けざやかなる お二人の間もきつぱり區別したお取扱になつて居るやうですが。

若き人とても 若い女房でも人目を忍んでどうやら色めいた事をする人もあるやうでございますが。

夢に亂れたる所 少しも取亂した態度があらせられないやうでございます故。

隠れあるまじき どうせ隠れなく知れ渡る事だらうが。

心をやりて 朗かに。心配さうな顔したら、露顯するからまるで氣にかけないやうな顔してをれといふ意。「心をやりて」を從來分別してと解いてゐるがさう解くべき語ではない。

あらぬ事とだに 影もない事となりとも。「だに」は今更仕方がないからせめてはの義。

大納言殿に 雲居雁の繼父按察大納言の聞えをさへ心配して居るのですもの、まして他の人々に漏らすやうな事を致しませうや。

何の珍らしきにか 新しい感興をひくやうな御結婚とは思ひも致しませぬ。

よろづに 内大臣がいろ〳〵説き聞かされるけれども。

宮は　大宮はどの孫達をも愛して居られる中にも。
斯かる心の　夕霧が雲居雁に心を寄せて居たのをさへ可愛く思つて居られるのに、それを内大臣が無情にもけしからぬ事のやうに思ひもし仰しやりもするので、なあにそんなにいはれる事はない、内大臣はもと／＼雲居雁を大して心にかけもせずに、かうまでお世話しようとは思はれなかつたのを。
ただびとの宿世あらば　臣下に縁付ける因縁があらば。
これより　夕霧を雲居雁より高い女と結婚させたい。
及びなからむきはにも　手もとどかないやうな身分即ち皇女にも結婚させたいと思つてゐます。「思へと」のとは「といつて」の意で「うらめしう思ひ聞え給ふ」につゞく。
冠者の君　夕霧が大宮方に。

すべからむ」・(な)と、忍びてさるべき(然るべき女房達と相談して)どちのたまひ・て、大宮をのみ・(ざ)恨み聞え給ふ。宮はいといとほしと思すなかにも、男君の(夕霧を特別に)御かなしさ(愛してゐられるのか)はすぐれ給ふ・(へる)にやあらむ、斯かる心のありけるもうつくしう思さるるに、情(なさけ)なくこよなき事のやうにおぼし・(思ひこ)宣へるを、など(大宮心)かさしもあるべき、もとよりいたう(く)思ひつき給ふこと・(も)なくて、かくまでかしづかむともおぼし立たざりしを、わが斯くもてなしそめたればこそ、春宮の御事を(入内の事を)・もおぼしかけためれ、とりはづして(罷り間違って)、ただびとの宿世あらば、この君(夕霧)よりほかにまさるべき人やは・・(ある)。かたち(夕霧の事)有様よりはじめて、ひとしき人・・(だに)あるべきかは。これより及びなからむきはにもとこそ思へと、わが・(御)志(夕霧に對する愛が深い爲か)のまさればにや、おとど(内大臣)を恨めしう思ひ聞え・・(させ)給ふ御心(大宮の)のうちを見せ奉り(内大臣に)たらば、まして(内大臣は)いかに恨み聞え給はむ。かく騒がるらむ・・とも知ら・・(り給は)で、冠者(くわさ)の君まゐり給へり。一夜

ゆかしげなき事を　いとこ同志の結婚などいふおもしろみのない事を思ひついて、私に心配をかけなさるのが心苦しいのです。
さる心も　かうした事情をも御存じがあるまいと思つて一寸お耳に入れておくのです。
恨み給ふべき事　大臣が私をお恨みになる事はあるまいと思ひますが。
物まゐりなどし給へど　大宮は食事なさつたが、夕霧は少しも食事なさらないで。

も人目しげうて、思ふ事をもえ聞え(雲居雁に)ずなりにしかば、常よりも・あはれに覺え給ひければ、夕つがたおはしたるなるべし。宮(大宮)、例はいひ知ら(ぜ)ずうちゑみて待ち喜び給ふを、まめだちて(今夕は)物語など聞え給ふついでに、(大宮)「御事(御身の事で)により、内のおとどのゑんじて物(出)し(で)給ひにしかば、いとなむいとほしき。ゆかしげなき事をしも思ひそめ給ひて、人に物思はせ給ひつ・(ふこ)べき・・(かめる)が心苦しきこと。かうも・聞えじと思へど、さる心も知り給はでやと思へばなむ」と・・・・・聞え給へば、心に・(も)かかれ・る事の筋なれば、(夕霧は)ふと思ひ寄りぬ。おもて赤みて、(夕霧)「何事にか侍らむ。静か(大學寮に引籠って後)なる所に籠り侍りにしのち、ともかくも人にまじる(人と交際する)折な(事)ければ、恨み給ふべ・・き事侍ら・・(いと)じとなむ思う・給ふる」とて、いと恥かしと思へる氣色を、あはれに(大宮心)心苦しうて、(大宮)「よし、今より(今からなりとも)だに用意し給へ」とばかりにて、他事(ことごと)にいひなし給ひつ。いとど(夕霧心)文なども通はむことの難・・(かべ)きなめりと思ふに、いと歎かし・(う)。物・・(など)まゐりなどし

中障子　雲居雁の居る部屋との隔ての襖障子。

をさなき心地にも　雲居雁は無邪氣な心にも、色々思ひ亂れるのでもあらう。

雲居の雁もわがごとや　伊行釋「霧深き雲居の雁もわがごとや晴れせず物の悲しかるらむ」この歌によつて姫君を雲居雁といふ。

御乳母子　小侍從といふのは姫君の乳母子である。

あいなく　つまらぬ事に顏をかくしたところで何にもならぬのにの意。

あはれは　いくらかくれても、「哀れ」は姫君の所在を知つてゐて、姫君をなやますのが憎いの意。こゝの「哀れ」は戀心である。

さ夜中にの歌　夜中に友を呼びながら空ゆく雁の聲が物悲しく聞える所へ、荻の葉を渡る風が吹き添うて淋しい。

身にもしみけるかな　歌の「荻の上風」からいひつゞけた書きかたである。即ち荻の上風が身にしみるの意。續古今秋上友則秋「吹きよれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな」

給へど、更にまゐらで、寢給ひぬるやうなれど、心も空にて、人しづまる程に、中障子を引けど、例は殊にさしかためなどもせぬを、つとさして、人の音もせず。いと心細く覺えて、障子に寄りかかりて居給へるに、女君も目をさまして、風の音の竹に待ち取られて、うちそよめくに、雁の鳴きわたる聲のほのかに聞ゆるに、をさなき心地にもとかくおぼし亂るるにや、「雲居の雁もわがごとや」と獨りごち給ふけはひ、若うらうたげなり。いみじう心もとなければ、「これあけさせ給へ。小侍從やさぶらふ」と宣へど、音もせず。御乳母子なり。獨言を聞き給ひけるも恥かしうて、あいなく御顏引き入れ給へど、あはれは知らぬにしもあらぬぞ憎きや。乳母達など近く臥して、うちみじろくも苦しければ、かたみに音もせず。

さ夜中に友呼びわたる雁がねにうたて吹きそふ荻のうは風

身にもしみけるかな、と思ひつづけて、宮のお前に歸りて歎き

かの御方ざまへも　姫君のお部屋の方へもえ行かず、胸が破れるやうな心地でゐられる。

打語らふさま　乳母達が兩人の事について談じあつて居るさまなどをも、いやな事とも嫌つて居なかつた。

かく騷がるべき事　夕霧とあつたことは、こんなに問題にされるやうな事ともおもはれなかつた。

今すこし　夕霧は姫君よりも年下だから。

斯かる事なむと　雲居雁の一件は少しも知らせない。

只大方　只何となく不機嫌な樣子で。

がちなるも、御目さめてや聞かせ給ふらむとつつましく、みじろき臥し給へり。あいなく物恥かしうて、わが御方に疾く出でて、御文書き給へれど、小侍從にもえあひ給はず、かの御方ざまにもえいかず、胸つぶれて覺え給ふ。女はた騷がれ給ひし事のみ恥かしうて、わが身やいかがあらむ、人やいかが思はむ、とも深くもおぼし入れず、をかしうらうたげにて、打語らふさまなどを、うとましとも思ひはなれ給はざりけり。又かく騷がるべき事ともおぼさざりけるを、御後見どももいみじうあはめ聞ゆれば、えことも通はし給はず。大人びたる人やさるべきひまをも作り出づらむ、男君も今すこし物はかなき年の程にて、只いと口惜しうのみ思ふ。

おとどは、そのままに參り給はず、宮をいとつらしと思ひ聞え給ふ。北の方には、斯かる事なむと、氣色も見せ奉り給はず。只大方いとむつかしき御氣色にて、「中宮の、よそほひ殊

女御　内大臣の女。

まかでさせ　女御を退出させて氣樂に休養させてあげませう。

さすがに　「世の中思ひしめりて」とあるをうけて、氣をくさらしてゐられるやうな事情ではあるが、さすがに天子の御寵愛は衰へないでの意。

うへにつと　女御は主上のお側に附ききりで居られるから。

宮に預け奉りたる　雲居雁は大宮に預けてあるので安心のやうですが。

俄に渡し　急に雲居雁を手許に引取られた。

一人物せられし　一人娘の葵上が亡くなつたからは。

思ひの外に　意外にもあなたが私を疎外なさるのも恨めしくて。

にて參り給へるに、女御の、世の中思ひしめりて物し給ふを、心苦しう胸痛きに、まかでさせ奉りて、心やすくうち休ませ奉らむ。さすがに、うへにつとさぶらはせ給うて夜晝おはしますめれば、ある人々も心ゆるびせず、苦しうのみわぶめるに」と宣ひて、俄にまかでさせ奉り給ふ。御いとまも許されがたきを、うちむつかり給うて、うへはしぶ〳〵に思召したるを、強ひて御迎へし給ふ。内大「つれ〴〵に思されむを、姫君わたして、諸共に遊びなどし給へ。宮に預け奉りたる、うしろやすけれど、いとさぐじりおよずけたる人立ちまじりて、おのづからけぢかきも、あいなき程になりにければなむ」と聞え給ひて、俄に渡し聞え給ふ。」宮いとあへなしと思して、大宮「一人物せられし女子亡くなり給ひてのち、いとさう〴〵しく心細かりしに、嬉しうこの君を得て生ける限りのかしづきものと思ひて、明暮につけて、老いのむつかしさも慰めむとこそ思ひつれ。思ひの

心に飽かず　私は不滿に思つて居る點を、その通りに正直に申上げただけの事です。

内にさぶらふが　禁中に居る弘徽殿が。

くつし　屈し。ふさぎこんで。

此頃まかでて　只今里歸りしてゐますが徒然で退屈して居ますので。

あからさまに　河内本の如く「あからさまに物し侍る。かうまではぐくみ」とあるべきである。

かうおぼし立ちにたれば　一旦かうと思ひ立つたら、とめても思ひ返される内大臣の御氣性ではないので。

人の心こそ　いやなものは人の心です。

我に隔てて　私にないしよにしていやらしい事でした。

又さもこそはあらめ　幼稚な者達があのやうに私を疎外したにしても、萬事世間の事を心得てゐなさるあなたが私を恨んで。

外に隔てありて思しなすもつらくなむ」と聞え給へば、うち畏まりて、内大「心に飽かずおもう給へらるる事は、しかなむ思う給へらるるとばかり聞えさせしになむ。深く隔て思う給ふる事はいかでか侍らむ。内にさぶらふが、世の中うらめしげにて、此頃まかでて侍るに、いとつれ〴〵に思ひてくつし侍れば、心苦しう見給ふるを、もろともに遊びわざをもして慰めよと思ひ給へてなむあからさまに物し侍る」とて、「はぐくみ、人となさせ給へるを、おろかにはよも思ひ聞えさせじ」と申し給へば、かうおぼし立ちにたれば、とどめ聞え給ふとも、おぼし返すべき御心ならぬに、いと飽かず口惜しうおぼされて、大宮「人の心こそ憂きものはあれ。とかくをさなき心どもにも、我に隔ててうとましかりける事よ。又さもこそはあらめ、おとどの、物の心を深う知り給ひながら、我をゑんじて、斯くゐてわたし給ふこと。かしこにて、これよりうしろやすき事も

いささかのひまもやと　少しでも雲居雁に逢ふ隙もやと。

心の鬼に　脛に傷持つ身は内大臣にあふのがきまりわるくて。

わが御方　三條の宮における夕霧の部屋。

異御腹なれど　内大臣の腹ちがひの兄弟ではあるが。

その御子ども　大宮には孫であるから。

今の程に内に參り　一寸參内して夕方雲居雁をお迎へに參りませう。

あらじ」と、うち泣きつつ宣ふ。もしいささかのひまもやと、此折しも冠者の君まゐり給へり。此頃は•繁うほのめき給ふなりけり。内のおとどの御車のあれば、心の鬼にはしたなくて、やをら隠れ••て、わが御方に入り居給へり。内の大殿の君だち、左•の少將、少納言、••、兵衛佐、侍•從、大夫••などいふも、皆此處には參りつどひたれど、御簾の内は許し給はず。左衛門督、權中納言なども、異御腹なれど、故殿の御もてなしのままに、今も參り仕うまつり給ふ事ねんごろなれば、その御子どもも、さま〴〵•參り給へど、この君に似る匂ひなく見ゆ。大宮の御志も、なずらひなくおぼしたるを、只この姫君を••ぞけぢかうらうたきものにおぼしかしづきて、御かたはらさけず、うつくしきものに•••思したりつるを、かくて渡り給ひなむがいとさう〴〵しき••事をおぼす。殿は「今の程に内に參り侍りて、夕つ方•迎へに參り侍らむ」とて

いふかひなき事を　内大臣は、どうせ仕方のない事だから、穩便にいうて、姫君を夕霧に許さうかしらと思はれるが、それでもやはり不快なので。

人の御程の　夕霧がすこし出世したら、その事實によつて一人前の男と信じて、その時の愛情の深淺の動きを見定めて。

此處にも彼處にも　四君にも大宮にも、女御のお相手にといふ口實で雲居雁を引取られた。

宮の御文にて　大宮から雲居雁への手紙には。

出で給ひぬ。いふかひなき事を、なだらかにいひなして、さてもやあらましとおぼせど、なほいと•••••心やましければ、人の御程の、すこし物々しくなりなむに、かたはならず見•なして、その程、志の深さ淺さのおもむきをも見定めて、許すとも、殊更なるやうにもてなしてこそあらめ、制し諫むとも、一ところにては、をさなき心のままに、見苦しうこそあらめ、宮もよもあながちに制し宣ふことあらじ、とおぼせば、女御の御つれ〴〵にことつけて、此處にも彼處にもおいらかにいひなして、渡し給ふなりけり。宮の御文にて、「おとどこそ恨みもし給はめ、君はさりとも志の程も知り給ふらむ。渡りて見え給へ」と聞え給へれば、いとをかしげに引きつくろひて渡り給へり。十四になむおはしける。かたなりに見え給へど、いと子めかしうしめやかに、うつくしきさまし給へり。「かたはらさけ奉らず、あけくれのもてあそびものに思ひ聞えつるを、••••

さう〴〵しくも　これからあなたが居なさらなくなれば。

恥かしき事を　かうして別れねばならないのも夕霧故と思へば雲居雁も恥しくて。

同じ君とこそ　あなた樣をも若君と同じ事に思つて居りましたのに、お引越し遊ばすのが殘念でございます。

人の御宿世々々の　緣といふものは分らぬものだ。

物げなしと　殿は若君を一向な者と御輕蔑なさるのでせう。

わが君や　私の主人（夕霧）が人に劣つておいでになるか聞合せて頂きたいものです。

・・さう〴〵しくもあるべきかな。殘りすくなき齡の程にて、御有樣を見果つまじき事と命を・・こそ思ひつれ。今更に見捨てて移ろひ給ふやいづちならむと思へば、いとこそあはれなれ」とて・・泣き給ふ。姫君は恥かしき事をおぼせば、顔もたげ給はで、ただ泣きにのみ泣き給ふ。男君の御乳母宰相の君出で來て、「同じ君とこそ頼み聞えさせつれ。口惜しく・・渡らせ給ふこと。殿はことざまにおぼしなる事おはしますとも、さやうにおぼし靡かせ給ふな」などささめき聞ゆれば、いよ〳〵恥かしとおぼして、物も宣はず。「いで、むつかしき事な聞えられそ。人の御宿世々々のいと定めがたく」と宣ふ。「いでや、物げなしとあなづり聞えさせ給ふに侍るめりかし。さりとも、げにわが君や人に劣り聞えさせ給ふ・・と聞召しあはせよ」・と、・なま心やましきままにいふ。冠者の君、物のうしろに入り居て見給ふに、人の咎めむも、よろしき時こそ苦しかりけれ、

宮にとかく　大宮と色々相談の上工面して。

對面　夕霧を姫君に對面させた。

おとどの御心の　内大臣が恨めしいから、引取るなら勝手になさい、諦めてしまはう、とは思つて見ますけれども。

などてすこし　今までは人目の隙もあつただらうに、なぜ逢はずに過した事でせう。

殿まかで給ふ　殿が禁中から御退出の樣樣で。

さもさわがればと　そんなにやかましく云はれるなら云はれてもよろしい。

御乳母　雲居雁の乳母。

いと心細くて、涙・おし拭ひつつおはする氣色を、御乳母いと心苦しう見・て、宮にとかく聞えたばかりて、夕間暮の人のまよひに對面・せさせ・・給へり。かたみに・・・・物恥かしく胸つぶれて、物もいはで泣き給ふ。「おとどの御心のいとつらければ、さばれ、思ひやみなむと思へど、戀しうおはせむこそ・・わりなかるべけれ。などて、すこしひまありぬべかりつる日頃、よそに隔てつらむ」と宣ふさまも、いと若うあはれげなれば、「まろもさこそはあらめ」と宣ふ。「戀しとはおぼしなむや」との・たまへば、すこしうなづき給ふさまも、をさなげなり。御となぶら參り、殿まかで給ふけはひ、こちたく追ひののしる御さきの聲に、人々、「そぞや」などおぢさわげば、いと怖ろしとおぼしてわななき給ふ。男は、さもさわがればと、ひたぶる・に・許し聞え給はず。御乳母參りてもとめ奉るに、氣色を見て、あな心づきなや、げに宮知らせ給はぬ事にはあらざ

めでたくとも 夕霧がいかに立派な方でも姫君の結婚の初に六位風情の人に緣付かれるとは。

めざまし 餘りの仕打だとおもふ。

かれ聞き給へ 夕霧が雲居雁にいひかける詞。

くれなゐの歌 血の涙に深く染まつてゐる私の袖の色を、淺緣色とけなしていゝものでせうか。

色々にの歌 種々の事につけて我身の不幸の思ひ知られるのはどうしたあなたとの因緣なのでせう。「色々」は「染」の緣語。

殿入り給へり 内大臣が邸内に入つて來られた。

御車三つばかりにて 夕霧は内大臣が雲居雁をつれて御車三輛程を連ねて忍びやかに歸つて行かれる音を聞くにつけても。

りけり、」と思ふに、いとつらく・・、（乳母）「いでや、憂かりける世かな。」殿（内大臣のお叱りはいふまでもなく）のおぼし宣ふ事は更にも聞えず、大納言（雲居雁の繼父）殿にもいかに聞かせ給はむ。めでたくとも、物の初めの六位宿世よ」とつぶやくもほの聞ゆ・・。ただこの（この屏風のすぐうしろに）屏風のうしろに・・尋ね來て歎くなりけり。男君（夕霧）、我をば位なしとてはしたなむる（侮辱するのだ）なりけり、と思すに、世の中・・恨めしければ、あはれもすこしさむる（多少興ざめた心地がして）心地して、めざまし。（夕霧）「かれ聞き給へ。

　くれなゐ（五位の袍の色）の涙に深き袖の色を淺みどり（六位の袍の色）とやいひしをるべき

恥・・かし」と宣へば、

　色々に（雲居雁）身の憂き程の知らるるはいかに染めけるなかの衣ぞ

と・宣ひ・果てぬに、殿入り給へり・・。わりなくて渡り給ひぬ（姫君はどうにもかうにもならぬので自分の部屋に）。男君（歸られた）は、立ちとまりたる（跡に取殘された心の内も）心地も、いと人わろく胸ふたがりて、わが御方に臥し給ひぬ。御車三つばかりにて、忍びやかに急ぎ出で給ふけはひを聞くも、しづ心なければ、宮（大宮）のお前より、「參

霜氷の歌 いやなことに霜や氷がはりつめて居るあけがたの空のほのあかりも見えないほどに涙が雨と降つてくる。あけぐれは明けきらうとする前に一時暗くなる、それを「あけぐれ」といふ。

大殿 源氏は今年五節の舞姫を差上げられる。惟光の女を源氏が世話して舞姫にあげるのである。

五節 五節の舞姫。河海「五節は常の年は公卿より二人、殿上人受領より二人、四所也。代始には公卿二人、受領二人、三所也。今年依レ爲二新嘗一若四人五所歟。公卿二人者、按察大納言左衞門督也。殿上人受領者良清惟光也」

東の院 二條院の東院の花散里は。

參りの夜の人々 河内本に「人々の」とあるのがよろしい。「參りの夜」とは曉參とも曉座ともいつて、内々に參る事で、十一月の中の丑の日に行はれる。（公事根源照。）

過ぎにし年 去年は藤壺の諒闇で五節など沙汰やみになつて淋しさの鬱積も加はつて。

り給へ」とあれど、寢たる（夕霧は）やうにて動きもし給はず。涙のみと・まらねば、歎き明して、霜のいと白きに、急ぎ出で（わが學問所へと）給ふ。うち腫れたるまみも、人に見えむが恥かしきに、宮は（大宮が手許に呼び寄せさうな氣が）た召しまつはすべかめれば（するので）、心やすき所にとて急ぎ出で給ふなりけり。道の程、人やりならず心細く思ひつづくるに、空の氣色もいたう曇りて、まだ暗かりけり。

　霜氷うたて結べるあけぐれの空かきくらし降るなみだかな

大殿（源氏）には、今年五節奉り給ふ。何ばかりの御いそぎならねど、わらは・べのさうぞくなど、近うなりぬとて、急ぎせさせ給ふ。東の院には、參りの夜の人々・さうぞくせさせ給ふ。殿には（源氏は全般に亘つて）、大方（ての事を用意し）の事ども、中宮（秋好）よりも、童下仕の料まで、えならで奉れ給へり。過ぎにし年五節などと・まり・しがさうざうしかりし積りも・取り添へ・・・人の心地も、常よりも花やかに思ふべか・める年なれば、所々いど・みて、いといみじくよろづを盡し給

按察の大納言　按察大納言も左衛門督も五節を出される。
うへの五節には　殿上人からあげる五節は。
大納言の　按察大納言が側室腹の娘を奉られるのだもの、あなたが秘藏娘をあげるに何の恥かしい事がありませう。
その日の夕つけて　曉參の事である。
殿にも　源氏も各婦人達に仕へてゐる童女や下仕の中から、すぐれた者を、見くらべて選り出されるので、選ばれた者どもの心地は、身の程々に應じて光榮に感じてゐる。
御前に召して御覽に　主上が御前に召して御覽になる前の下稽古の爲に源氏は自分の前で試演させて見てそれによつて選定された。

ふ聞えあり。按察の大納言、左衛門督、うへの五節には良清、今は近江の守にて左中辨なるなむ奉りける。皆とどめさせ給ひて宮仕すべく仰言ことなる年なれば、娘をおの〳〵奉り給ふ。殿の舞姫は、惟光の朝臣の津の守にて左京の大夫かけたる娘、かたちなどいとをかしげなる聞えあるを召す。からい事に思ひたれど、「大納言の外腹の娘を奉らるなるに、朝臣のいつきむすめ出だし立てたらむ、何の恥かあるべき」とさいなめば、わびて、同じくは宮仕やがてせさすべく思ひおきてたり。舞習はしなどは、里にていとようしたてて、かしづきなど、親しう身に添ふべきはいみじうえり整へて、その日の夕つけて參らせたり。殿にも、御かた〳〵の童下仕のすぐれたるを御覽じくらべ、えり出でらるる心地どもは程々につけて、いとおもだたしげなり。御前に召して御覽ぜむうちならしに、お前を渡らせてと定め給ふ。捨つべう

おぼし煩ひて　取捨に困つて。
今一ところの　もう一人の舞姫に附ける童女達を當方から差上げたい。
胸のみふたがりて　雲居雁の事故に。
物なども　食事なども。
御簾の前にだに　御簾の前にさへ接近する事を源氏は夕霧に許してない。源氏は自分の癖でどういふお積りか、紫上とは疎遠にしてあるので、女房達なども夕霧とは遠々しくして居つたのだが。
舞姫　惟光の女。

もあらずとり〳〵なるわらはべの樣體かたちをおぼし煩ひて、「今一ところの料をこれより奉らばや」など笑ひ給ふ。只もてなし用意によりてぞ選びに入りける。

大學の君、胸のみふたがりて、物なども見入れられず、くつしいたくて、書もよまでながめ臥し給へるを、心もや慰むと、立出でて紛れありき給ふさまかたちは、めでたくをかしげにて、靜やかになまめい給へれば、若き女房などは、いとをかしと見奉る。うへの御方には、御簾の前にだに物近うもてなし給はず。わが御心ならひ、いかにおぼすにかありけむ、うと〳〵しければ、御達なども氣遠きを、今日は物の紛れに入り立ち給へるなめり。舞姫かしづきおろして、妻戸の間に屏風など立てて、假初のしつらひなるに、やをら寄

添ひ伏したり　物の上にうつむきによりかゝつてゐる。

そびやかに　背が高く。

あめにますの歌　細流「天照大神也。宮人、もとは天人也。舞姫を云。我領ずる心をたがへそと也。しめを忘るなとは、標シメしめは物を領するとてのしるし也。神事の折なれば、注連にことよせたる也」盃津「青表紙にはとよわか姫とあり。用之。惟光は攝津守にてあれば、豊若姫は住吉二十二所おはします其内豊若姫と申あり。津の守が嫁なれば住吉の義をいへる。かくてこそ義は能相當すれ」河海「とよをか姫とは五節の舞姫の事也。我物に領じたる所にはしめをさす也。是を神事の時なれば注連木綿によそへていへる也」拾遺神樂「みてぐらは我にはあらずあめにますとよをか姫の宮のみてぐら」天照大神に仕へて居る宮人（舞姫）も、あなたを私のものと思つて居る私の心持を忘れて下さるな。

瑞垣の　拾遺雜戀「少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世より思ひそめてき」

うちつけなりける　初見の仲なのに、「わが心ざすしめ」といひかけられたから、記者が唐突と評したのである。

誰とも　惟光女はそれを誰とも思ひつけない。

淺黄の　夕霧は六位の著る淺黄の袍が不快なので參内もせず。

直衣など　細流「五節の日直衣を着する也。余勘、宇治左府記仁平元年十一月十七日癸丑晴、今夕五節參内、師長未レ蒙下聽二直衣一之宣旨上、束帶參入、似レ無二面目一、乃不二參内一云々。案レ之五節の次、上古は直衣を聽る歟。夕霧も此次に直衣を聽と見えたり」直衣など官位相當ならぬ一風變つた色を聽されて參内された。

淸らなる　河内本に「淺ましき」とあるのがよろしい。餘りだとは思はれるが。

ざれありき給ふ　ふざけまはられる。

五節の參る儀式　花鳥「十一月中丑日舞妓參入（或曉參と云）卽二帳臺出御一、寅日御前試、卯日童女御覽、辰日節會、舞姫進舞、裝束丑日は赤色唐衣、寅日は青色唐衣、辰日青摺唐衣、赤紐、日蔭鬘等也。日青摺は小忌也」

大殿のと　源氏からあげた惟光の女と按察大納言の女とが殊に美しいといつて人々は大騷ぎしてほめてゐる。

物淸げに　惟光の女は綺麗で現代式で、元の姿がわからぬほどに作りあげた姿などが、世に類もなく美しいので、斯く響められるのであらう。

例の舞姫どもよりは　例年の舞姫よりは皆、多少大人びて居つて。細流抄「上古ハ十二三也」

げに心殊なる　前に「宮仕へすべく仰言ことなる年なれば」とあるのによつた語である。

少女子もの歌　あの當時の少女子も年とつたことだらう、あな

りてのぞき給へば、（惟光女は）なやましげにて添ひ伏したり。・・・・・（大きさなど）

ただかの人（雲居雁）の御程と見えて、今すこしそびやかに、様體などの・

殊更び・（て）、・・・（わざと）をかしき所は・・・（げなるさま）まさりてさへ見ゆ。暗け（うて）れ

ばこまやかには見えねど、・・・・・・・・・・・・（おもやうなどまことしうをかしゆな）

・・・（るべし）程のいとよく思ひ出でらるる・・・・（おほえたる）さまに、心移るとはなけれ

ど、ただにも・・（な）あらで、衣の裾を・・・（すこし）引きならし給ふ・（たるを）。（惟光女は）何心

もなく怪しと思ふに。

「（夕霧）あめにますとよをかびめの宮人もわが心ざすしめを忘るな

瑞垣の」と宣ふぞうちつけなりける。（夕霧の）若うをかしき聲なれど、

誰ともえ思ひなされず・・（知らぬは）、なまむつかしきに、（化粧）けさうじ添ふ・（ろ）とて

騷・・（そそ）ぎつる後見ども、近う寄り・（來）て、人さわが・・（繁）しうなれば、い・

・（夕霧心）と口惜しうて、立ち去り給ひぬ。淺黄の心やましければ、内へ

參り・・（るる）給ふ事もせず、物憂がり給ふを、五節にことつけ・・（心かかり給ひ）て、

直衣（まゐるイ）などさま變れる色許されて參り給ふ。（子供々々して）きびはに淸・・（淺ましき）らなるも

のから、まだきに・・・・・・（心地はかりはいみじう）およずけ・・・（すぐし）て、ざれありき（る）

給ふ。（冷泉院）御門より始め奉りて、（夕霧を一通りならず愛してゐられる）おぼしたるさまなべてならず、世

に珍らしき・・（人の）御覺え・・（有樣）なり。

五節の參・（れ）る儀式は、（何れも優劣なく）いづれともなく、（思ひ〳〵に善美の限を盡したのであるが）心々に二なくし給へる

を、舞姫のかたち、大殿の・と大納言殿・とはすぐれたりとめでの

のしる・（を）。げにいとをかしげなれど、（二人とも）・・・・・（匂ひやかに）（巨々しう。おつとりして）ここしううつ

くしげ・・（き）なる事はなほ大殿・（の）には及ぶまじかりけり。物淸げに今

めきて、その物とも見ゆまじうしたてたる様體などの、ありが

たうをかしげなるを、かうほめらる・・（はめでのし）なめ・・（りけ）り。例の舞姫

どもよりは、皆すこし大人びつつ・・（てこ）、（氣のはる）げに心殊なる年なり。・（大）殿

參り給ひて御覽ずるに、昔御目と・（ど）まり給ひし少女の姿を・（先づ）お

ぼし出づ。（節會の當日）辰の日の暮つかた遣はす。（源氏が筑紫の五節のもとに文を）御文のうち思ひやるべし。

（源氏）少女子も神さびぬらし・（む）天つ袖ふるき世の友よはひ經ぬれば（振るに舊きがかけてある）

年月の積りをかぞへて、うちおぼしけるままのあはれを、・（え）忍

たの舊友なる私も年寄つたのだから。「天つ袖」は舞姫の袖の義で、「ふるき」の枕詞。
年月の積りを　長の年月を數へて、心に浮んだ儘の懷しさを、だまつて居れなくて消息なさつた事が、五節の心に興味深く感ぜられるのも、譯もない事だ。一寸したことにも動き易い心を「はかなしや」と評したものである。
かけていへばの歌　五節に關してお言葉いたゞくと、昔君にお逢ひしたのも今日のやうに思はれます。日蔭は蘿のかづらの事。それを日光の意にとりなして、「日光の下の霜」といつて「とけし」の枕詞に用ひたもの。「とけし」も「心をゆるしたのも」の意。「袖に」とは歌語として音數を充たす爲に加へたまでのこと。「かけて」蘿の縁語。
青摺の紙　青摺の料紙も折に似つかはしくて。辰の日には藍で摺つた著物を著る。
まぎらはし　人目に立たぬやうに手跡は變へて書いてある。
草がちに　「草」は漢字の草書に近い假名の一體。平假名よりも草の假名を多く使つて、平假名とまぜて散らし書きにしてある。
人の目とまる　夕霧も惟光の女が目につくにつけても。
あたり近くだに　惟光女は夕霧を。
物つつましき程　きまりわるく思ふ年齡。年若くてすれてゐないこと。

び給はぬ事の・・(ばかり)、をかしう覺ゆる・・(思ひたえぬ)もはかなしや。・・・(暗けれど)・・(御返)
〔五節〕かけていへば今日の事とぞ思ほゆる日蔭の霜の袖にとけしも
青摺の紙よく取りあへて、・・(書き)まぎらはし書い・・たる濃墨、薄墨・・(にて)、草がちにうちまぜ亂れたるも、人の程につけてはをかし〔女の身分に合せては〕・・(かし)と御覽ず(思さる)。冠者の君も(は)、人の目とま・・(とむ)るにつけても、人知れず思ひありき(る)給へど、あたり近く(うも)・・だに寄せず(ら)、いとけけしう〔無愛相にして居る〕もてなしたれば〔ので〕、物つつましき程〔夕霧の事〕の・心(御)には(地)、歎かしうてやみぬ。かたちはしも〔惟光女の器量が氣に入つたので〕いと心につきて、つらき人〔雲居雁の無情を慰める爲にこの娘に逢ひたいと夕霧は思ふ〕の慰めにも見るわざしてむやとおもふ(ほす)。
やがて皆とどめさせ給ひて、宮仕すべき御氣色(く)あり・・けれど、此度はまかでさせて、近江〔良淸の女は〕のは辛崎の祓、津の守・(國の)は難波・(に)といど・(な)みてまかでぬ。大納言・(殿の)も、殊更に參らすべき由・・(せち)に奏せさせ給ふ。左衞門督・・(のなん)、その人ならぬ〔奉るべきでない娘を舞姫にあげてお咎めがあつたが〕を奉りて咎めあ

やがて皆　其儘舞姫達を皆禁中にとどめて宮仕するやうにとの御内意であつたが。
津の守のは　惟光の女は難波で祓する爲にと互に急いで退出した。
大納言も　按察大納言も改めて宮仕に上げる旨を奏して娘を引取つた。
内侍のすけ　典侍缺員の所へ私の娘をと願ひ出たので。
さもや　希望通りに取りなしてやらうかと源氏が考へて居られるといふ事を夕霧は聞かれて。
いと口惜しと　典侍になつては自由にならないから。
わが年の程　夕霧の心。自分の年齢や官位が、微賤でないならば、結婚をも申出て見ようものを、かうした考へを持つて居るとさへ知られずに終るとは、格別どうかうといふ譯ではないが、雲居雁の事につけて涙ぐまれる折々がある。
兄の　惟光の娘の兄弟で童殿上をする人。
男兄弟とて　男の兄弟だからといつて近くも寄せませんから。
さきざき　以前から斯樣な事は父から禁ぜられて居るのにと童は迷惑がるけれども。

りけれど、それもとどめ〔禁中に〕させ給ふ。津〔惟光〕の守(國)は、「内侍のすけあきたる・(所)に」と申させたれば、さもやいたはらましと大殿もおぼいたる(し)を、かの人〔夕霧〕は聞き給ひて、いと口惜しとおもふ(ほす)。わが年の程位など・(の)、かく物げ・・・なからずば、乞ひ見てましものを(など)、思ふ・・・(斯かる)心あり・・(けり)とだに知らでやみなむこと、と、わざとの事・・(へ)には・・(な)あらねど、打添へて涙ぐまるる折々(も)あり。兄の童殿上する・(が)、常にこの君〔夕霧〕に參り仕うまつるを、例〔夕霧が〕よりもなつかしう語らひ給うて、〔夕霧〕「五節はいつか内〔禁中へ〕へは參る」と問ひ給ふ・(へば)。〔童〕「今年とこそは聞き侍れ」と聞ゆ(申す)。〔夕霧〕「顏のいとよかりしかば、すずろにこそ戀しけれ。まし〔汝〕が常に見るらむも羨しき(が)を、又・(は)見せてむや」と宣へば、〔童〕「いかでかさは侍らむ〔そんな事は出來ませぬ〕。心に〔私も〕まかせてもえ見侍らず。男兄弟・(は)とて近く(う)も寄せ侍らねば、まして・・(君たち)・・(は)いかでか君だちには御覽ぜさせむ」と聞ゆ・・(れば)。〔夕霧〕「さらば(こ)文をだに」とて賜へり。さきざき・(も)かやうの事・・(ども)はいふもの

いとほしうて　折角頼まれたのを斷るのも夕霧に氣の毒で。

生ひ先見えて　末の上達も思はれて大層きれいで。

日蔭にもの歌　私があなたに懸想して居つた事は、あなたの方でもはつきり分つて居つた事でせう。蘿を日光にとりなして、日光ではつきりわかつたでせうといつたのである。「かけし」は蘿の縁語。當日蘿の縵をかけるからである。公事根源「昔天武天皇芳野の宮にましまして琴を彈き給ひし時、前の峯より天女天降りて、天の羽衣の袖を五度飜して、少女ども少女さびすと、から玉を袂にまきて少女さびすもと謡ひけるとかや。然るを天平五年五月に、まさしく內裏にて五節の舞はありけるとぞ」

二人　娘と弟と二人で。

誰がぞ　誰の手紙か。

名殘なく　今迄怒つて居つたとは打つて變つて。

この君だちの　夕霧が、娘をすこし人がましく思つて下さるならば。

をと苦し（童の心に）けれど、せめて賜へば（強ひて渡されるので）、いとほしう（く）てもて（文を）いぬ。年の（惟光の女）程（の事）よりはざれて（こましやくれて）やありけむ、をかしと（この文を）見け（る・）り。緑の薄様の好ましきかさねなるに、手は（夕霧の筆蹟）まだいと若けれど、生ひ先見えていとをか・しげ・・に（うつくし）、

　日蔭（夕霧）にもしるかりけめや少女子があまの羽袖にかけし心は

二人見・・る（居た）程に、父ぬし（惟光）ふと寄・・り來たり。怖ろしう・（くて）あきれ（二人は）て、え引き隱さ・（れ）ず。惟「なぞの文ぞ」（どうした手紙です）とて取るに、おもて赤み（二人は）て居たり。惟「よからぬわざしけり・（な）」（けしからぬ事をしたものだ）と・（て）憎めば、せうと・（は）逃げていくを、呼び寄せ・・（とどめ）て、惟「誰がぞ」と・・・（強ひて）問へば、童「殿（源氏）の冠者（夕霧）の君の、しかしか宣ひて賜へる」とい（ふに）へば、名殘なく（惟光は）うちゑみて、惟「いかにうつくしき君（夕霧の事）の御ざれ心・なり。きんぢら・（汝）は、同じ年（夕霧と童と同年）なれど、いふかひなくはかな（幼稚）かンめり・・（かし）」などほめて（夕霧を）、母君（惟光の妻）にも見す。惟「この君だちの、すこし人かずに・（も）思しぬべからましかば、おほぞうの宮仕（平凡な宮仕をさせるより）よりは、奉り（夕霧に）てまし。殿（源氏の氣性を見るに）の御心おき

御心とは　自分の方から見捨てなさる事はないから頼もしい。

皆急ぎ立ちにけり　宮仕にあげる準備をした。

立ちまさる方の　惟光の娘より立ちまさつた雲居雁の事が氣に懸つて。

わりなく戀しき　無闇に戀しい雲居雁の面影に二度と逢へないのかと歎くより外の事はない。

里さへ　雲居雁を思ひ出す種になるので夕霧は里なる三條の宮そのものまでもつらくて又二條院の東院に引籠つて居られた。

西の對　東院の西對に居る花散里に賴んで夕霧を預けられた。

かくをさなき　夕霧の若い今から手なづけておいて大宮の亡後も世話を見て下さい。

ただ宣ふままの　花散里は源氏のいひなり次第になる人故。

斯かる人をも　こんな不器量な女をも父は見捨てなさらなかつたのだなどと思ひ。

てを見るに、見そめ給ひてむ人を、御心とは・・（疎ろけならで）忘れ給ふまじき（かめる）に・こそいと頼もしけれ。明石の入道のためしにやならまし」（例に倣ふ事になるだらう）などいへど、皆急ぎ立ちにけり（た）。かの人（夕霧）は、文をだにえやり給はず（惟光の女の所へ）、立ちまさる方の事し・・心にかかりて、程經るままに、わりなく戀しき・（御）面影に、・・・（起き臥し）又あひ見で・（も）やと思ふよりほかの事なし（それはかり氣にかけてゐる）。宮（祖母大宮）の御もとへも、あいなく（う）心憂くて參り給はず。・・・・・・・（稀々まゐり給うては）おはせし方（雲居雁が）、年頃遊び馴れ・・（給ひ）し所のみ思ひ出でらるる事まされば、里さへ憂く覺え給ひつつ、又（猶）籠りゐ給へり。殿（源氏）はこの西の對（二條院の）・・（の御方）にぞ聞え（夕霧を）あづけ奉り給ひける。源「大宮の御世の殘り（もう長生きもなさるまいから）すくなげなるを、おはさず（せ）なりなむのちも（大宮の死後も）、か・・くをさなき（く）程より見ならは・して、後見おぼせ」と聞え給へば、ただ宣ふままの・（なる）御心にて、なつ（夕霧を）かしうあはれに思ひあつかひ奉り（聞え）給ふ。ほのかになど見奉るに（夕霧が花散里を）も、かたち（花散里を見ての夕霧の心）のまほならずもおはしけるかな、斯かる人をも人・・は

又　數行後の「と思ふ心のうち」とある「思ふ」にかゝる語。

向ひて見るかひなからむも　向きあつてゐる際に見るかひもないやうな醜女も。

斯くて年經給ひにけれど　父は永年花散里と連れ添つて來たが、花散里の器量と性質とを十分御承知の上で、濱木綿の隔てを設けて何かの世話をして、顏を見ないやうにしてゐられるのも。

はまゆふばかり　拾遺戀一人麿萬葉四「み熊野の浦の濱木綿百重なる心は思へどたゞにあはぬかも」の「百重なる」をとつて書いたので、幾重にも目隱し（几帳）をおいてその陰でといふ意味。諸說誤つてゐる。

此處にも彼處にも　夕霧は何處へ行つても、人は誰も美人ばかりだと見馴れて居つたのに、花散里は元々美しくない所へ、すこし年寄つたやうな氣がして。

誹らはしき　けなしたくなるのであつた。

まじる事なう　專心に。

見るも物憂く　六位の裝束などは。

朔日　元日。

思ひ捨て給はざ・・（ぬ物な）りけり・（な）など、（夕霧の反省）わが強ちにつらき人（雲居雁）の御かたちを心にかけて戀しと思ふもあぢきなしや、心ばへのかやう（これよりは花散里のやうに柔和な）に柔かならむ人（氣立の女を）をこそあひ（見・・）思はめ、と・（も）思ふ。又、向ひ・（居）て見るかひなからむもいとほしげ（困る）なり、斯くて年・（月）經給ひに・（ぬ）けれど、殿の・・（今に）さやう（か）なる御かたち・（を）御心と見・・（奉り）給う（は）て、濱木綿（はまゆふ）ばかりの隔てさし隠しつつ、（て・・）何くれともてなし紛はし給ふめるも、うべなりけり、と思ふ心のうちぞ恥かしかり（げな・・）ける。大宮のかたち（尼姿では居られるが）ことにおはしませど、まだ（猶・・）いと清らにおはし（て・・）、此處にも彼處にも、人はかたち・（は）よきものとのみ目なれ・（らひ）給へるを、もとより・（も）すぐれざりける御かたちの、ややさだ過ぎたる心地して、瘦せ〳〵に御髮（みぐし）ずくなるなどが（と）かく誹らはしきなりけり。

年の暮には・、睦月の御裝束（さうぞく）など・・（にも）、宮（大宮）はただこの君一所（夕霧一人の）の御事を、まじる（す・）事なう（く）いそぎ給ふ。・・（いと）あまた（幾重ねも）くだりいと清らにしたて給へるを、見る（夕霧心）も物憂くのみお・（も）ぼゆれば、（夕霧）「朔日など」

などてかさもあらむ　そんな事があるものですか。

口惜しききはの　卑しい身分の人でも。

暫しの事とは　六位でゐるのもほんの當分の事とは思ひますが。

故おとど　葵上の父、夕霧の祖父。元の左大臣。

ひんがしの院にて　父が二條の東院に來られた時のみ父のお側近く參ります。

には、・・・（わざと）必ずしも内（禁中へ）へ參るまじう思ひ給ふる（べきにも侍らぬこ）に、何に斯くいそがせ（用意）給ふらむ」と聞え給へば、（大宮）「などてかさもあらむ（は）。・（怪）・・（しく）老いくづほれ（氣力の盡きた）たらむ人のやうにも宣ふかな」と宣へば・・（聞え給ふ）、夕「老いねど・（も）くづほれたる・（らん）心地ぞするや」と・（打）獨りごちて、うち涙ぐみて居給へり。（大宮の心に）かの事（雲居雁）を思ふならむと、いと心苦しうて、宮もうちひそみ給ひぬ。（大宮）「男は、口惜しききはの人だに・（も）、心をたか（け）うこそつかふなれ。あまりしめやかに（ぎて）、斯く・・な物し給ひそ。何・・（事を）かかう（あな）眺めがちに・（は）思ひ入れ・・給ふべき。ゆゆしう（く）」と宣ふ。夕「何かは。六位など人の・（も）あなづりはべる・めれば、暫しの事とは思う・給ふれど、内（禁中）へ參るも物憂くてなむ。故おとどおはしまさ（せ・こ）ましかば、たはぶれにても人にはあなづられ侍ら・ざらまし。物隔てぬ親（源氏は實の親ではありますが）におはすれど、いとけけしうさし放ちて（父は無愛相に私を遠ざけて居られるので）おぼいた（し）れば、（父の）おはしますあたり（所・こ）に・（も）、た・（は）やすくも參り馴れ・（る事もし）侍らず、・・（ただ）ひんがしの院にてのみなむお前近く・・・（などは）侍る。（花散）對

何事を　何の物思ひもなかつたでせうに。

宿世々々に　それ〴〵の運次第で一人前になりきつてしまへば自然疎略に思ふ人もない譯ですから。

故おとどの　故大臣がほんのもう暫くだけ御存命であつて下さつたら。

限りなき蔭には　此上なき保護者としては故大臣も源氏も同じ事と力にして居ますが、それでも思ふ儘にならぬ事が澤山あります。

世を思ひしめり　悲觀して居られるので。

朔日にも　元日。

大殿は　源氏は參賀もなさらないので。

の御方こそあはれに物し給へ。親今一所おはしまさましかば、何事を思ひ侍らまし」とて、涙の落つるを紛らはし給へる氣色、いみじうあはれなる・・・・・に、宮はいとどほろ〱と泣き給ひて、「母におくるる人は、・・・・程々につけて、さのみこそあはれなれど、おのづから宿世々々に人となり立ちぬれば、おろかに思ふ人もなきわざなるを、・・・・・思ひ入れぬさまにてを物し給へ。故おとどの今暫しだに物し給へかし。限りなき・蔭には、同じことと頼み聞ゆれど、思ふに叶はぬ事の・・多かるかな。内のおとどの・心ばへも、なべての人にはあらずと世の人もめでいふなれども、昔に變る事のみまさりゆくに、命・長さも恨めしきに、生ひさき遠き人さへ、斯くいささかにても、世を思ひしめり給へれば、いとなむよろづ恨めしき世なる」とて泣きおはします。朔日にも、大殿は御ありきしなければ、のどやかにておはしま

良房のおとど　藤原良房が自邸で白馬を見たといふ事は舊記に所見がないと河海に註す。

白馬引き　二條院に白馬を引いて來て御覽になり。河海「十節錄云、正月七日看二白馬一、馬性以レ白爲レ本、天有二白龍一、地有二白馬一、是日見二白馬一、卽年中邪氣遠去不レ來也」

青色　細流「麴塵也」河海「晴儀諸臣着二麴塵袍一、一日當色也」花鳥「靑色の袍の下襲は櫻がさね或は朽葉を着用する也」河海「櫻下襲事、面は普通也、裏は櫻也」

御門は赤色の　河海「西宮記云、內宴之日臣下皆麴塵、主上服二御赤色一、而第一上卿服二同色之袍一、是又例也」

同じ赤色を　細流「かやうの晴の日は第一の公卿は主上と同じ色を着する也」湖月師說「只さへ源は冷に似給へるを、同じ御裝束なれば、いよ〱一つのやうに見ゆる也」

式部の司の　式部省で行ふ文章生の試驗の題に擬して勅題を賜はる。湖月師說「式部のつかさとは式部省の事也。凡入學の衆の中に器あるを、博士是を擧すれば、大學寮にて寮試に史記をよましめて、及第の後、先擬文章に補す。さて式部省にて課試をとづる也。其試には詩もしは賦を作らしむ。及第の人を文章の生に補す。是進士ともいへり。式は御前にて勅題を下されて試みらるゝ事も有。夕霧の君は行幸の次に式部省になずらへ

す。良房のおとど・と聞えける、いにしへの例になずらへて、白馬引き、節會の日は、内の儀式をうつして、昔のためしよりも事添へて、いつかしき御有樣なり。二月の二十餘日・・・・・、朱雀院に行幸あり。花・ざかりはまだしき程・・・・なれば、彌生は故宮の御忌月なり・・。疾くひらけたる櫻・・の色もいと面白ければ、院にも御用意殊につくろひ磨かせ給ひ、行幸に仕うまつり給ふ・・・・上達部、みこたちより始め、心づかひし給へり。人々皆青色に櫻襲を着給ふ。御門は赤色の御ぞ奉れり・・。召しあり・て太政大臣參り給ふ。同じ赤色を着給へれば、いよ〱一つもの・・輝きて見え紛はせ給ふ。人々の・裝束、用意・・、常より殊なり。院もいと淸らにねびまさらせ給うて、御さま用意・・、なまめきたる方に進ませ給へり。今日はわざとの文人も召さず、ただその・ざえかしこしと・聞えたるがくしやう十人を召す。式部の司の試みの題をなずらへて

おくだかき　（前頁より）て御前の試に詩を作りて及第して進士になりてやがて侍從に任じ給ふ也」

おくだかき　甚しく臆病な學生は。

つながぬ船　細流「放島の作文とて中島の人も通はぬ所にやりて詩を作らする也。其故は自然に人に談合などさせじの用也」

まじらひ遊び　閉ぢこもつて學問ばかりしてゐないでも、人と一緒になつて演奏してゐられる筈だのに。

昔の花の宴　桐壺院の花の宴の折、源氏が春鶯囀を舞はれた事を。卷一、三一〇頁參照。

その世の事　源氏は桐壺院の當時を懷しく追憶する。

鶯の　春鶯囀の舞は昔の儘でございますが、むつみ馴れてゐた花の蔭即ち時勢が變つて居ります。

九重を　霞の爲に禁中からかけへだてられてゐる此のわが住處にも、春になつた事を告げて鶯が來て、春鶯囀の舞を見せてくれます。春は來てゐても今日まで春とも知りませんでしたの意に怨みの心がかくされてゐる。

帥のみや　源氏の弟宮で後に螢兵部卿宮と申す。

御題賜ふ。大殿の太郎君の試み・・・(賜はり)給ふべき故なめり。おくだかきものどもは、物も覺えず。つながぬ船に乗りて池に離れいで(行く)て、いとすべなげなり。日やう〳〵くだりて、樂の舟ども漕ぎまひて、調子ども奏する程の山風の響き面白く吹きあはせたるに、冠者の君は、かう(く)苦しき道ならでも、まじらひ遊び(ぶ)ぬべきものを(身)、と・・・(恨めしく)世の中恨めしう覺え給ひけり。春鶯囀舞ふほどに、昔の花の宴の程(日)おぼし出でて、院の御門、「又さばかりの事・(を)見てむや」・(な)と宣はする(ふ)につけて、その世の事あはれにおぼし(思ひ)つづけらる・・・・(るあはれなり)。舞ひ(ひま侍)果つる程に、おとど院に御かはらけ參り給ふ。

鶯のさへづる春(聲)はむかしにてむつれし花のかげぞかはれる

院のうへ、

九重をかすみ隔つるすみか(かきね)にも春と告げくるうぐひすの聲

帥のみや(こ)と聞えし、今は兵部卿にて、今の上に御かはらけ參り給ふ(うて)。

いにしへを吹き傳へたる笛竹にさへづる鳥の音さへ變らぬ

あざやかに奏しなし給へる用意、ことにめでたし。取らせ給ひて、

うぐひすの昔を戀ひて(ふる)さへづるは(り)木傳ふ花の色やあせたる

と宣はする御有樣、こよなく(う)故々しく(う)おはします。これは御わたくしざまに内々の事なれば、あまたにも流れずやなりにけむ。又書きおとしてけるにやあらむ。樂所遠く(ま)て(に)おぼつかなければ、お前に御ことども召す(して)。兵部卿の宮琵琶、内のおとど和琴、箏の御こと院のお前に參り・・(給ひ)て、琴は例の太政大臣賜はり・・(責め聞え)給ふ。さるいみじき上手のすぐれたる(に)御手づかひどもの、盡し給へるねは、たとへむ方なし。唱歌の殿上人あまたさぶらふ。「安名尊」遊びて、次に「櫻人」。月おぼろにさし出でてをかしき程に、中島のわたりに、此處彼處・(に)篝火どもともして、大御遊

いにしへを　昔の聖代の音を其儘吹き傳へてゐる笛の音に、つれて舞ふ春鶯囀も昔に變りませぬ。

うぐひすの　春鶯囀の舞につけて昔の事を追憶するのは、今の御代が昔に劣つて居る爲だらうか。

ゆゑ〳〵しく　奥ゆかしく。

樂所遠くて　奏樂所が遠くて樂の音がはつきり聞き取れないので。

唱歌　合唱役。

安名尊　催馬樂安名尊「あなたふと、今日の尊さや、古へも、はれ。古へも、斯くやありけんや、今日の尊さ。あはれ。そこよしや、今日の尊さ。」

櫻人　これも催馬樂の曲名。二四二頁參照。

大后の宮　弘徽殿大后。朱雀院の御母。
かへさに　主上が歸りがけに大后の方にお立寄になる。
故宮を　主上は藤壺を思ひ出されて。
また〳〵も　又々參上致しませう。
殊更にさぶらひて　又改めて參上致しまして。
歸らせ給ふ響きにも　お歸りになるにつけても。
いかにおぼしいづらむ　一體源氏は昔の事を考へて、どんな風に思つてゐられるだらう。天下を握られる御幸運は壓倒出來るものでなかつたと。

び・・(ども)はやみぬ・・・・・・(めさせ給はぬ程に)。
夜(よ)更けぬれど、かかる序に・(と)、大后(おほきさい)の宮・(の)おはします方をよぎ(素通りに)
て(するのも)とぶらひ聞えさせ・・給はざらむもなさけなければ、(冷泉院御心)かへさに(殿)渡
らせ給ふ。(源氏)おとどももろともに(・御)さぶらひ給ふ。后(大后)待ち喜び給ひ
て、御對面(たいめん)あり。いと(大后のさま)いたうさだ過ぎ給ひにける御・けはひにも、
故宮を・思ひいで聞え給ひ(う)て、かく長く(う)おはしますたぐひも(・有)おは
し(り)けるものを、と口惜しう(く)おもほす。(大后)「今は斯く古りぬるよは(老いこみまして)
ひに、よろづの事忘られ侍りにけるを(すべてを忘れて居りますのに)、いと忝く・・(かく)わたり・・(らせ)
おはしまいたるになむ、更に昔の御世の事おもひ・・(給こ)いでられ侍(け)
る」と、うち泣き給ふ。(冷泉)「さるべき御蔭どもに(父帝や母后などに)おくれ侍りて後
・(は)、春の・・・(暮る)けぢめも、おもう給へわかれぬを、今日なむ慰
め侍りぬる・・(れは)。また〳〵も」と聞え給ふ。(源氏も可然御挨拶申上げて)おとどもさるべきさ
まに聞き(え)て、(源)「殊更にさぶらひて(なむとて)」・・・・・など聞え給ふ。(ゆっくりもせずに)のどやかな
らで(ず)歸らせ給ふ響(ぎし)・きにも、・・(なほ)后の(は)・・なほ胸打騷ぎて、(大后の心)いかに

のどやかに　今は閑散のお身の上だから。
奏せさせ給ふ事ある時々ぞ　後の「御心にかなはぬ時ぞ」と同格語である。
取り返さまほしう　昔の御代に取り返したくて。
くらべぐるしう　大后の御機嫌が取りにくくて辛抱が出來ない程困つておしまひになつた。
進士　文章生ともいふ。式部省の登用試驗に及第した人の資格。三四五頁頭註參照。
年積れる　長年修業してゐる。
秋の司召　京官除目。
かうぶり得て　五位に叙せられて。

おぼし出づらむ、・・(かく)世を保ち給ふべき御宿世(源氏の)は消たれぬもの
にこそ、と古へを悔いおぼす。内侍(朧月夜)のかんの君(み)も、のどやか(しづかに)に
おぼし出づるに、あはれなる事・・(とも)多かり。今も・(猶)さるべき折、
風のつ(源氏との音聞)てに・(て)もほのめき・・(聞え)給ふ事絶えざるべし。后(大后)は、おほ(冷泉院に)
やけに奏せさせ給ふ事ある時々ぞ、・御たうばり(下賜)の年官(つかさ)年爵(かうぶり)、何
くれの事に觸れつつ、御心にかなはぬ時ぞ、命長くて斯かる世
の末を見る・・・(が心憂き)事、と・・・(思し怒り)取り返さ(朱雀院の御代に)まほしう(く)、よろづ
・をおぼしむづかりける。老い(大后は)もておはするままに、さがなさも(口やかましさも)
まさりて、院(朱雀院)もくらべぐるしう堪へがたく(う)ぞ思ひ聞え給ひける。
かくて大學の君(夕霧)、その日の文・・(詩いと)うつくしう作り給ひて、進士(しんじ)
になり給ひぬ。年積れる賢き者ども(大人ども)をえらせ給ひしかども、・及
第の人わづかに三人なむありける。秋の司召(つかさめし)に、かうぶり得て、
侍從になり給ひぬ。かの人(雲居雁)の御事忘るる世なけれど、おとどの(内大臣が雲居雁)
せちに(を)まもり(ほ)聞え給ふもつらければ、わりなくてなどもたいめ(夕霧は無理してまでも逢はうとなさらない)

此處彼處にて あちこちに離れて居つて容易には逢はれぬ山里人などをも。

六條京極 六條御息所時代からの御住居。

四町 保に同じ。平安京の行政區劃上方四十丈を町とし、町四を保と名づけた。

げに過ぐしがたき 如何にも知らぬ顏も出來ない事だとお思ひになつて。

事ども 河內本の「ども」の無いのに從ふべきである。

御としみの事 河海「御賀の事也。年滿ちたるを賀する故也」

んし給はず。御消息ばかりさりぬべきたよりに聞え給ひて、かたみに心苦しき御なかなり。

大殿、靜かなる御すまひを、同じくは廣く見どころありて、此處彼處にておぼつかなき山里人などをも、つどへ住ませ・・むの御心にて、六條京極・わたりに、中宮の・舊き宮のほとりを、・四町を占めて造らせ給ふ。式部卿の宮、明けむ年ぞ・五十になり給ひけるを、御賀の事、對の上おぼし設くるに、おとども、げに過ぐしがたき事ども・・なりとおぼして、さやうの御いそぎも、同じくは珍らしからむ御家居・にてと、・・・・いそがせ給ふ。年かへりては、ましてこの御いそぎの事、御としみの事、樂人舞人の定めなどを、・御心に入れて營み給ふ。經、佛、法事の日の・裝束、祿どもなどをなむ上はいそがせ給ひける。東の院にも、わけてし給ふ事ども・あり。御中らひ、ましていとみやびかに聞えかはし・てなむ過ぐし給ひける。世の中響きゆすれる御

年頃 源氏は年來世間に對しては洽く情深い御心を持つて居られたが、當方に對しては意地わるく、つらく當り、何かにつけて、はきまりの惡い思ひをさせ、召使の人にも、斟酌なく辛い仕打が多いので、さては自分を無情だと心に含んで居られる事があつたのだらうと。

心にくく 奥ゆかしく。

わが家までは そのお蔭が自分の家までは及んで來ないが、名譽の事には思つて居られたのに。

女御の 嘗て姫君が女御として入內される折などにも、源氏が斟酌のない態度であつたので。

八月には 六條院竣功。

未申の町は 西南の一廓は秋好の舊邸故秋好が其儘おいでになる事であらう。

いそぎなるを、式部卿の宮にも聞召して、年頃世の中には・あまねき御心なれど、このわたりをばあやにくになさけなく、事に觸れてはしたなめ、宮人をも御用意なく、うれはしき事のみ多かるに、・・・・つらしと思ひおき給ふ事こそはありけめと、・いとほしくもからくもおぼし・・けるを、かくあまたかかづらひ給へる人々多かる・なかに、取りわきたる御思ひすぐれて、世・・に心にくく・・・めでたき事に思ひかしづかれ給へる御宿世を・ぞ、わが家までは匂ひこねど、・・・めいぼくにおぼすに、又かくこの世にあまるまで響かしいとなみ給ふは、覺えぬよはひの末のさかりにもあるべきかな、と喜び・たまふを、北の方・は、心ゆかずものしとのみおぼしたり。女御の御まじらひの程などにも、おとどの御用意なきやうなるを、いよいよ恨めしと思ひしみ給へるなるべし。

八月には六條の・院造り果てて渡り給ふ。未申の町は、中宮の御

辰巳は　東南の一廓は源氏自身がおいでになる。

御方々の　各婦人達の御希望通りの景色をお作らせになつた。

南ひんがしは　東南の町の庭は。紫上方である。春のお前ともいふ。

春のもてあそび　春の觀賞物。

秋の前栽　秋の草花。

泉　遠くに泉水を湧出させて、その水を引いて來て遣水にする。

むとくに　見るかげもなく壓倒された秋の景色である。

舊宮なれば、やがておはしますべし。辰巳には殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住み給ふ對の御方、戌亥の町は明石の御方とおぼしおきてさせ給へり。もとありける池山をも、びんなき所なるをばくづしかへて、水のおもむき、山のおきてを改めて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを作らせ給へり。南のひんがしは山高く、春の花の木、數を盡して植ゑ、池のさま面白くすぐれて、お前近き前栽、五葉、紅梅、櫻、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑて、秋の前栽をば、むらむらほのかにまぜたり。中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植木どもを植ゑ、泉の水遠く澄まし遣水の音まさるべき岩を立てくはへ、瀧おとして、秋の野を遙に作りたる、その頃にあひて、さかりに咲き亂れたり。嵯峨の大井のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり。

北の東　花散里の住む方。花散里を夏の御方ともいふ。

昔覺ゆる　昔を思ひ出すよすがとなる花橘や。古今夏「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

くだに　木丹。龍膽の異名。

分けて　一部をさいて。

馬場の殿　五月に競馬を催す爲の馬場殿である。

西の町　明石上の方。冬の御方といふ。

北面築き分けて　北側を垣で仕切つて。

一度にと　各婦人とも同時にとお定めになつたが。

北の東は、涼しげなる泉ありて、夏の蔭によれり。お前近き前栽、呉竹、下風涼しかるべく、木高き森のやうなる木ども木深く面白く、山里めきて、卯の花の垣根殊更にしわたして、昔覺ゆる花橘、撫子、薔薇、くだになどやうの、花のくさぐさを植ゑて、春秋の木草、そのなかにうちまぜたり。東面は、分けて馬場の殿造り、埒ゆひて、五月の御遊び所にて、水のほとりに菖蒲植ゑしげらせて、向ひに御厩して、世になき上馬どもを整へ立てさせ給へり。西の町は、北面築き分けて、御藏町なり。隔ての垣に松の木繁く、雪をもてあそばむたよりに寄せたり。冬の初めの朝霜の結ぶべき菊の籬、われはがほなる柞原、をさをさ名も知らぬ深山木どもの木深きなどを移し植ゑたり。彼岸の頃ほひ渡り給ふ。一度にと定めさせ給ひしかど、騷

その夜そひて　その晩紫上に添うて引移つて來られた。河内本「その裝ひにて」

御前　前驅の人。

こちたき　仰々しい程ではなく、世間の非難もやと簡素にせられたので。

今一方　花散里。

曹司町　局町。

あて〲のこまげ　小さく仕切つて、それ〲に割當ててある部屋。「こまげ」は「小分け」である。

この町々の　四方の一廓々々の境には塀を構へたり廊を設けたりして往來の出來るやうにし、相互の關係を近しくし風情のあるやうに工夫された。

がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせ給ふ・。例のおい
らかに氣色ばまぬ花散里ぞその夜そひ・て移ろひ給ふ。春の御
しつらひは、このごろにあはねど、いと心殊なり・。御車十五、
御前四位五位がちにて、六位の殿上人などは、さるべき限りを
えらせ給へり。こちたき程にはあらず、世の謗りもやと省き給
へれ・ば、何事もおどろ〲しういかめしき事はなし。今一方の
御氣色も、をさ〲おとし給はで、侍從の君添ひてそなたはも
てかしづき・・給へば、げにかうもあるべき事なりけりと見え
たり。女房の曹司町ども、あて〲のこまげぞ、大方の事より
もめでたかりける。五六日過ぎ・て、中宮まかでさせ給ふ。こ
の御儀式はたさはい・へどいと所せし。御さいはひのすぐれ給へ
りけるをばさるものにて、・・御有樣の心にくくおもりかにお
はしませば、世に重くおもはれ給へる事、すぐれてなむおはし
ましける。この町々の中・の隔てには、塀ども廊などをとかく行

宮のお前　秋好中宮方のお庭。

袙　婦人や童女の身に近く着る服。

紫苑　表は蘇芳、裏は靑（花鳥說）

織物　文樣を織り出した絹布。

赤朽葉　赤味を帶びた朽葉色。

汗衫　童の上衣の上に着る服。

うるはしき　斯かる場合は正式の作法、故、女房を遣はすべきであるが、秋好は美しい童女を思ひきることはお出來にならなかつた。

こころから　春をお好のあなたも、せめて風のつてになりと我が宿の紅葉を御覽下さい。

風に散る　風に散る紅葉は貫目がない。私はこの岩根の松の千代までも春の花を見はやしませう。

き通はして、けぢかくをかしきあはひにしなし給へり。
九月になれば、紅葉むら〲色づきて、宮のお前えもいはずお
もしろし。風うち吹きたる夕暮に、御箱の蓋に、色々の花紅葉
をこきまぜて、こなたに奉らせ給へり。大きやかなるわらはの
濃き袙・紫苑の織物かさねて、赤朽葉の羅の汗衫、いといたう
馴れて、廊、渡殿の反橋を渡りてまゐる。うるはしき・ぎしき
なれど、わらはのをかしきをなむえおぼし捨てざりける。さる
所にさぶらひ馴れたれば、もてなし有樣、ほか・には似ず、好
ましうをかし。御消息には、
　こころから春待つ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ
若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返りはこの御箱
の蓋に苔敷き、いはほ・などの心ばへして、五葉の枝に、
　風に散る紅葉はかろし春の色を岩根・の松にかけてこそ見め
この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬ作りごとどもなり

かく取りあへず 斯く突嗟に思ひ付かれた機轉の程などを、中宮は興味深く御覽になる。

この紅葉の御消息 あの「紅葉を風のつてにだに見よ」の消息は實に憎らしいやうですな。

立田姫の 立田姫の思はくもありますから。

さし退きて 今は默つてゐて。

花の蔭に 春になつたら花の背景をしよつてこそ威張つた事もいへるでせう。

聞えかよはし 婦人達は互に消息を通はして居られる。

かずならぬ人は 取るにも足らぬ自分は、いつ引越したともなく目立たぬやうにと思つて。

大方の作法も 一體の作法も他の婦人達とあまり差別をつけずおも〳〵しく待遇された。

けり。（よ）かく取りあへず（ても）・思ひ寄り給へる故々（思慮の深さ）しさなどを、・をかしく（う）御覽ず。お前なる人々（中宮のお側付の女房達も）もめであへり。おとど（源氏）、「この紅葉（紫上に宣ふ詞）の御消息、いとねたげなめり・（かし）・。春の花ざかりに、この御いらへは聞え給へ。このごろ紅葉（秋の最中に紅葉をけなすのは）をいひくたさむは、（も）立田姫の（愛しと）・・思はむこと（ひぬべき）・・もあるを、さし退き（しぞ）て、花の蔭に立ちかくれてこそ強きこと・（は）は出でこめ」（な）・と聞え給ふも、いと若（源氏のさま）やかに盡きせぬ御有様の見どころ多かるに、いとど思ふやうなる御（六條院）すまひにて、聞えかよはし給ふ。大井（明石上）の御方は、かう方々（各婦人達の引越が定まってから）の御移ろひ定まりて、かずならぬ人は、いつと・（も）なく紛らはさむとおぼして、神無月になむ渡り（六條院に）給ひける。御しつらひ（部屋飾りや萬事は他の婦人達に劣らぬやうにして作れてこられた）、事の有樣劣らずして、わたし奉り給ふ。姫君（源氏は明石姫君の爲を思つて居られるから）の御ためをおぼせば、大方の作法も・（こと）・（に）・けぢめこよなからず、いと物々しく（う）（明石上を）もてなさせ給へり。

年月隔たりぬれど、飽(源氏は)かざりし夕顔をつゆ忘れ給はず、心々なる人の有様どもを見給ひかさぬるにつけても、あらまし(夕顔が生きて居つたらと)かばと、あはれに口惜しく(う)のみおぼしいづ。右近は何の人かずならねど、なほその(夕顔の)形見と見給ひて、らうたきものにおぼしたれば、古人(ふるびと)のかずに仕うまつり馴れたり。須磨の御移ろひの程に、對の上(紫上方に女房達全部を移した時から引續いて右近は紫上方に居る)の御方に、皆人々聞えわたし給ひし程(折)より、そなたにさぶらふ。心(右近の性質)よくかいひそめたるものに女君(紫上)も思したれど、心(右近の)のうちには、故君(夕顔が生きてゐたら)ものし給はましかば、明石の御方ばかりの・覺(御)えには劣り給はざらまし、さしも深き御志(源氏の性質を右近が思ふのである)なかりけるをだに、おとしあぶさず取りしたため給ふ御心長さなりければ、まいてやんごとな(紫上程ではなからうが)きつらにこそあらざらめ、この御殿(六條院)移りのかず(花散里や明石上など)のうちにはまじらひ給ひなまし、と思ふに、飽かず悲しくなむ思ひける。かの西の京にとまりし若君(玉鬘)をだに行方(ゆくへ)も知らず、偏へに物を思ひつつみ(夕顔の事を秘密にし)、又今更にかひなき事に(故・・こ)よりて、わが名漏らすなと口(源氏が)がた

心々なる 源氏はいろ〳〵氣質のかはつた婦人達に逢ふことの積るにつけても。

右近 夕顔の侍女で、今は源氏に仕へて居る。

古人のかずに 故參女房の仲間入をして源氏に仕へて居た。

かいひそめたる 物靜かな。ひつそりとした。

明石の御方 明石上に劣らぬ程の御寵愛は受けたであらうに、もと〳〵源氏はさまで愛しても居ない女をさへのけものにしても置かず、氣長に面倒を見て下さる方だから、夕顔が身分の高い婦人並といふ譯にはゆかぬ迄も、この六條院に引取つた婦人達の仲間入は出來たであらうに。

又今更に 今更愚癡をこぼしても甲斐ない事故。

わが名漏らすな 古今東歌「犬上のとこの山なるいさや川いさと答へて我名漏らすな」

くだりにけり　乳母も一緒に筑紫に。

若君の四つに　夕顔は玉鬘三歳の折死去。

母君の　乳母は若君の母夕顔の行方を知らうとして。

あやしき身に　卑しい自分如き者がお連れして筑紫に下るのは悲しくおもはれる事などを父君にそれとなくお知らせしようと思つたが。此處は河内本の如く「遙なる道におはせむ事の悲しき事」猶父君にや云々」とあるがよい。

父君　玉鬘の實父内大臣。昔の頭中將。

母君の　以下乳母等詞。夕顔は何處にいらつしやつたでせう。内大臣殿が夕顔はどうしたとお尋ねになつたら何と申上げよう。

幼き心地に　玉鬘は子供心に。

め給ひしを、憚り聞えて、尋ねても音づれ聞えざりし程に、その御乳母のをとこ、少貳になりていきければ、くだりにけり。かの若君の四つになる年ぞ筑紫へはいきける。母君の御ゆくへを知らむと、よろづの神佛に申して、夜晝泣き戀ひて、さるべき所々を尋ね聞えけれど、遂にえ聞き出でず。さらばいかがはせむ、若君をだにこそは御形見に見奉らめ、あやしき身に添へ奉りて、遙なる程におはせむ事の悲しき事などを、父君にほのめかさむと思ひけれど、さるべきたよりもなきうちに、「母君のおはしけむ方も知らず。尋ね問ひ給はばいかが聞えむ。まだよくも見馴れ給はぬに、をさなき人をとどめ奉り給はむも、うしろめたかるべし。知りながらはたゐて下りねと許し給ふべきにもあらず」など、おのがじ語らひ合せて、いとうつくしう、只今からけだかく清らなる御さまを、殊なるしつらひなき舟に乗せて漕ぎいづる程は、いと哀になむ覺えける。幼き心地に、

折々に　船中での事。

娘ども　少貳の娘で姉おもとと妹あてき。あてきは後に兵部の君といふ。

舟道ゆゆし　船路で泣くのは不吉だといつて少貳は悲しい中にも制した。

心若うおはせしものを　夕顔君は若々しい氣立の方でしたのにこんな景色もお目にかけたかつたな。

かへる波も　伊勢物語・後撰羇旅「いとどしく過ぎゆく方の戀しきに羨しくもかへる波かな」

舟人もの歌　船頭達も誰か戀しい人があるのか、船唄が何やら悲しげに聞える。「大島の」は浦といひかけた枕詞。河海抄「大島、筑前國也、鐘御崎近所なり」

來し方もの歌　前後も知らぬ廣々とした沖に出て何處の空で君を戀しく思つて居る事でせう。

鄙の別れに　古今雜下「思ひきや鄙の別に衰へて蜑の繩たぎいさりせむとは」都をはなれて遠方に來た悲しさに。

我は忘れず　萬葉七雜「千早振金の御崎を過ぎぬとも我は忘れじしかのすめ神」

母君を忘れず、折々に、「母の御もとへいくか」と問ひ給ふにつけて、涙絶ゆる時なく、娘どもも思ひこがるるを、舟道ゆゆしとかつは諫めけり。面白き所々を見つつ、心若うおはせしものを、斯かる道をも見せ奉るものにもがな、おはせましかば、我等は下らざらまし、と京の方を思ひやらるるに、かへる浪も羨しく心細きに、舟子どもの荒々しき聲にて、「うらがなしくも遠く來にけるかな」と謠ふを聞くままに、二人さしむかひて泣きけり。

　舟人もたれを戀ふとか大島のうらがなしげに聲のきこゆる

　來し方も行方も知らぬ沖に出でて哀いづくに君を戀ふらむ

鄙の別れに、おのがじし心をやりていひける。金の御崎を過ぎて、「我は忘れず」など、世と共のことぐさになりて、かしこに到り着きては、まいて遙なる程を思ひやりて、戀ひ泣きて、この君をかしづきものにて明し暮す。夢などに、いとた

同じさまなる　夕顔と同じ樣子をした女を夕顔と一緒に夢に見ると乳母は目ざめて後氣分がわるくて。六條院での有樣を夢に見るのである。

たゆたひつつ　出發を躊躇して。

我さへ打捨て　自分までが姫君をあとに殘して死んでしまつたら。

さるべき人々　父内大臣など。

都は廣き所なれば　京は廣いので、姫君の田舍で育たれた事なども噂に上るといふやうな事もあるまいと思ふから氣樂であらうと。

男子三人　長男は豐後介、それに二郎三郎。

まさかに見え給ふ時などもあり。同じさまなる女など・添ひ給・うて見え給へ・ば、名殘・心地あしくなやみなどしければ、なほ世になくなり給ひにけるなめり、と思ひなるも、いみじくのみなむ。

少貳任果ててのぼりなむとするに、遙けき程に、ことなる勢なき人は、たゆたひつつ、すが〱しくも出で立たぬ程に、おもき病ひして、死なむとする心地にも、この君の十ばかりにもなり給へるさまの、ゆゆしきまでをかしげなるを見奉りて、「我さへ打捨て奉りて・、いかなるさまにはふれ給はむとすらむ。・・あやしき所に生ひ出で給ふも、忝く思ひ聞ゆれど、いつしかも京にゐて奉りて、さるべき人々・にも知らせ・・・・・・・・・・奉らむにも、都は廣き所なれば、いと心やすかるべしと思ひ急ぎつるを、此處ながら命堪へずなりぬること」と、うしろめた・がる。男子三人あるに、「只この姫君・京にゐて・・奉るべき事を思へ。わが身の孝をばな思ひそ」となむいひおきける。その人の御子とは館の人にも・・・知らせず、只うまごのかしづくべき故あるとぞ・いひなしければ、人に・見せず限り・・・なくかしづき聞ゆる程に、・・俄に亡せぬれば、あはれに心細くて、ただ京の出で立ちをすれど、この少貳の仲あしかりける國の人多くなどして、とざまかうざまにおぢ憚り・・・て、我にもあらで年を過ぐすに、・この君ねび整ひ給ふままに、母君よりもまさりて清らに、父おとどの・筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。心ばせ・おほどかにあらまほしう物し給ふ。聞きついつつ、すいたる田舍人ども、心がけ消息がるいと多かり。ゆゆしくめざましく覺ゆれば、誰も〱・聞き入れず。「かたちなどはさてもありぬべけれど、いみじきかたはのあれば、人にも見せで、尼になしてわが世の限りはもたらむ」といひ散らしたれば、「故少貳のうまごは、かたはなむあ

わが身の孝　私の死後の供養など念頭におくな。

その人の御子とは　内大臣の姫君だとは館の人にも知らせず、只大事に育てねばならぬ譯のある孫だと吹聽してあるので。

聞きついつつ　玉鬘の評判を聞き傳へて。

ゆゆしくめざましく　いま〱しく又癪にさはるので、誰をも相手にしない。

かたちなどは　孫娘は器量はまあ〱かなりだが、ひどい缺陷があるから、誰にも縁づけずに尼にして、私の生きて居る間は手許におく積りだ。

いかさまにして　どういふやうにして、都にお連れして父殿にお知らせ申さう。

いときなき程を　内大臣は姫君の二三歳頃まで世話されたのである。帚木卷の撫子の歌は當時の事である。

所につけたる　場所相應の縁組が出來て、その地に住みついてしまつた。

ねさう　細流抄「年星也。又年三。正五九月此義可レ然歟。後世の勸めなどし給ふ也」和秘抄「ねんさうといひて年に三たび精進をする也。當年星をまつる事をもいふといへり」湖月師説「年三可レ用」

少貳のうまご　玉鬘の事。

大夫の監　監は太宰の大監で相當は六位。その五位になつたのを大夫の監といふ。

なる。あたらものを」といふ・・・。聞くもゆゆしく・・・・。

乳母「いかさまにして、都にゐて奉りて、父おとどに知らせ奉らむ。いときなき程を、いとらうたしと思ひ聞え給へりしかば、さりともおろかには思ひ捨て聞え給はじ」などいひ歎く。佛神に願を立てて・なむ念じける。娘どももをのこ・どもも、所につけたるよすがども・出で來て、住みつきにけり。心のうちにこそいそぎ思へど、京の事は、いや遠ざかるやうに隔たりゆく。物おぼし知るままに、世をいと憂きものにおぼして、ねさうなどし・給ふ。二十ばかりになり給ふままに、生ひととのほり・て、いと・あたらしくめでたし。この住む所は、肥前の國とぞいひける。そのわたりにも、いささかよしある人は、まづこの少貳のうまごの有樣を聞き傳へて、なほ絶えず音づれくるも、いと・・・いみじう耳かしがましきまでなむ。大夫の監とて、肥後の國にぞう廣くて、彼處につけては覺えあり、勢いかめしきつはものありけり。むくつけき心のなかに、いささかすきたる心のまじりて、かたちある女を・・・あつめて見むと思ひける。この姫君を聞きつけて、監「いみじきかたはありとも、我は見隱してもたらむ」と、いと・・懇にいひかかるを、いとむくつけく思ひて、「いかで斯かる事を聞かで、尼になりなむとす」といはせたりければ、いよいよ危がりて、おしてこの國に越え來ぬ。このをのこどもを呼び取りて語らふことは、監「思ふさまになりなば、同じ心に勢をかはすべきこと」など語らふに、二人はおもむきにけり。二人「暫しこそ似げなくあはれと思ひ聞えけれ、おのおのわが身のよるべと頼まむに・、いと頼もしき人なり。これにあしくせられては、この近き世界にはめぐらひなむや。よき人の御筋といふとも、・親にかずまへられ奉らず世に知られでは、何のかひかはあらむ。この人のかく懇に思ひ聞え給へるこそ今は御さいはひなれ。さるべきにてこそは斯か

かたちある女　器量のよい女。

このをのこども　少貳の三人の息子達。

二人　次郎と三郎と。

よき人の　姫君は高貴の方の胤であつても、親からは子の中に入れられず。

さるべきにて　縁あればこそこんな田舍にもお下りになつたのです。

せぬ事どもも　滅多にしない亂暴もする事でせう。

たい〴〵しくあたらしき　すまぬ事でもあり又惜しい事でもある。

故少貳の　三六〇頁參照。

母君　夕顏。

かひなくて　母上がありながらその甲斐もなく。

おこす　玉鬘に。

る世界にもおはしましけめ・・。逃げ隠れ給ふとも、何のたけき事かはあらむ。負けじ魂に怒りなば、せぬ事ども・もしてむ」といひおどせば、いといみじと聞きて、中のこのかみなる豊後の介なむ、「なほいとたい〴〵しくあたらしき事なり。故少貳の宣ひ・・し事もあり。とかく構へて京にあげ奉りてむ」といふ。娘どもも泣きまどひて、「母君の・・かひなくてさすらへ給ひて行方をだに知らぬかはりに、人なみ〳〵にて見奉らむとこそ思ふに、さるもののなかにまじり・・・給ひなむこと」と思ひ歎くをも知らで、我はいと覺え高き身と思ひて、文など書きておこす・。手などきたなげなう書きて、・・唐の色紙・かうばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとだみたりける。みづからもこの家の次郎を語らひ取りて、うちつれて來たり。年三十ばかりなるをのこの、たけ高く・・物々しく・・ふとりて、きたなげなけれど、思ひなしうとまし

さまかへたる　春の夕暮に來るとは風變りな事だ。

秋ならねども　古今戀一「いつとても戀しからずはあらねども秋の夕べは怪しかりけり」この歌によつて、秋ではないが戀ひしかつたと見えると嗤笑した句。

祖母おとど　乳母の事。玉鬘の祖母といひなして居るのである。

いかうに　姫君を專心にお世話しようと思つて、奮發して今日は來にくいところを無理に推參したのです。

おとど　女に對する敬語。前に祖母おとどとあつた。

よからぬ女なども　私がつまらぬ女どもを澤山持つて居るのをお聞きになつていやがられるのですね。

わが君　玉鬘の事。

く、荒らかなる振舞・・、見るもゆゆしく覺ゆ。色合心地よげに、聲いたうかれてさへづり居たり。懸想人は、夜に隠れたるをこそよばひとはいひけれ、さまかへたる春の夕暮なり。秋ならねども怪しかりけりと見ゆ。心を破らじとて、祖母おとど出であふ。「故少貳の、いとなさけび、きら〳〵しく物し給ひしを、いかでかあひ語らひ申さむと思ひ給へしかども、さ・る志を・も見せ聞えず侍りし程に、いと悲しくてかくれ給ひにしを、そのかはりに、いかうに仕う・まつるべくなむ、志を勵まして、今日はいとひたぶるに強ひてさぶらひつる。このおはしますらむ女君、筋ことに承れば、いとかたじけなし。只なにがしらが私の君と思ひ申して、頂になむ捧げ奉るべき。おとどもしぶしぶにおはしげなる事・は、よからぬ女など・もあまたあひ知りて侍るを、聞召しうとむななり。さりとも、すやつばらを、ひとしなみにはし侍りなむや。わが君をば、后の位に・おとし奉らじ

宿世拙き　玉鬘は不運の人やら、遠慮すべき仔細があつて、結婚は致すまいと内々歎いて居るやうですから、氣の毒に思つて困つてゐます。

その日ばかりといふに　いつ何日に玉鬘を迎へに來るといふので。

季の果　三月は春季の終で嫁娶によくないと當座のいひのがれ。

君にもし　玉鬘の心に背くやうな事があればどんな神罰も受けますと鏡の明神にかけて誓ひませう。花鳥餘情「肥前國松浦郡鏡明神は太宰少貳藤原廣繼が靈也。又鏡山は神功皇后の御鏡化して石となれるを鏡山といへり。これをも鏡の神と云ふべきにや。下の詞に、松浦箱崎同社なりといへるに付て、八幡と同體の由聞え侍り。然らば鏡の神に此義もあるべき也」

仕うまつりたり　よく出來た。

いと久しきに　あまり長く待たせるので乳母は困つて、心に浮んだまま。

ものをや」など、いとよげに(愉快さうに)いひ續く。乳母「いかがは。かく宣ふ(さう仰しやつて頂)を(いて)、いと幸(さいはひ)ありと思ひ(う)給ふるを、宿世拙き人にや侍らむ、思ひ憚ること侍りて、いかでか人に(は)・御覧ぜられむと(なむ)・・、(玉鬘が)人知れず歎きはべるめれば、心苦しう見給へ煩ひぬる」といふ。監「更になおぼし憚りそ。天下(てんが)に(片)・目つぶれ足折れ給へりとも、なに(拙者はそれを直してあげませう)がしは仕うまつりやめ(奉り)・・てむ。國の内の佛神は、己になむ靡き給へる」など誇り居たり。その日ばかりといふに、乳母「この月は季(き)の果(はて)なり」など、田舍びたる事をいひのがる。(監が歸りぎはに)おりていくきはに、歌よままほしかりければ、やや久・・・しう思ひめぐらして、

監「君にもし心たがはば松浦(まつら)なるかがみの神をかけて誓はむ

この和歌は、仕うまつりたりとなむ思ひ給ふる」とうちゑみたるも、世づかずうひうひしや。(乳母はあきれて)あれにもあらねば、返しすべくもおもはねど、(ほえず)(こ)・娘どもによますれど(返歌させるが)、娘「まろはまして(恐ろしさに夢中だ)物も覺えず」とて居たれば、(乳母は)いと久しきに思ひ・・煩ひて、うち思ひけるま

年を經ての歌　永年姫君の幸福を祈つた甲斐もなく、その念願が聞き届けられずに監に取られたら、鏡の明神が恨めしく思はれるだらう。

おぼさらるる　湖月抄本の儘。河内本よし。

おとど　祖母おとど、乳母の事。

さはいへど　「まろはまして物もおぼえず」といひはしたが。

この人の　姫君が片輪な爲に、もしあなたが結婚の約束を破られたら恨めしい事だらうといふ祖母は、玉鬘の爲に幸を祈つてゐたところ、貴方から嬉しい御申入れを受けましたので、祖母は非常に喜んで「何分にもこの孫女は人と違つてゐる（不具者）のに、若し此度の幸運を神が取りはづすやうなことをなさつたら（不具者に二度と結婚談など起らうとおもはれぬから）どんなにつらく思はれることだらう」といふことを耄碌した祖母が神を引合に出して申上げそこなつたのです。

おい　おう。納得の意をあらはす詞。

まに、

乳母「〽年を經て祈る心のたがひなばかがみの神をつらしとや見む

と(怖ろしがつて)わななかし出でたるを、監「(ま)いでや(靑までや)、こはいかにおぼさらるる(せ)・・(事ぞ)」と、(不意に)ゆくりかに寄り來たるけはひに、(おとど)・・・おびえて、・・おとど色もなくなりぬ。娘たちは、・さはいへど心強く笑ひて、娘(玉鬘)「この人の、さま殊に物し給ふを、引きたがへ侍・ら・ば・、つらく思はれむを、なほほけぼけしき人の、神かけて聞えひがめ給ふなめりや」と解き聞かす。監「おい、さりさり(さうだく)」とうなづきて、監「(面白い歌だ)をかしき御口つきかな。なにがしら、(かう)・・田舍びたりといふ名こそ侍れ、口惜しき民には(た)・侍らず。都の人とても、何ばかりかあらむ。皆知りて侍り。(猶)・な(私共を)おぼしあなづりそ」とて、又(歌を)よまむと思へれども、・(出來なかつたと見えて)堪へずやありけむ、(往)いぬめり。次郎が(かう)・・語らひ取られたる(を見るに)・・・も(乳母の心に)いと怖ろしく心憂くて、この(長男)豐後の介を(上洛を促すが)責むれば、豐後「(どうしたらい、でせう)いかがは仕うまつるべからむ。語